

方保田東原遺跡(8)

2007

熊本県山鹿市教育委員会

かとうだ ひがしぼる い せき
方保田東原遺跡(8)

2007

熊本県山鹿市教育委員会



1



2



4



3



5



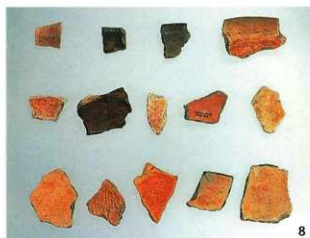
6



7

- 1 137-1 番地出土 銅鐵
- 2 110-2 番地出土 玉類
- 3 110-2 番地出土 小型仿製鏡
- 4 148番地出土 絵画土器片

- 5 110-2 番地出土 滑石製紡錘車
- 6 151番地第1グリッド 3号溝出土土器
- 7 151番地第1グリッド 2号住居跡出土土器



8



9



10



11



12



13

8、9 110-2 番地出土 内面朱付着土器片

10、11 110-2 番地出土 石杵

12、13 110-2 番地出土 13号住居跡出土土壺

序 文

方保田東原遺跡は、弥生時代の中九州を代表する大集落遺跡として、昭和60年12月に国の史跡として指定を受けております。

平成8年度から平成12年度にかけて、遺跡の範囲確認調査を国と県の補助をいただきながら行いましたところ、その範囲は約35haという広大な面積であることが分かり、以後その保存に向けて進み出しているところであります。

平成13年度から平成16年度には、遺跡の内容確認調査として指定地区内を含めた調査を行いました。本書は、このうち平成14年度と15年度の調査成果をまとめものです。

詳細は本文に譲りますが、この調査では、小型仿製鏡をはじめ、数々の鉄器、土器が出土したほか、幅3mを超える大溝や住居跡群などが見つかり、弥生時代から古墳時代にかけて菊池川中流域の中心的な役割を担った集落であったことを示す、数々の発見がありました。

この報告書が広く活用され、今後の研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、多年にわたりましてご指導を賜りました小田先生、甲元先生、高島先生の調査検討委員会の先生方、そして坂井主任調査官をはじめ文化庁、熊本県教育委員会など関係機関の方々、さらに調査の際、土地の提供を快く承諾していただきました地権者の方々のご協力・ご指導に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

山鹿市教育長 田 中 宏

例 言

- 1 本書は、山鹿市教育委員会が国庫及び県費の補助を受けて平成14年度(2002)及び平成15年度(2003)に実施した方保田東原遺跡確認調査の報告書である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
(平成14年度)
 - ①山鹿市方保田110番地2
 - ②山鹿市方保田148番地
 - ③山鹿市方保田151番地(平成15年度)
 - ①山鹿市方保田146番地
 - ②山鹿市方保田137番地1
 - ③山鹿市方保田30番地及び33番地
- 3 整理作業は山鹿市出土文化財管理センターで行った。
- 4 調査区の設定杭測量は有限会社遺跡整備計画に委託した。
- 5 発掘調査での遺構実測は、山口健剛、宮崎歩、島崎貴代子、山崎綱子、田上重紀が主に行い、一部土野雄貴、椎葉天昭も行った。遺構写真撮影は山口が行った。航空写真は有限会社遺跡整備計画(平成14年度)と株式会社九州航空熊本営業所(平成15年度)に委託した。
- 6 遺物の実測は、土器を山口のほか、城葉子、小原朱実、大森よう子、田上重紀、古閑美奈、石器及び鉄器は山口、宮崎が実測し、写真撮影はすべて山口が行った。
- 7 炭化種子及び炭化材の鑑定は頼古環境研究所に委託した。
- 8 鉄器の保存処理については、熊本県教育委員会文化財収蔵庫のお世話になった。
- 9 土器及び石杵に付着する赤色顔料の鑑定は、山口が肉眼で行った。また、ここでは水銀朱を朱と呼び、酸化鉄をベンガラと呼ぶ。
- 10 本書の執筆、編集は山口が行った。
- 11 出土遺物は山鹿市出土文化財管理センターで保管している。

本文目次

巻頭図版

序文

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 発掘作業及び整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3節 調査の歴史	2
第3章 調査の方針と方法及び法令手続き	2
第1節 発掘作業の方針	2
第2節 調査の方法	4
第3節 整理作業の方針	5
第4節 整理作業の方法	5
第5節 法令等手続き	5
第4章 調査の方法と成果	8
第1節 平成14年度の調査	8
Ⅰ はじめに	8
Ⅱ 151番地	9
Ⅲ 110-2番地	36
Ⅳ 148番地	60
第2節 平成15年度の調査	73
Ⅰ はじめに	73
Ⅱ 146番地	74
Ⅲ 137-1番地	91
Ⅳ 30・33番地	108
第5章 科学分析	113
第6章 まとめ	119
土器観察表	123
鉄器観察表	149
写真図版	153
報告書抄録	

挿図目次

第1図 方保田東原遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図 方保田東原遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図	4
第3図 方保田東原遺跡のこれまでの調査地図	6
第4図 平成14年度調査地図	8

第5図	151番地第1グリッド遺構配置図	9
第6図	151番地第1グリッド土層断面図	10
第7図	151番地第1グリッド 2号、3号住居跡実測図	11
第8図	151番地第1グリッド 2号住居跡出土遺物実測図①	12
第9図	151番地第1グリッド 2号住居跡出土遺物実測図②	13
第10図	151番地第1グリッド 3号住居跡出土遺物実測図	13
第11図	151番地第1グリッド 1号～3号土坑実測図	14
第12図	151番地第1グリッド 1号土坑出土遺物実測図	15
第13図	151番地第1グリッド 5号、6号土坑出土遺物実測図	15
第14図	151番地第1グリッド 2号土坑出土遺物実測図	15
第15図	151番地第1グリッド 1号溝実測図	17
第16図	151番地第1グリッド 1号溝出土遺物実測図	17
第17図	151番地第1グリッド 3号溝実測図	18
第18図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ土層断面実測図	19
第19図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ遺物出土状況実測図	20
第20図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ（上層）出土遺物実測図①	21
第21図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ（上層）出土遺物実測図②	22
第22図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ（中層）出土遺物実測図	23
第23図	151番地第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ（下層）出土遺物実測図	24
第24図	151番地第1グリッド 3号溝東側サブトレンチ遺物出土状況実測図	25
第25図	151番地第1グリッド 3号溝東側サブトレンチ（上層）出土遺物実測図	26
第26図	151番地第1グリッド 3号溝東側サブトレンチ（中層）出土遺物実測図	27
第27図	151番地第1グリッド 土器群出土遺物実測図①	28
第28図	151番地第1グリッド 土器群出土遺物実測図②	29
第29図	151番地第1グリッド出土内面朱付土器片実測図	29
第30図	151番地第1グリッド出土鉄実測図	30
第31図	151番地第1グリッド 遺構に伴わない遺物実測図	31
第32図	151番地第2グリッド 2号住居跡出土遺物実測図	32
第33図	151番地第2グリッド 2号住居跡出土鉄実測図	32
第34図	151番地第2グリッド遺構配置図及び土層断面図	33
第35図	151番地第2グリッド 遺構に伴わない遺物実測図	34
第36図	110-2番地遺構配置図	36
第37図	110-2番地グリッド土層断面実測図	37
第38図	110-2番地 C-4区遺構配置図	38
第39図	110-2番地 1号住居跡出土遺物実測図	39
第40図	110-2番地 2号住居跡出土遺物実測図	39
第41図	110-2番地 2号住居跡出土石片実測図	40
第42図	110-2番地 3号住居跡出土遺物実測図	40
第43図	110-2番地 5号住居跡実測図	41
第44図	110-2番地 5号住居跡出土遺物実測図	41
第45図	110-2番地 8号住居跡出土遺物実測図	42
第46図	110-2番地 6号住居跡、11号土坑ほか実測図	42
第47図	110-2番地 10号住居跡出土遺物実測図	43
第48図	110-2番地 11号住居跡出土遺物実測図	43
第49図	110-2番地 13号住居跡実測図	43
第50図	110-2番地 13号住居跡出土遺物実測図	44
第51図	110-2番地 15号、16号住居跡実測図	45
第52図	110-2番地 15号住居跡出土遺物実測図	46
第53図	110-2番地 17号住居跡出土遺物実測図	46
第54図	110-2番地 17号住居跡実測図	46
第55図	110-2番地 18号住居跡出土遺物実測図①	47

第56図	110-2番地	18号住居跡出土遺物実測図②	48
第57図	110-2番地	土坑出土遺物実測図	49
第58図	110-2番地	溝出土遺物実測図	50
第59図	110-2番地	1号カマド実測図	50
第60図	110-2番地	2号カマド実測図	50
第61図	110-2番地	1号カマド出土遺物実測図	51
第62図	110-2番地	2号カマド出土遺物実測図	51
第63図	110-2番地	遺構に伴わない遺物実測図①	52
第64図	110-2番地	遺構に伴わない遺物実測図②	53
第65図	110-2番地出土縄文土器実測図		54
第66図	110-2番地出土内面朱付着土器片実測図		55
第67図	110-2番地出土紡錘車、土製品等実測図		56
第68図	110-2番地出土玉類実測図		57
第69図	110-2番地出土小型仿製鏡実測図		57
第70図	110-2番地出土石器実測図		57
第71図	110-2番地出土鉄実測図		58
第72図	148番地調査区配置図		60
第73図	148番地第1トレンチ遺構配置図		61
第74図	148番地第1トレンチ西壁土層断面図		63
第75図	148番地第1トレンチ	1号溝実測図	64
第76図	148番地第1トレンチ	1号溝出土遺物実測図	64
第77図	148番地第1トレンチ	2号溝実測図	65
第78図	148番地第1トレンチ	1号住居跡実測図	65
第79図	148番地第1トレンチ	2号住居跡実測図	65
第80図	148番地第1トレンチ	2号住居跡出土遺物実測図	66
第81図	148番地第1トレンチ	2号住居跡出土鐔形土製品実測図	67
第82図	148番地第1トレンチ	6号住居跡実測図	68
第83図	148番地第1トレンチ	6号住居跡出土遺物実測図	68
第84図	148番地第1トレンチ	遺構に伴わない遺物実測図①	69
第85図	148番地第1トレンチ	遺構に伴わない遺物実測図② [絵画土器]	70
第86図	148番地出土鉄実測図		70
第87図	148番地第2トレンチ遺構配置図及び土層断面実測図		70
第88図	148番地第2トレンチ	3号住居跡実測図	71
第89図	148番地第2トレンチ	3号住居跡出土遺物実測図	71
第90図	148番地第2トレンチ	遺構に伴わない遺物実測図	72
第91図	平成15年度調査地図		73
第92図	146番地調査区配置図		74
第93図	146番地遺構配置図		75
第94図	146番地調査区土層断面図		76
第95図	146番地	1号住居跡実測図	76
第96図	146番地	1号住居跡出土遺物実測図①	77
第97図	146番地	1号住居跡出土遺物実測図②	78
第98図	146番地	1号住居跡出土遺物実測図③	79
第99図	146番地	2号住居跡出土遺物実測図	80
第100図	146番地	A-3区遺構検出状況実測図	80
第101図	146番地	3号住居跡出土遺物実測図	81
第102図	146番地	7号住居跡出土遺物実測図	81
第103図	146番地	12号住居跡出土遺物実測図	81
第104図	146番地	11号住居跡出土遺物実測図	82
第105図	146番地	13号住居跡出土遺物実測図	82
第106図	146番地	6号土坑出土遺物実測図	83

第107図	146番地	清実測図及び復原図	84
第108図	146番地	1号土坑実測図	85
第109図	146番地	1号土坑出土遺物実測図	85
第110図	146番地	遺構に伴わない遺物実測図①	86
第111図	146番地	遺構に伴わない遺物実測図②	87
第112図	146番地	遺構に伴わない遺物実測図③	88
第113図	146番地	遺構に伴わない遺物実測図④	88
第114図	146番地	出土鉄実測図	89
第115図	146番地	遺物出土地ドット	90
第116図	137-1番地	周辺検出遺構配置図	91
第117図	137-1番地	調査区配置図	92
第118図	137-1番地	第1グリッド 遺構配置図及び土層断面図	93
第119図	137-1番地	第1グリッド 8号土坑実測図	95
第120図	137-1番地	第1グリッド 8号土坑出土遺物実測図	95
第121図	137-1番地	第1グリッド 土器群出土遺物実測図①	96
第122図	137-1番地	第1グリッド 土器群出土遺物実測図②	97
第123図	137-1番地	第1グリッド 清実測図	97
第124図	137-1番地	第1グリッド出土内面未付着土器片実測図	98
第125図	137-1番地	第1グリッド 遺構に伴わない遺物実測図①	98
第126図	137-1番地	第1グリッド 遺構に伴わない遺物実測図②	99
第127図	137-1番地	第1グリッド 遺構に伴わない遺物（石器、土鍾）実測図	99
第128図	137-1番地	第2グリッド 遺構配置図及び土層断面図	100
第129図	137-1番地	第2グリッド 6号住居跡出土遺物実測図	101
第130図	137-1番地	第2グリッド 3～5号、8号住居跡出土遺物実測図	102
第131図	137-1番地	第2グリッド 土坑出土遺物実測図	102
第132図	137-1番地	第2グリッド 遺構に伴わない遺物実測図	104
第133図	137-1番地	第3グリッド 遺構配置図及び土層断面図	105
第134図	137-1番地	第3グリッド 1号住居跡出土遺物実測図	105
第135図	137-1番地	第3グリッド 遺構に伴わない遺物実測図	106
第136図	137-1番地	出土鉄実測図	106
第137図		中世道路想定図	107
第138図	30・33番地	調査区配置図	108
第139図	30・33番地	第1トレンチ実測図	109
第140図	30・33番地	第2トレンチ実測図	109
第141図	30・33番地	第3トレンチ実測図	110
第142図	30・33番地	第4トレンチ実測図	110
第143図	30・33番地	第4トレンチ 1号清出土遺物実測図	111
第144図	30・33番地	第4トレンチ 1号清出土石器実測図	112
第145図	30・33番地	第4トレンチ 2号清出土遺物実測図	112
第146図	方保田東原遺跡中央～東部	弥生時代後期後半頃における機能的区域想定図	120

表 目 次

第1表	方保田東原遺跡及び周辺遺跡調査歴一覧表	7
第2表	方保田東原遺跡（148番地 第1トレンチ 2号住居跡出土）種実同定結果	118
第3表	方保田東原遺跡（H14年度調査地出土）樹種同定結果	118
第4表	151番地出土土器観察表	125
第5表	110-2番地出土土器観察表	131
第6表	148番地出土土器観察表	136
第7表	146番地出土土器観察表	139

第8表	137-1番地出土土器観察表	143
第9表	30・33番地出土土器観察表	147
第10表	鉄観察表	151

図 版 目 次

PL 1	151番地 遺構① (遠景、第1グリッド全景)
PL 2	151番地 遺構② (第1グリッド1号溝、土器群、住居跡)
PL 3	151番地 遺構③ (第1グリッド3号溝中央サブトレンチ)
PL 4	151番地 遺構④ (第1グリッド3号溝東側サブトレンチ、土坑)
PL 5	151番地 遺構⑤ (第1グリッド1号土坑、第2グリッド全景、住居跡)
PL 6	151番地 遺物① (第1グリッド3号溝出土遺物)
PL 7	151番地 遺物② (第1グリッド3号溝出土遺物、2号住居跡出土遺物)
PL 8	151番地 遺物③ (第1グリッド2号住居跡出土遺物、家形土器片、不明銅製品)
PL 9	151番地 遺物④ (鉄、鋳造鉄片、鋸歯文・波状文のある土器片)
PL 10	110-2番地 遺構① (遠景、全景)
PL 11	110-2番地 遺構② (住居跡)
PL 12	110-2番地 遺構③ (住居跡)
PL 13	110-2番地 遺構④ (住居跡、遺物出土状況)
PL 14	110-2番地 遺物① (土器、内面朱付着壺)
PL 15	110-2番地 遺物② (18号住居跡出土遺物)
PL 16	110-2番地 遺物③ (土器、不明土器、墨書土器)
PL 17	110-2番地 遺物④ (縄文土器、鉄、小型仿製鏡、玉類、紡錘車、磨製石斧、石杵)
PL 18	148番地 遺構① (遠景、全景、1号溝、2号住居跡)
PL 19	148番地 遺構② (第1トレンチ全景、第2トレンチ全景)
PL 20	148番地 遺物 (土器、鐔形土製品、絵画土器、瓦質土器)
PL 21	146番地 遺構① (遠景、全景)
PL 22	146番地 遺構② (1号住居跡、B-1～B-2区)
PL 23	146番地 遺構③ (1号土坑、溝)
PL 24	146番地 遺構④ (A-3～B-3区、B-3区)
PL 25	146番地 遺物① (1号住居跡出土遺物)
PL 26	146番地 遺物② (1号住居跡出土遺物、石銅片、ミニチュア土器)
PL 27	146番地 遺物③ (鉄、竹管文のある壺)
PL 28	137-1番地 遺構① (第1グリッド全景、溝)
PL 29	137-1番地 遺構② (5号土坑、土器群、8号土坑)
PL 30	137-1番地 遺構③ (第2グリッド全景、カマド、6号住居跡、第3グリッド全景)
PL 31	137-1番地 遺物 (銅鏃、土器、磨製石斧、鉄)
PL 32	30・31番地 遺構 (遠景、第1～4トレンチ、第4トレンチ1号溝)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

方保田東原遺跡は、昭和60年12月に史跡の指定を受け、以後断続的に調査を継続してきた。

平成8年度より、国・県の補助を受けながら遺跡範囲確認調査を実施し、遺跡面積が約35haにも及ぶ大集落遺跡であることが判明した。平成13年度から平成16年度にかけては、遺跡内容確認調査で調査を継続し、指定地周辺などを調査した。

遺跡内容確認調査では、遺跡の中心地を始めとした各地区の役割を把握することを目的として行った。これまでの調査ではトレンチを主体としていたが、調査区の幅が2～4mでは性格を把握できない遺構が多かったため、グリッド設定により面的な調査を行った。

調査地選定については、調査検討委員会でのご助言とともに、これまで何度も開発予定の計画があがった場所を優先的に選んだ。しかし結果的に、対象地の大半が民有地であったため、調査の同意を得やすい休耕地が選ばれてしまい、必ずしも効果的な調査地選定とはならなかった。

平成14年度の調査地は、151番地、148番地、110番地2の合計3筆で、指定地に南接するエリアにあたる。平成15年度には、3地点（146番地、137番地1、30・33番地）を調査地とした。

第2節 発掘作業及び整理作業の経過

(1) 概要

①平成14年度

調査に対する地権者の同意を9月中旬に得て、10月に開始。3月10日に終了した。整理作業は、平成15年1月に着手して、作業を断続的にを行い、平成17年3月に終了した。

②平成15年度

発掘調査は、5月下旬に地権者の同意を得て、6月に開始。12月に終了した。整理作業は、平成15年8月に着手して、断続的に平成17年11月に終了した。

(2) 体制

調査主体 山鹿市教育委員会
調査責任者 田中 宏（山鹿市教育長）
発掘総括 池田 幸一（文化課長）〔平成14年度〕
中村幸史郎（首席研究員）〔平成15年度〕
調査指導 小田富士雄（福岡大学文学部教授）
甲元 真之（熊本大学文学部教授）
高島 忠平（佐賀女子短期大学教授）
坂井 秀弥（文化庁記念物課主任調査官）
福宜田佳弘（文化庁記念物課文化財調査官）
木崎 康弘（熊本県教育庁文化課第2調査係長）〔平成14年度〕

西住欣一郎（熊本県教育庁文化課第2調査係長）〔平成15年度〕

木村 元浩（熊本県教育庁文化課参事）
隈 昭志（山鹿市立博物館館長）

調査担当 山口 健剛（文化課主事）〔平成14年度〕
（博物館研究員）〔平成15年度〕

宮崎 歩（博物館研究員）〔平成15年度〕
調査事務 松永きみよ（博物館主査）〔平成14年度〕

北原美智子（博物館主査）〔平成15年度〕
発掘補助員 椎葉 天昭（山鹿市教育委員会嘱託）〔平成15年度〕

整理補助員 前田 軍治（山鹿市教育委員会嘱託）
（※職名は調査当時）

発掘作業員
〔平成14年度〕

小山武行、土野雄貴、島崎貴代子、田上亜紀、手島國寛、富田スミ子、中村幸一郎、山崎絹子、若杉清美、和田賢一、山鹿市シルバー人材センター会員

（堀京之助、堀比沙子、若杉敦子、武藤代子、武藤栄一、岩本正美、井口計介、佐藤昭三、築島節子、石村裕幸、原口洋一、富田勝四郎）

〔平成15年度〕
島崎貴代子、竹熊健志、田上亜紀、手島國寛、徳永敦子、山鹿市シルバー人材センター会員（堀京之助、若杉敦子、武藤代子、武藤栄一、岩本正美、井口計介、築島節子、石村裕幸、原口洋一、富田勝四郎、平尾トシ子、平尾直孝、永田敏）

整理作業員〔平成14、15年度〕
王丸ゆかり、大森よう子、岡小夜子、小川穂奈美、小原朱実、垣田菜美、古閑美奈、島崎貴代子、城葉子、田上亜紀、中山三恵子、森みつよ、山口美智子、山崎絹子

調査助言・協力者
次の皆様には大変お世話になりました。感謝申し上げます。

本田光子（独立行政法人国立博物館九州国立博物館）、下村智（別府大学）、田尻義子（九州大学大学院人文科学研究科）、南健太郎（熊本大学大学院文学研究科）、福山賢生（地権者）、若杉一徳（地権者）、宮本至誠（地権者）、富野英男（地権者）、杉守安敏（地権者）、若杉ミチ子（地権者）、松村敏幸（地権者）、地元区長ほか周辺住民

（順不同 敬称略）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

山鹿市は、中九州の熊本県北部に位置し、北は大分県日田市、福岡県八女郡立花町、南は鹿本郡植木町、西は玉名郡和水町、東は菊池市に接する。市の面積は約300平方㎞で、人口は約6万人を数える。

市の南部には東から西へかけて菊池川が流れ、広大な田園風景が広がる。また、市北部においては標高1,052mの八ヶ岳岳を始めてとして400～600m級の山々（筑肥山地）が東西に連なる。

方保田東原遺跡は、市の南部の菊池川に沿う標高32～36mの台地上に立地する。この台地は、南側は菊池川、北側は方保田川に挟まれ、台地西部には南から流れる千田川が合流する。

第2節 歴史的環境

山鹿市は菊池川のもたらす肥沃な土地に恵まれ、縄文時代から中世まで絶え間なく数多くの遺跡が存在する。チブサン古墳や弁慶ヶ谷古墳に代表されるような装飾古墳をはじめ、全国に著名な文化財も多い。ここでは、方保田東原遺跡周辺部である山鹿市中央部を中心に市内の遺跡を時代ごとに概観してみる。

旧石器時代

この時代の遺跡は、非常に少ない。長沖遺跡で黒曜石のマイクロアが1点、蒲生下原遺跡で安山岩製の石槍と黒曜石製の細石刃、マイクロアが出土している。また、方保田（大道小）でも2点出土している。

縄文時代

早期の主な遺跡としては、蒲生上の原遺跡が挙げられる。ここでは円筒形条痕文土器のほか、県下では初めての帯状施文の押型文土器が出土している。前期、中期の遺跡が極めて少ない。後期以降になると、遺跡の数は比較的多くなり、遺物の量も増え、東鍋田遺跡、牛草遺跡、城下原遺跡、梅迫遺跡で多量の土器や石器が出土している。特に梅迫遺跡では、動物形土製品1点や土偶7点のほか埋甕2基などが見つかった。晩期は、西原遺跡と城下原遺跡から埋甕が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、後期の集落跡が中心で、前期、中期の遺跡は少ない。前期から中期の周知の遺跡は、豊楢墓や石棺墓などの墓が大半である。

市東部には蒲生下原（中尾下原）遺跡、市南部には内曲遺跡、南島遺跡、笠笠遺跡など、中期後半を中心とした豊楢墓群が形成されている。このうち蒲生下原遺跡は、前期末から中期後半にかけての豊楢墓が約100基確認されており、この地方ではかなり大規模な豊楢墓群である。梅迫遺跡は、中期前葉から中期後葉の小児用豊楢墓のほか、磨製土器未製品が多量に出土しており、磨製土器製作跡と注目される。後期に入ると、ようやく方保田東原遺跡や蒲生上の原遺跡など集落跡が確認される。蒲生上

の原遺跡は後期後半の環濠集落である。

古墳時代

古墳時代の集落址などは調査例がないため、実態はよく分かっていない。しかし、後期を中心とした古墳、横穴墓は大変に多く、特に装飾のある古墳、横穴墓の多さは全国でも有数の規模である。

古墳や横穴墓は市の中央部と西北部に多く見られる。チブサン古墳、オササン古墳、馬塚古墳のほか鍋田横穴墓、城横穴墓、付城横穴墓などの装飾古墳、装飾横穴は北西部に分布する。山鹿市中央部には、馬や鳥などの形象埴輪のほかおびただしい数の円筒埴輪を出土した中村双子塚古墳がある。

方保田東原遺跡周辺の古墳は、台地上に前方後円墳である亀塚古墳のほか、端山塚古墳、経塚古墳、方保田古墳、清水山古墳がある。これらは未調査で、規模や時期等は不明である。また、清水山古墳については、現在は残っていない。また、方保田東原遺跡から北へ行くところ、この遺跡を見下ろす丘陵がある。そこに8基の円墳からなる馬見塚古墳群が構成されている。辻古墳（5世紀）以外は調査例がないため、時期等は不明である。

古代～中世

律令制政治以降の山鹿の様相は、あまりはっきりとは分かっていない。文献では『筑後国風土記』や『高山寺本和名類聚抄』（和名抄）のわずかに数行の記述だけで、考古資料でも、調査例が少ない。和名抄によると、この遺跡周辺は「山鹿郡日置郷」に比定される。当遺跡においてはこれまでの調査で須恵器や土師器が大量に出土しており、円形瓦や墨書土器も見られる。古代においても政治の中心的な役割を果たしていたことが想定される。

やや西へ目を向けると、山鹿市内中心部付近で、軒丸瓦や布目瓦が出土し塔心礎が現存している中村廃寺（平安時代後期）や、布目瓦の出土地で山鹿郡衙推定地ともされている桜町遺跡がある。

中世に入ると、遺跡は城跡が主である。方保田東原遺跡内では、台地の西端に方保田城が築かれ、輸入陶磁器片や黒色土器の出土のほか、幅5mを超える堀も検出されている。市北西部には、戦国時代末に起こった「肥後国衆一揆」の舞台となった城村城のほか、出城である西付城、東付城が築かれた。

第3節 調査の歴史

方保田東原遺跡の調査の歴史については、第1表を参照されたい。

第3章 調査の方針と方法及び法令手続き

第1節 発掘作業の方針

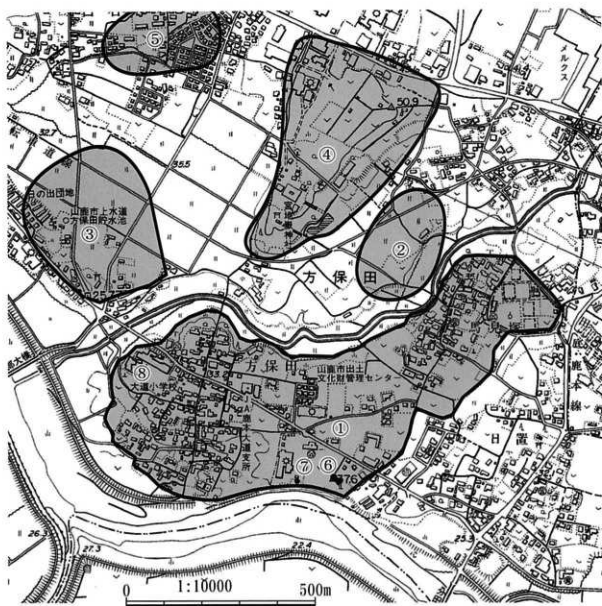
発掘作業に当たって、今回の調査は開発等によって破壊されたいわゆる、極力上面での検出にとどめ、完掘をしないことを基本方針とした。ピットについては、深さを



(『熊本県遺跡地図』1988から抜粋 一部改変)

- | | | | |
|-----------|------------|------------|----------|
| ① 方保田東原遺跡 | ⑤ 白石古閑ノ上遺跡 | ⑨ 馬見塚遺跡 | ⑬ 藤井北原遺跡 |
| ② 西久保遺跡 | ⑥ 白石遺跡 | ⑩ 地園遺跡 | ⑭ 藤井前田遺跡 |
| ③ 乙丸遺跡 | ⑦ 馬見塚古墳群 | ⑪ 鹿本農業高校遺跡 | ⑮ 糸里跡 |
| ④ 糸里跡 | ⑧ 方保田遺跡 | ⑫ 日置遺跡 | ⑯ 糸里跡 |

第1図 方保田東原遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1/20,000)



第2図 方保田東原遺跡周辺地形図及び周辺遺跡分布図 (S = 1/10,000)

- | | | |
|-----------|----------|---------|
| ① 方保田東原遺跡 | ④ 馬見塚古墳群 | ⑦ 端山塚古墳 |
| ② 石原遺跡 | ⑤ 古閑白石遺跡 | ⑧ 方保田城跡 |
| ③ 方保田遺跡 | ⑥ 亀塚古墳 | |

確認したものについては半裁し、完掘はしていない。これ以外の遺構のうち、検出だけでは性格が分らないものや、時期の把握が必要と判断した遺構については、担当者の判断で床面まで掘り下げた。しかし、調査検討委員会でも指摘を受けたが、必ずしも必要のない部分まで掘削が及んだものもあり、調査検討委員会や熊本県文化課などの指導を仰いだ上で判断する必要があったと反省している。

また、明らかな後世の攪乱についても完掘した。

遺構及び遺構に伴う遺物の出土状況については、1/10または1/20で記録し、レベルまで測定した。その後、下へ掘り下げる必要のなかった遺構の遺物については現

状のまま埋め戻し、時期を特定する必要があると判断した遺構については、その遺物を取り上げた。また、遺構に伴わないと判断された遺物については、地区と層位を確認したのちで取り上げ、特殊な遺物や完形に近い土器などについては、平板で出土地点を記録した後、番号を付け取り上げた。

第2節 調査の方法

調査地名は、番地名を採用した。

対象地における調査区設定については、地割の輪に合わせて、任意に設定した。その後、測量会社に委託して設定杭の座標点を測定している。

今回の調査においては、できるだけ面的に遺構を検出するため、基本的にグリッド調査とした。また、調査区の幅や長さや長いものについては、5m単位で区分けをした。

発掘にあたっては、まず設定した調査区の隅（おおむね2箇所）を人力で深掘りして、基本層序を確認した後、表土及び旧耕作土までを重機で除去した。それから下層については人力で掘削した。大半の調査区では旧耕作土下層が検出面となるので、掘削と検出作業が近い作業であった。

遺構の掘削からそれ以降の作業については、上記にある発掘作業の方針の通りである。

第3節 整理作業の方針

取り上げた遺物は限定的なものとしたが、それでも出土物のコンテナ数は、2ヵ年分併せて75箱（コンテナの大きさ：60×40×15cm）に上った。

整理作業については、洗浄、注記までは全ての遺物に対して行い、接合及び実測については遺構に伴うものを中心に、担当調査員が選定した。選定にあたっては、遺構の時代を示すもの、器形や施文に特徴があるもの、外来系と判断されるものなどを対象とした。また、できるだけ多くの器種を掲載するように心掛けたため、掲載された機種の数と出土した数は必ずしも整合しない。例えば、出土数の多い機種の裏は、器形や調整が同じ物は完形により近いもののみを実測対象とし、それ以外は割愛した。

第4節 整理作業の方法

取り上げた遺物全てを洗浄し、乾燥後注記した。注記にはジェットマーカーを使用した。

実測は整理作業員が中心に行い、適時担当者が確認した。鉄器、青銅器、石器については調査員で行った。トレースは、実測図を印刷仕上りの2倍のサイズまで縮小し製図した。製図はロットリングペンによるものと、デジタルトレース（使用ソフト：Adobe Illustrator 10.0）で行ったものがある。

写真撮影は、調査員が行った。使用したカメラは、Mamiya R Z 87とデジタルカメラ（コニカミノルタDG-5W）である。集合写真は前者、個別については後者を基本に使い分けた。

整理作業の終了した遺物は、出土文化財管理センターで保管している。また、一部の遺物については、山鹿市立博物館で展示している。

第5節 法令等手続き

(1) 埋蔵文化財発掘通知

文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知と、これを受けた熊本県教育委員会からの通知は以下のとおりである。

（平成14年度）

第46次（151番地）

平成14年10月1日付け山教文M8-46号

→平成14年11月1日付け教文第1895号

第47次（110-2番地）

平成14年10月25日付け山教文M8-53号

→平成14年11月6日付け教文第1913号

第48次（148番地）

平成14年12月9日付け山教文M8-62号

→平成14年12月17日付け教文第2203号

（平成15年度）

第49次（146番地）

平成15年6月4日付け山博M8-12号

→平成15年6月16日付け教文第800号

第50次（137-1番地）

平成15年9月17日付け山博M8-37号

→平成15年11月4日付け教文第2158号

第51次（30・33番地）

平成15年11月28日付け山博M8-45号

→平成15年12月11日付け教文第2562号

(2) 埋蔵物発見届等

遺失物法に基づく埋蔵物発見届等については、各年度にまとめて、下記のとおり処理した。なお、平成14年度分については、担当者のミスで届け出ていなかったため、平成15年度に併せて届け出た。

①平成14年度調査分

（発見届）平成16年4月2日付け山博M8-2号

（埋蔵文化財保管証）平成16年4月2日付け山博M8-2号

（文化財認定通知）平成16年5月24日付け教文第210号

（熊本県教育委員会に帰属）平成16年10月26日

（出土品譲与申請書提出）平成17年6月1日付け山文M8-18号

（出土品譲与通知）平成17年6月22日付け教文第786号

②平成15年度調査分

（発見届）平成16年4月2日付け山博M8-2号

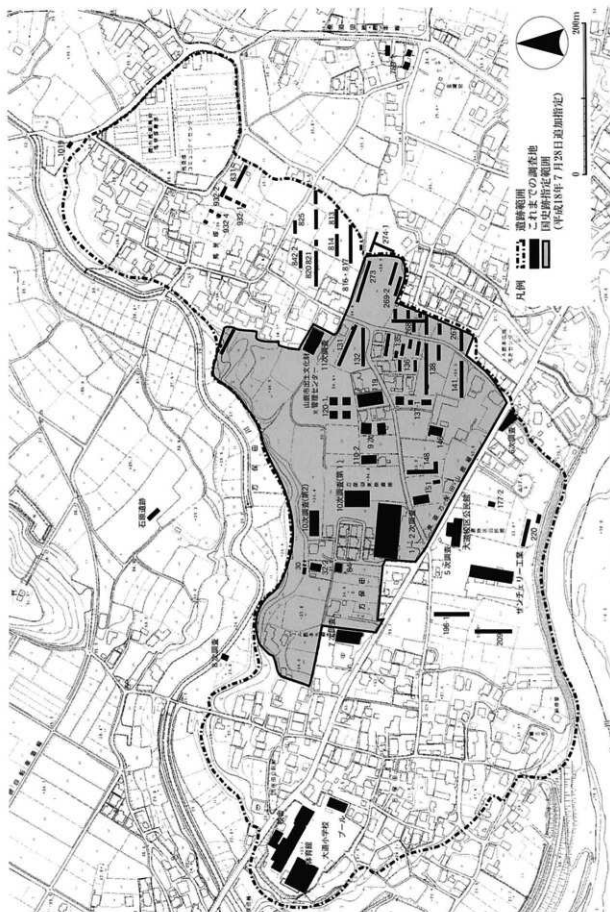
（埋蔵文化財保管証）平成16年4月2日付け山博M8-2号

（文化財認定通知）平成16年5月24日付け教文第210号

（熊本県教育委員会に帰属）平成16年10月26日

（出土品譲与申請書提出）平成17年6月1日付け山文M8-18号

（出土品譲与通知）平成17年6月22日付け教文第786号



年度	次	地 帯	原 因	調査主体	調査面積	主な遺構	主な遺物	
1955	S30	57-1	個人住宅建設	山鹿高校	20	住居跡、石棺		
1961	S36		方保田古墳	山鹿高校				
1965	S40		辻古墳	山鹿高校ほか		石棺4基	内行花文鏡	
1966	S41	137-1ほか	畑造成	鹿本農高		墓棺		
1967	S42	方保田	園地整備	山鹿高校		石棺	内行花文鏡	
1969	S44		大道小体育館	鹿本高校	448	土坑、墓棺墓	丹塗長頸壺、墓棺	
1971	S46	一本杉	畑造成	鹿本高校		石棺		
1972	S47		工場誘致 試掘	鹿本高校	20	住居跡、石棺		
1972	S47	1次	工場誘致 本調査	山鹿市教委	1080	住居跡	巴形銅器	
1973	S48	162	建設会社建設	鹿本高校		石棺		
1974	S49	2次	工場 拡張	山鹿市教委	513	銅冶跡、住居、土壊墓		
1976	S51	79-2	畑造成	山鹿市教委	6	石棺		
1980	S55	32-1	個人住宅建設	鹿本高校		住居跡	銅鏡	
1981	S56	3次	87-2ほか	山鹿市教委	558	住居跡		
1981	S56		大道小 校舎改築	山鹿市教委	959	住居跡、石棺		
1982	S57	4次	87-2ほか	山鹿市教委	154	住居跡	小型仿製鏡	
1982	S57	5次	155-3	大道公民館建設	山鹿市教委	551	住居跡、溝	
1983	S58	6次	倉庫建設	山鹿市教委	201	住居跡		
1984	S59	7次	63	大道農協建設	山鹿市教委	290	住居跡、溝	石造丁形鉄器
1990	H2	8次		確認調査(水田)	山鹿市教委	141	水田跡	墨書土器
1990	H2		186-1	工場 増設	山鹿市教委	1041	住居跡、溝	銅鏡
1991	H3	9次	32-2ほか	個人住宅建設	山鹿市教委	405	住居跡、溝	銅鏡2
1992	H4			大道小 体育館	山鹿市教委	1227	住居跡、溝、墓棺	船載鏡片
1994	H6	10次	91-14ほか	指定地内遺構確認	山鹿市教委	910	住居跡	銅鏡、石片
1995	H7	11次	128	管理センター建設	山鹿市教委	435	住居跡、溝、方形周溝墓	
1996	H8	12次	84-2	個人住宅建設	山鹿市教委	100	住居跡、溝、土坑	鉄器多数
		13次	119	通跡範囲確認	山鹿市教委	516	住居跡、土坑	小型仿製鏡2、棒状石片
		14次	135	通跡範囲確認	山鹿市教委	141	住居跡、溝	
		15次	274-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	94	溝	
		16次	131	通跡範囲確認	山鹿市教委	138	住居跡、溝、土坑、道路	
1997	H9	17次	268	通跡範囲確認	山鹿市教委	257	住居跡、溝、道路	串掘文長頸壺
		18次	141	通跡範囲確認	山鹿市教委	104	住居跡、溝、石棺	白玉、船載鏡片
		19次	138	通跡範囲確認	山鹿市教委	240	住居跡、溝、道路、祭祀土坑、円墳周溝	小型仿製鏡、力牛貝殻
		20次	132	通跡範囲確認	山鹿市教委	100	住居跡、溝	石造丁形鉄器
		21次	136-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	74	溝	
1997	H9	22次	267	通跡範囲確認	山鹿市教委	90	住居跡、道路	
		23次	813	通跡範囲確認	山鹿市教委	52	溝	
		24次	814	通跡範囲確認	山鹿市教委	164	住居跡、溝、土坑	
		25次	816/817	通跡範囲確認	山鹿市教委	98	住居跡、溝	
		26次	820	通跡範囲確認	山鹿市教委	44	溝、土坑	
1998	H10	27次	821	通跡範囲確認	山鹿市教委	52	住居跡	
		28次	824-2	通跡範囲確認	山鹿市教委	51	土坑	
		29次	825	通跡範囲確認	山鹿市教委	117	溝、土坑	
				大道小 プール改築	山鹿市教委	52	土坑	家形土器、船載鏡片
		30次	881	通跡範囲確認	山鹿市教委	32	なし	
1999	H11	31次	888	通跡範囲確認	山鹿市教委	12	溝	
		32次	893	通跡範囲確認	山鹿市教委	8	なし	
		33次	1019	通跡範囲確認	山鹿市教委	6	なし	
		34次	932-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	12	なし	
		35次	932-2	通跡範囲確認	山鹿市教委	16	住居跡、土坑	
		36次	932-4	通跡範囲確認	山鹿市教委	12	住居跡	
		37次	831	通跡範囲確認	山鹿市教委	60	溝、土坑	
		38次	177-2	通跡範囲確認	山鹿市教委	6	住居跡?	
		39次	220	通跡範囲確認	山鹿市教委	50	溝、土坑	
		40次	209	通跡範囲確認	山鹿市教委	200	住居跡、溝、土坑	舌(土製品)、鉄製の針、銅鏡、小型仿製鏡片
2000	H12	41次	196-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	100	溝、土坑、道路	
		42次	120-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	400	住居跡、土坑	印章形土製品、滑石製勾玉
		43次	6	通跡範囲確認	山鹿市教委	170	溝	石片
2001	H13	44次	273	通跡範囲確認	山鹿市教委	100	住居跡、溝、土坑	L字状石片
		45次	269-2	通跡範囲確認	山鹿市教委	100	住居跡、溝、土坑	銅鏡
		46次	151	通跡範囲確認	山鹿市教委	250	住居跡、溝、木棺墓	家形土器?大型甕
2002	H14	47次	110-2	通跡範囲確認	山鹿市教委	300	住居跡、土坑	小型仿製鏡、L字状石片、軟玉製勾玉、滑石製防鈴車、内面朱付着土器片多数
		48次	148	通跡範囲確認	山鹿市教委	270	住居跡、土坑、溝	埴形土製品、漆面土器
		49次	146	通跡範囲確認	山鹿市教委	123	住居跡、円墳、土器群	石棺破片、竹管文付二重口縁壺
2003	H15	50次	137-1	通跡範囲確認	山鹿市教委	187	墓棺、住居、大型土坑	銅鏡
		51次	30	通跡範囲確認	山鹿市教委	42	溝	
合 計					14,318㎡			

第1表 方保田東原遺跡及び周辺遺跡調査歴一覧表

第4章 調査の方法と成果

第1節 平成14年度の調査

1 はじめに

1 調査の目的

平成12年度まで行った遺跡範囲確認調査の結果、遺跡の範囲を確定することができた。次の段階として、遺跡の中心地を始めとした遺跡内の構造関係や時期的変遷を把握することが課題となった。また、史跡として後世に残すべき範囲が現在の面積(約2.7ha)で十分なのか、今後の保護政策に向けた資料を得るため調査を行った。

2 調査の経過など

平成14年度に実施した調査は、151番地、110-2番地、148番地の合計3件である。151番地から着手し、一時期は併行しながら110-2番地、148番地の順に行った。

151番地は平成14年10月7日に調査区を設定し、翌8日に表土除去。9日から作業員らとともに発掘を開始した。10月23日に第2グリッドを追加設定した。12月5日に空掘を行い、12月10日に全作業が終了し、機材等を撤

収。11日に埋め戻した。

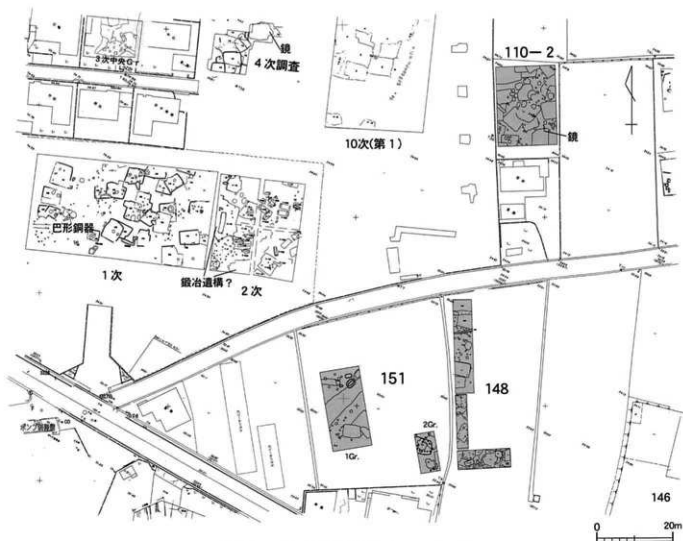
110-2番地は、平成14年10月25日に調査区を設定した。10月28日に重機で表土を除去し、その後発掘に取り掛かった。平成15年2月25日に空掘を行い、28日に作業を終了。3月10日に埋め戻しが完了した。

148番地は、12月10日に調査区を設定。12月13日に重機により表土を除去し、その後発掘を開始。2月25日に空掘を行い、同月28日に作業を終了した。3月10日に110-2番地とともに埋め戻しが完了した。

3 記者発表、市民見学会実施について

平成14年12月5日、151番地の調査成果と110-2番地の小型仿製鏡出土について、各報道機関に発表した。また、同月7日に市民見学会を開催したところ、市内外から60名の参加を得た。

このほか、整理作業中に148番地から鐙形土製品が出土していることが分かり、県内初の出土例であったことから、平成15年4月30日に各報道機関に対して記者発表を行った。



第4図 平成14年度調査地図 (S=1/1,000)

Ⅱ 151番地

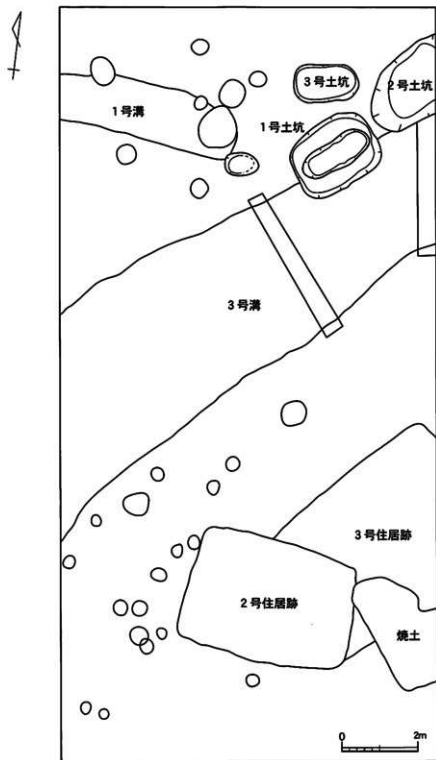
1 調査地、層序

(1) 調査区について (第5、6図 PL1)

151番地は、遺跡内を東西に走る県道方保田山鹿線と、そこから分岐し馬見塚集落へ向かう市道に挟まれた部分で、現在はトウモロコシや牧草の畑として利用されている。当地は北に接する市道よりも低くなっており、旧地形

は北から南へ緩やかに下っていたと想定される。また、東へ続く他の畑と比べても若干低くなっており、この緩傾斜はさらに県道側へ続いていたものと思われる。地元の方によると、この畑は長雨の頃になるとしばしば水が溜まっていたそうである。

しかし、平成14年の夏から秋にかけては記録的な小雨であったため、水が溜まるどころか土が乾ききってしま



第5図 151番地 第1グリッド遺構配置図 (S = 1/100)

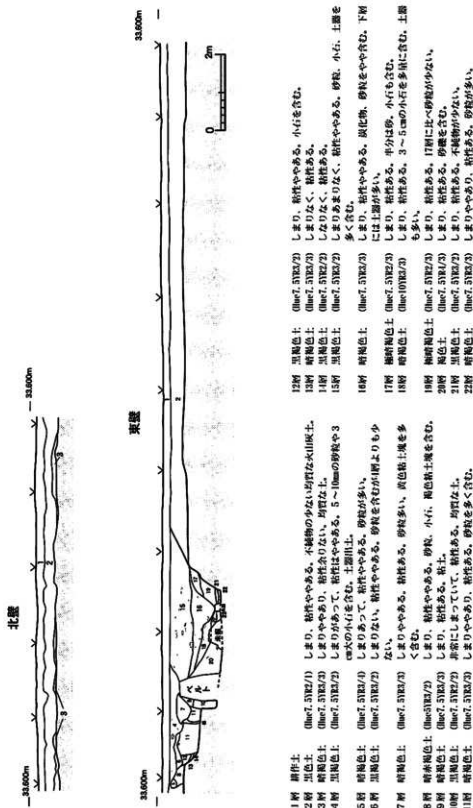
い、遺構検出は困難を極めた。また、他の調査地同様モグラによる部分的な擾乱もあり、検出作業は時間と労力を要した。

調査区は畑の地割に合わせて、長さ20m、幅10mの南北方向に長いグリッドを設定し、これを第1グリッドとした。また、同軸で第1グリッドから南東方向に第2グ

リッドを設定した。第2グリッドは幅5m、長さ10mの南北方向に長いグリッドである。

(2) 層序について

基本層序は、表土から地山まで3層に分層された。堆積状況、土色、土質については、第6図を参照いただきたい。



第6図 151番地 第1グリッド 土層断面図 (上段:北壁、下段:東壁) (S=1/100)

2 遺構と遺物

151番地で検出された遺構は、住居跡が2基、土坑が6基、溝が2条であった。遺構ごとに記述する。

ア 第1グリッド

(1) 住居跡

① 2号住居跡 (第7～9図 PL2、7、8)

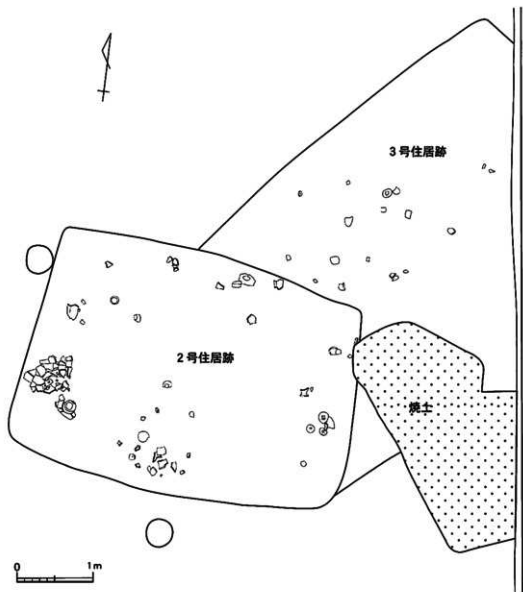
調査区中央南側に検出された。長軸はほぼ東西方向で、長さは4.3m、幅は3.3mを計る。平面形はほぼ長方形を呈する。深さを確認するために、南壁の一部に幅25cmのサブトレンチを入れた。その部分で確認できた遺構の深さはわずか5cmであった。

住居跡北東に位置する3号住居跡を切っている。埋土は黒褐色土に黄色粒が混入している。3号住居跡の埋土には、黄色粒が混入していないため判別できた。

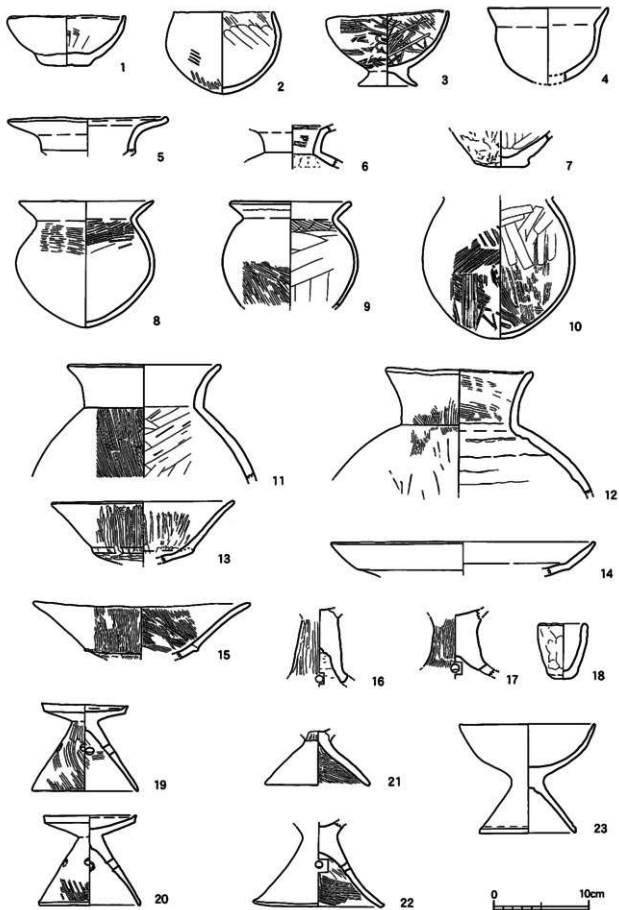
出土遺物は土器を中心に多数出土した。しかしながら、

床面からはかなり浮いた状態である。ほぼ完形に復元できるものも多く見受けられた。

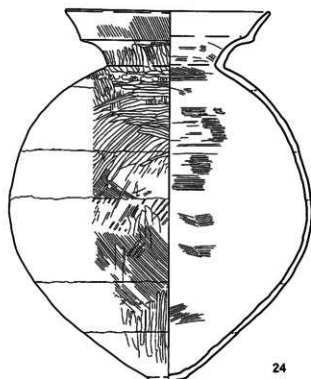
1は手捏ねの鉢である。雑な作りで形はいびつである。底部が厚い。2は鉢である。底部にタタキが残る。3は完形の台付鉢である。4は小型丸底壺である。5、6は壺の口縁部、頸部で、いずれも二重口縁壺の一部である。7は壺の底部と思われる。1と同様にいびつで、底部が厚い。8～10は甕である。11、12は壺の上半である。12の内器面には粘土紐の痕がよく残っている。13～17は高坏である。18は鉢のミニチュア土器である。19、20は器台である。21、22は台付鉢の台部と思われる。23は完形の台付鉢である。台の裾端部やや上位に1条の凹線がめぐる。24は、大型の壺である。肩部に円形竹管文がわずかに見える。25は移動式カマドか。残存部は全体の1/3程度である。上端、下端ともに横方向にナデ調整されている。内器面はヘラ削りで、外器面は全体にナデである。



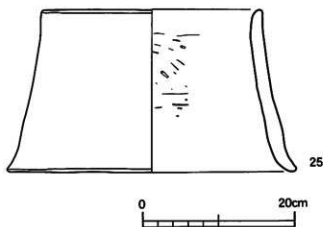
第7図 151番地 第1グリッド 2号、3号住居跡実測図 (S=1/50)



第8図 151番地 第1グリッド 2号住居跡出土遺物実測図① (S = 1/4)



24



25

第9図 151番地 第1グリッド 2号住居跡出土遺物実測図② (S=1/5)

②3号住居跡 (第7、10図 P L 5)

調査区南東で検出された。ほぼ西半分を2号住居跡に切られている。また、南壁の一部も焼土に切られていた。長軸は北東-南西であり、平面形は長方形を呈すると思われる。長さは推定5.5m、幅は3.8mを測る。遺物は少量で、土器片が散在している。床面まで掘り下げなかったため、深さは不明である。

1は壁の上半部である。口縁部外壁面に粘土紐痕が見られる。2は壁の胴部である。三角突帯が一条めぐり、その上部下部ともにややくぼむ。3は壁の脚台と思われる。4は壁の底部と思われる。ほぼ平底である。5は壁の底部。分厚い。

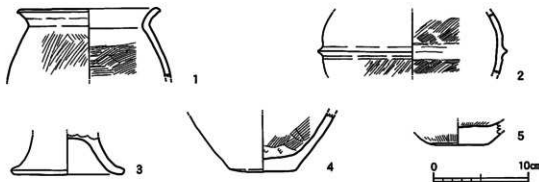
(2) 土坑

①1号土坑 (第11、12図 P L 5)

調査区北東部で検出された。3号溝とはほぼ軸を同じくしており、溝の北壁を切っている。

掘り方は隅丸長方形を呈しており、その長さは2.2m、幅1.8mを測る。性格を判断するために、掘り下げていったところ、さらにその内側に長さ1.9m、幅0.8mの長楕円形の掘り込みが検出された。この時点で墓であることが分かったが、土壌墓か木棺墓かを知るために完掘した。

内側の掘り方の深さは20cmで、北壁及び南東角に幅5~10cm、深さ2~5cmの細い溝が検出された。おそらく木棺痕と思われる。逆に、南壁から西側にかけて同様の溝が検出されなかったことが疑問である。床面にはほぼ一面にベンガラが検出された。その厚さは確認していない。散布状況はその濃淡に顕著な違いが見られず、概ね同程度に散布されていた。



第10図 151番地 第1グリッド 3号住居跡出土遺物実測図 (S=1/4)

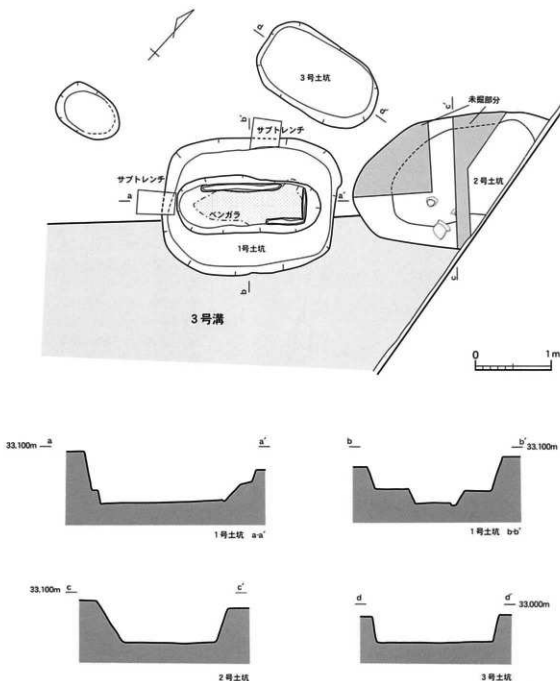
埋土から土器片と鉄が出土した。いずれも副葬された遺物ではなく、3号溝を掘削しそれを埋めたことによって包含されたものと考えられる。

1、4は甕の口縁部である。4の口縁部は直線的に開く。2は高坏の口縁部である。3は完形の鉢である。5は甕の脚台である。6は壺の底部と思われる。平底を呈する。7はジョッキ形土器の底部か。ほぼ平底を呈する。鉄は合計5点出土した。そのうち3点を掲載している(第30図2、8、21)。この中で、鑄造鉄弁片が1点出土しているのは注目される。

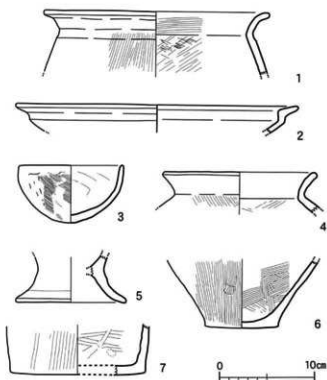
②2号土坑(第11、14図)

調査区北東で検出された楕円形を呈する土坑である。1号土坑と軸を同じくし、3号溝を同様に切っている。また1号土坑とはほとんど接した状態であるが、切り合っていない。前後関係は不明だが、これらの時期差はほとんど無く、互いを意識して作られたものではなからうか。

規模は、幅は1.75mで、長さは東部分が調査範囲外であるため不明である。サブトレンチを設けて掘り下げたところ、床面はほぼ平面であると判断された。深さは47



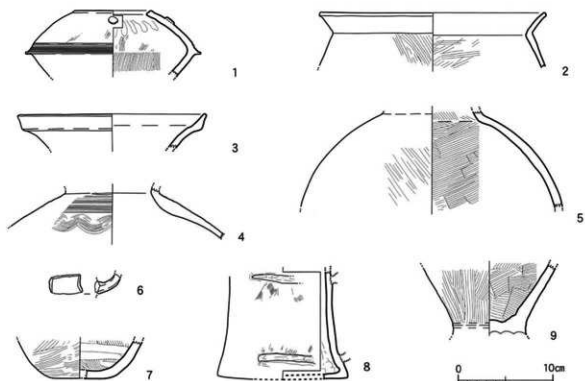
第11図 151番地 第1グリッド 1号～3号土坑実測図 (S = 1/50)



第12図 151番地 第1グリッド 1号土坑出土遺物実測図 (S = 1/4)



第13図 151番地 第1グリッド
5号、6号土坑出土遺物
実測図 (S = 1/4)



第14図 151番地 第1グリッド 2号土坑出土遺物実測図 (S = 1/4)

cmを測る。

遺物は、土器片（第14図）と鉄（第30図4、9）が出土した。1号土坑同様に、もとは3号溝内の遺物であったと思われる。1は無頸蓋である。断面形は算盤玉形をなし、胴部の屈折部には細く伸びた突帯がめぐる。口縁部下に円形貼付円文、突帯の上位に4条の幅の狭い沈線が施されている。2は蓋の口縁部である。3は蓋の口縁部である。4は蓋の胴部である。胴部に柳葉並行文と柳葉波状文が施されている。5も蓋で、胴部上半である。6、8はジョッキ形土器である。6は把手で、8は把手が外れている。7は蓋の底部と思われる。9は蓋の底部である。底部と脚台の境界部分に微隆帯が見られる。

③3号土坑（第11図）

調査区北東部で検出された長軸を東西にする楕円形の土坑である。南には1号土坑、東には2号土坑があるが、切り合っていない。長軸の長さは1.7m、短軸は1.0mを測り、深さは0.35mで断面形は長方形に近い。埋土は、均質の黒色土である。特筆すべき遺物はなかった。

④4号土坑 欠番

⑤5号土坑（第13、15図）

調査区中央北側で検出されたほぼ正円形の土坑である。1号溝の東先端に位置しており、1号溝を切っている。長径は1.2m、短径は1.0mである。掘り下げていないので深さは不明である。遺物は、蓋の口縁部（第13図1）のほか土器小片を数点取り上げた。

⑥6号土坑（第13、15図）

調査区中央やや北側で検出された卵形の土坑である。長軸は0.8m、短軸は0.65mを測る。深さは0.25mであった。遺物は、器台の下半（第13図2）のほか土器小片が数点出土しただけであった。

3 溝

①1号溝（第15、16図 P.L.2）

調査区北西で検出された東西方向にほぼ直線に延びる幅1.65mの溝である。調査区西壁から東方向へ4.25m延びた地点で溝はなくなる。また、その地点は5号土坑に切られている。時期や深さを知るために、検出した溝の西端約1mの幅を掘り下げた。深さは45cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

この遺構で重要な点は、溝の途切れが確認されたという点である。これまでの調査で、のべ102本の溝が検出されているが、その終わりを確認できたのは今回が初めてである。集落内の交通、特に出入口、また人の移動などを考える上で重要な発見と言える。

遺物は、大量の土器が出土したが、大半を現地に残した。掲載してある遺物は、サブトレンチで出土したものと検出中で取り上げたものである（第18図）。1は蓋の上

半である。2は蓋の口縁部である。二重口縁になると思われる。3は蓋の胴部である。胴部中に3条の突帯が通る。4は蓋の底部である。5、6は器台である。7は高杯の柱部である。8、9は蓋の脚台である。10は土製の玉である。

②2号溝 欠番

③3号溝（第17～26図、P.L.3、4、6、7）

調査区西中央から北東にかけて延びる大溝である。溝が明確に検出される前の状態でも、溝周辺にはかなりの量の土器片が散在し、併せて直径3cm大の小石も見られた。検出はこの土器片と小石を目安とした。

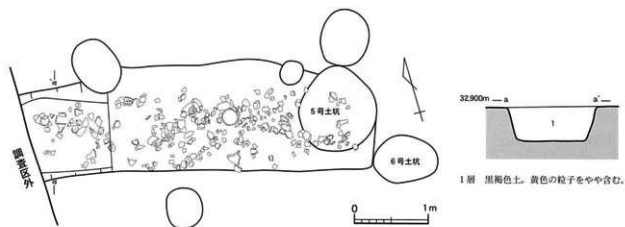
検出後は、幅と深さ及び時期の確定のため、溝の中央にあたる部分に、軸と直行するサブトレンチ（中央サブトレンチ）と、溝東端に調査区と同軸のサブトレンチ（東サブトレンチ）を設定し、その部分のみ底まで掘り下げた。中央サブトレンチにおいては、当初幅を1mに設定して掘り下げていったが、上層で多量の土器片が出土したため、そこから下層については、幅を50cmに狭めて掘り下げた。また、東側サブトレンチについては、幅を30cmとした。中央サブトレンチの遺物は全て取り上げ、東側サブトレンチの遺物は中層までを取り上げ、最下層は現地に残した。

溝の幅は3.0mで、深さは1mを測る。断面形はほぼ逆台形を呈するが、南側は底から50cm上がったところで、傾斜が緩やかになる。埋土は両側から流れ込んだ自然堆積と判断されたが、他の土色と異なり砂粒や石を多く含む土層が中層にあり、この層が中央で途切れていた。土層図（第18図）で言うと、7層、8層、10層が4層に切られていた。4層の下層には破片の大きな土器片が多数出土した。7～10層堆積後に一度掘り直され、4層が堆積したと判断した。

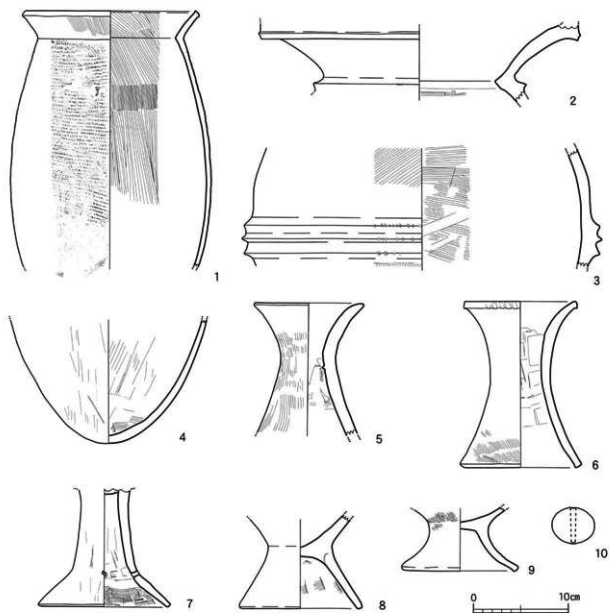
また上層の2層、3層も1層に切られており、この1層からは小片の土器片が数点出土した。このことから、同様に、改めて掘り直されたと判断した。

以上のことから、この溝は最初に掘削されて以後、少なくとも2回は掘り直されたとと思われる。

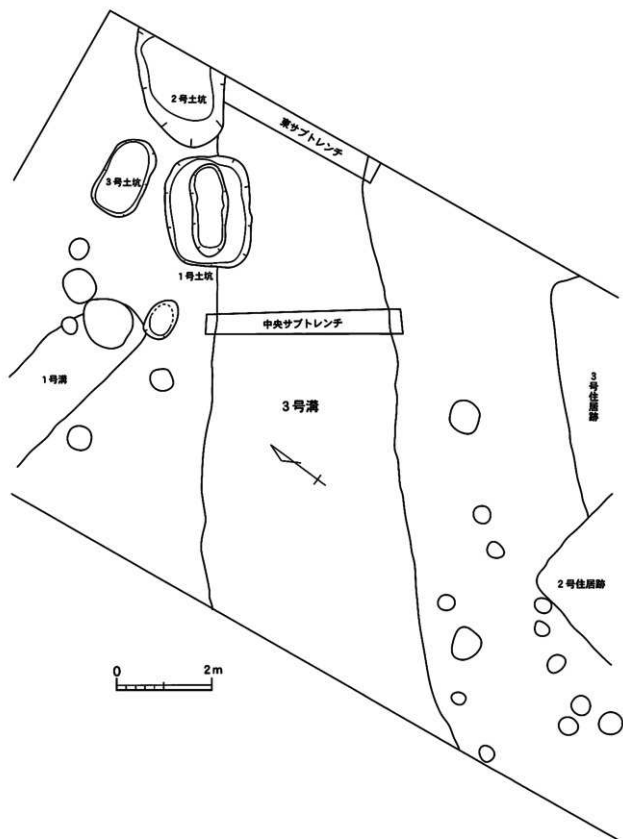
このことを意識しながら、出土地点と標高を基に、土層と照らし合わせ、整理作業を進めた。その結果、掘削直後の下層、1度目の掘り直し後の中層、2度目の掘り直し後の上層に分け、遺物実測図を掲載している（第20図～第26図）。なお、遺物は大量の土器以外に、鉄や炭化材が出土した。鉄は合計10点出土し、このうち9点を掲載している。（第30図1、3、6、7、10、11、12、14、19）。炭化物については、1点だけ樹種鑑定と放射性炭素年代測定を行った。その結果、樹種についてはハイノキ属であることが判明し、年代は補正¹⁴C年代で、1930±60B.P.という値が出ている。暦年代では西暦AD70ごろのことである（詳細は第5章のとおり）。土器については、トレンチ及び土層ごとに記述する。



第15図 151番地 第1グリッド 1号溝実測図 (S = 1/50)



第16図 151番地 第1グリッド 1号溝出土遺物実測図 (S = 1/4)



第17図 151番地 第1グリッド 3号溝実測図 (S = 1/80)

i 中央サブトレンチ

上層 (第20、21図)

1～3、6、13、16は壺である。1の頸部には円形竹管文が施されている。2の頸部には波状文と列点文が施されている。3の頸部には櫛描縐状文が施されている。また、外器面には、頸部から胴部に至る縦方向の太線状のベンガラが塗られ、胴部や上位で縦太線から横方向へ、同様の太線が塗られている。4、10、11は器台である。4の口唇部には刻目が、10の口唇部および裾端部には凹線が施されている。5は台付鉢である。7、12は高坏である。8、9は片口である。14、15、17、18は甕である。18は脚台を打ち欠いている。

中層 (第22図)

1は高坏と思われる。両器面ともにヘラ磨きが施されている。2、5、7は壺である。2は平底を呈する。5は器壁が厚く、頸部には尖帯がめぐる。7は完形で、底部はレンズ状を呈する。3はジョッキ形土器の把手と体部下位である。4は完形の台付鉢である。外器面には刷毛目が強く残る。6は浅い鉢と思われる。無頭で鉢部下位には柱状の脚が付くと思われる。内外器面ともに刷毛で調整されている。8は甕である。横方向のタタキ目が部分的に残る。外器面胴部上位と内器面の口縁部に細いヘラ磨きが見られる。

下層 (第23図)

1は台付鉢の鉢部と思われる。高坏のような脚が付く

と思われる。2、3は甕のミニチュア土器である。4は高坏である。5～8は甕である。6の外器面の頸部や上位から胴部中位にかけて、煤が見られる。内器面にも一部見られる。9は装飾性の高い壺で、口唇部と肩部には貼付円文、また肩部の貼付円文の間には櫛描扇状文、頸部には櫛描波状文が施されている。

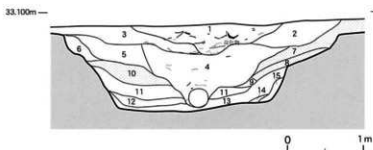
ii 東サブトレンチ

上層 (第25図)

1、5、6～8は甕である。2、3、10は壺である。4は高坏である。9は台付鉢の脚部である。裾部に透かしがない。11は完形の器台である。

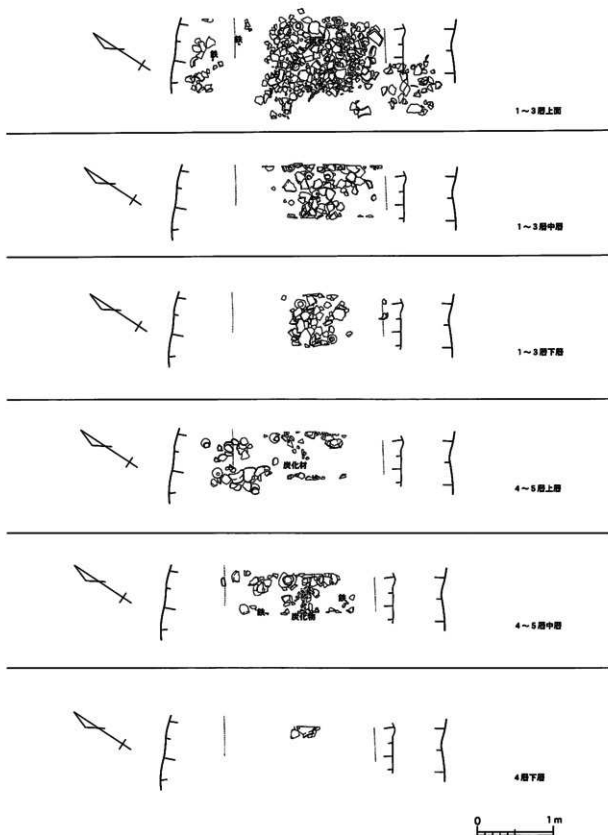
中層 (第26図)

1は台付鉢の鉢部である。2は甕の上半部である。3は器台の胴部と思われる。円形の透かし孔とその下位に平行文が見られる。4～6は壺である。5の頸部には細かい波状文が施され、外器面の頸部及び胴部一部にベンガラが塗られている。7は高坏の脚部と思われる。

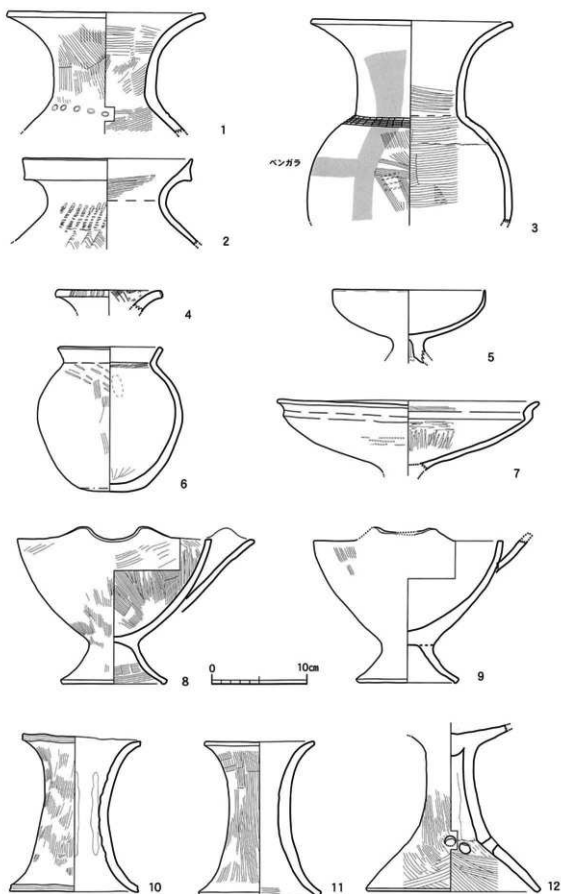


- | | | |
|-----|----------------------|--|
| 1層 | 黒褐色土 (Blue 10YR2/2) | しまりなく、粘性ややある。土器を多量に包含する。炭化物やや含む。 |
| 2層 | 黒褐色土 (Blue 7.5YR3/2) | しまり、粘性ある。そのほかは3層と同様。 |
| 3層 | 暗褐色土 (Blue 10YR3/1) | しまり、粘性ややある。黄白色の砂粒や3cm大の小石を含む。土器はそれほど多くない。 |
| 4層 | 黒褐色土 (Blue 10YR2/2) | しまりなく、粘性はある。3～5cmの小石、炭化物を含む。黄白色の砂粒もやや多い。 |
| 5層 | 黒褐色土 (Blue 7.5YR3/2) | しまっていて、粘性がある。1層と8層は似ているが、不純物が少ない。また土の粒も細かい。 |
| 6層 | 暗褐色土 (Blue 7.5YR3/3) | しまりがありなく、粘性はややある。砂粒がやや多い。 |
| 7層 | 黒褐色土 (Blue 7.5YR3/1) | しまりややあり、粘性ある。5～10cmの黄色の石を多く含む。また、同色の砂粒、2～3cmの小石も含む。 |
| 8層 | 黒褐色土 (Blue 10YR3/1) | しまりややあり、粘性ある。7層とはほぼ同色。同質であるが、包含する石が少なく、砂粒が目立つ。褐色の粘土塊を含む。 |
| 9層 | 褐色土 (Blue 10YR4/1) | しまりなく、粘性がある。4層と8層を合わせたような土質である。不純物は非常に少ない。 |
| 10層 | 褐色土 (Blue 10YR4/1) | しまり、粘性ある。他の土と異なり、目立つ。砂粒と粘土からなる。石もやや含む。 |
| 11層 | 黒褐色土 (Blue 10YR3/1) | しまりあまりなく、粘性はある。砂粒や3cm程度の小石を含む。 |
| 12層 | 黒褐色土 (Blue 7.5YR3/2) | 非常にしまっていて、粘性がある。砂粒や小石を含むが量は少ない。 |
| 13層 | 黒褐色土 (Blue 10YR2/2) | 非常にしまっていて、粘性がある。黄色の粘土粒子を多く含んでおり、部分的に黄色味が強く見える。 |
| 14層 | 暗褐色土 (Blue 7.5YR3/3) | しまりなく、粘性はある。褐色 (Blue 7.5YR4/0) の粘土粒を多く含む。 |

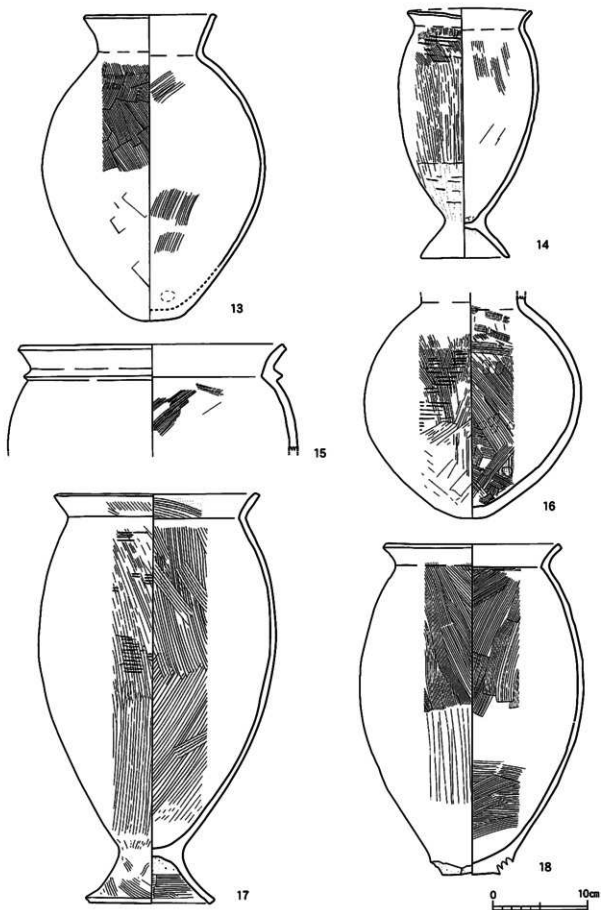
第18図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ土層断面実測図 (S=1/50)



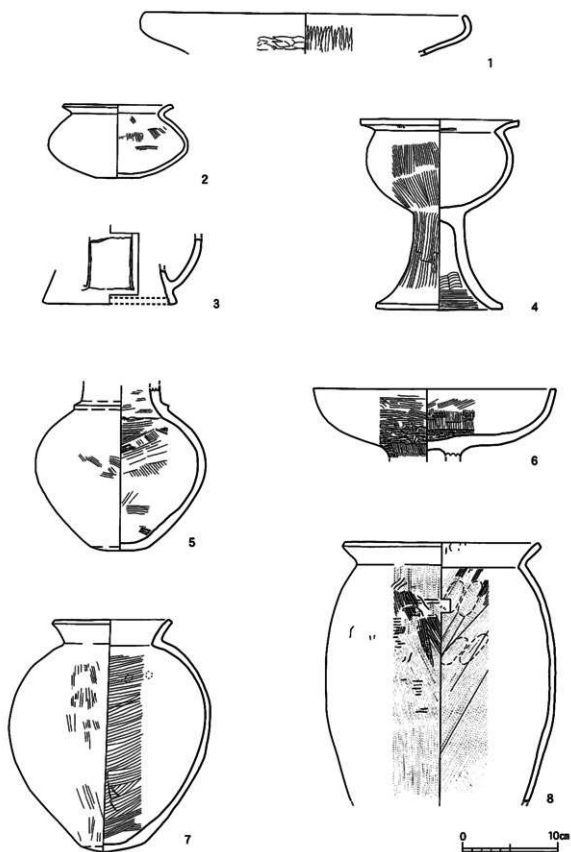
第19図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ 遺物出土状況実測図 (S = 1/50)



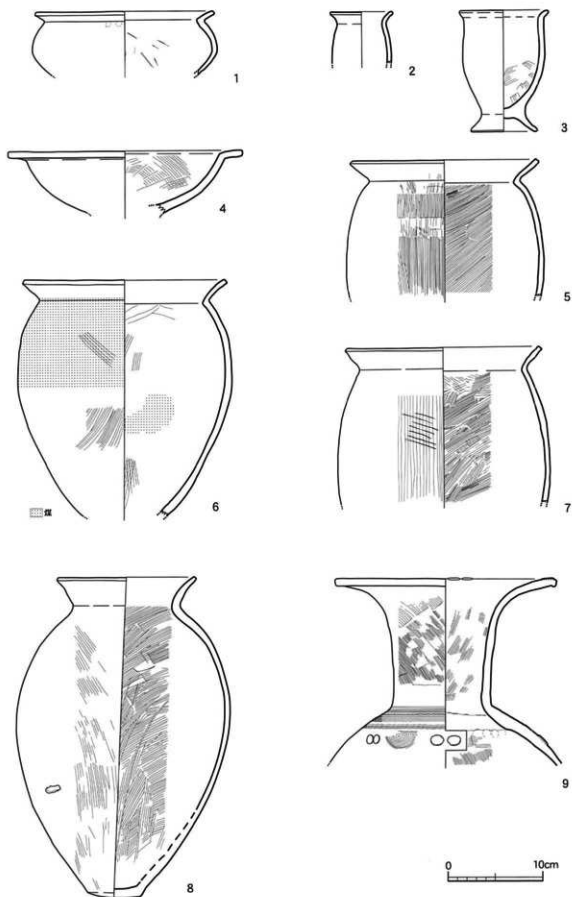
第20図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ(上層) 出土遺物実測図① (S = 1/4)



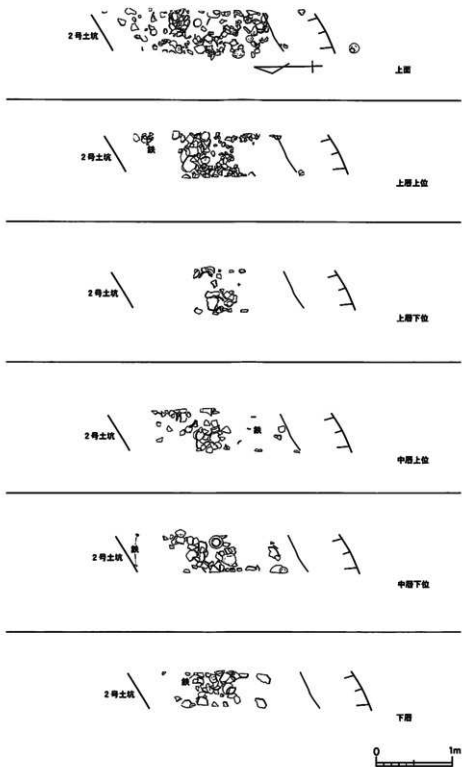
第21図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ（上層）出土遺物実測図②（S = 1/4）



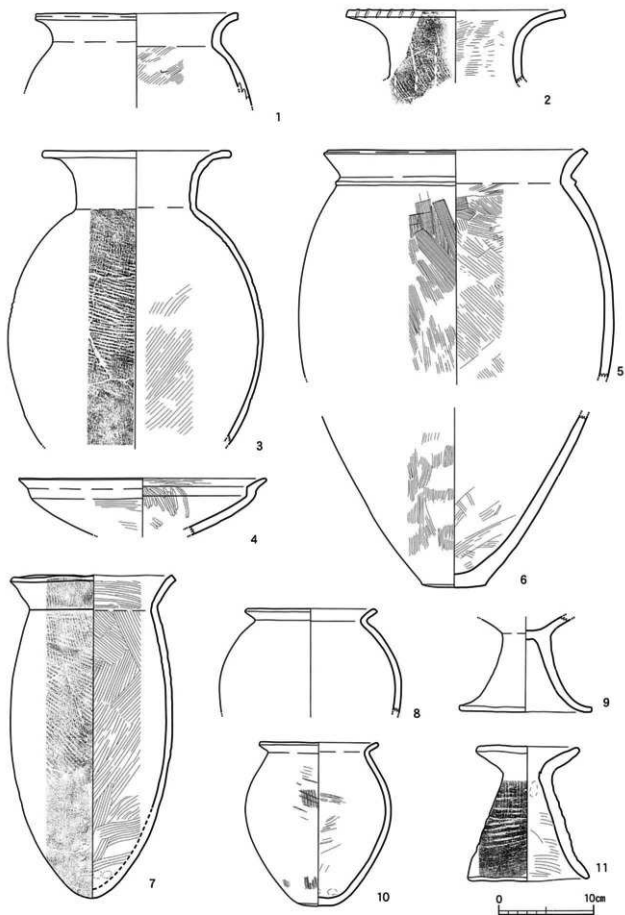
第22図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ(中層)出土遺物実測図(S=1/4)



第23図 151番地 第1グリッド 3号溝中央サブトレンチ(下層)出土遺物実測図 (S = 1/4)



第24図 151番地 第1グリッド 3号溝東側サブトレンチ遺物出土状況実測図 (S = 1/50)



第25図 151番地 第1グリッド 3号溝東側サブトレンチ(上層) 出土遺物実測図 (S = 1/4)

[4] 土器群 (第27、28図 PL 2)

包含層掘削中に、調査区A-2区からB-3区にかけて多量の土器が出土した。溝の可能性が高いと考えられたが、これらの土器を取り上げないことは溝のラインが把握できなかったので、平板に大まかな範囲を記録して全て取り上げた。土器群の下は3号溝の範囲であったので、これらの遺物は3号溝の上面と考えられる。

1、3、8、9、13は壺である。13の口唇部は厚みがあり、上面はほぼ平坦である。2、4は甕の上半である。4は器壁が厚く、口唇部に刻目を施す。5、6は高杯の口縁部である。7、10~12は鉢である。10の口唇部は内外両側に肥厚する。11は輪状の台部が外れた痕跡が見える。14は台付鉢の台部と思われる。15は完形の器台である。16は小型の台付壺である。17は土師器の坏である。

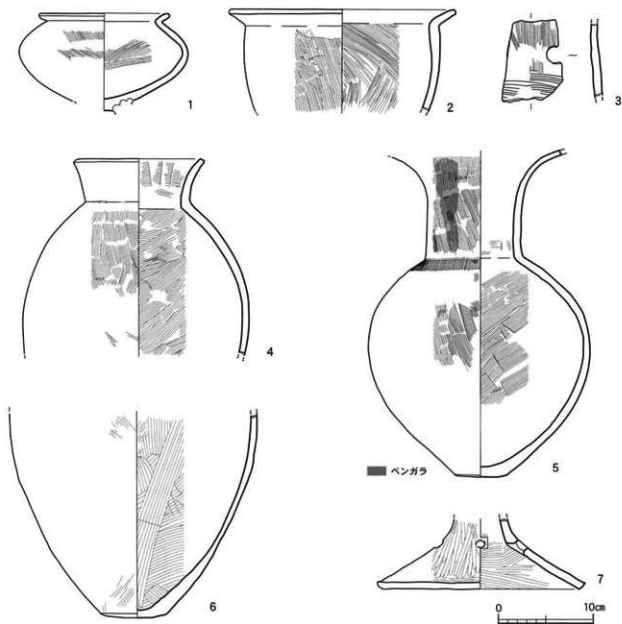
ヘラ磨きが施されている。

[5] 主な遺物

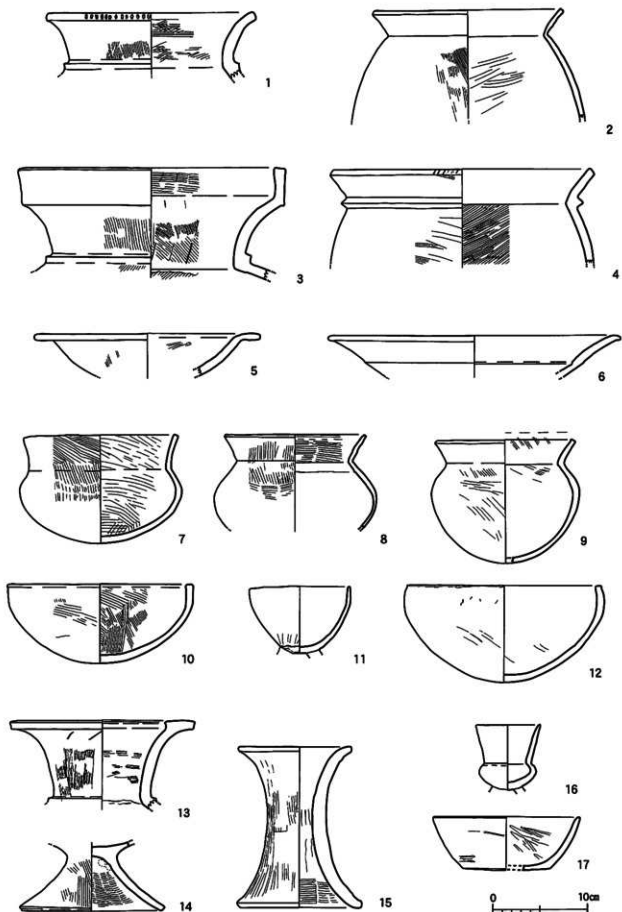
①内面朱付着土器片 (第29図)

内器面に赤色顔料が付着した土器片は、第1グリッドで、合計12点出土した。このうち10点は、胎土や調整方法などから同一個体と判断した。よって、3個体分の内面朱土器が確認されたことになる。図には7点掲載している。3と5は3号溝埋土から出土したが、それ以外は包含層からの出土である。

1は小型の鉢である。顔料はベンガラと思われる。両器面ともに一部分にしか確認されない。2~6は同一個体で、甕と思われる。全体に器壁が厚く、砂粒を多く含む。内器面には幅2cmのハケ調整が施されており、その



第26図 151番地 第1グリッド 3号溝東側サブトレレンチ (中層) 出土遺物実測図 (S=1/4)



第27図 151番地 第1グリッド 土器群出土遺物実測図① (S = 1/4)

くぼんだ部分にベンガラと思われる赤色顔料が付着している。7は壺の底部か。両器面ともナデ調整で、内器面にベンガラが明瞭に確認できる。

② 鉄 (第30図 P L 9)

鉄は合計31点が出土した。このうち21点を掲載している。製品と考えられるものが8点あり、欠損せず完形であったのはわずか2点である。

製品は、鉄鑢 5点 (5、6、14、15、18)、鉄斧 3点

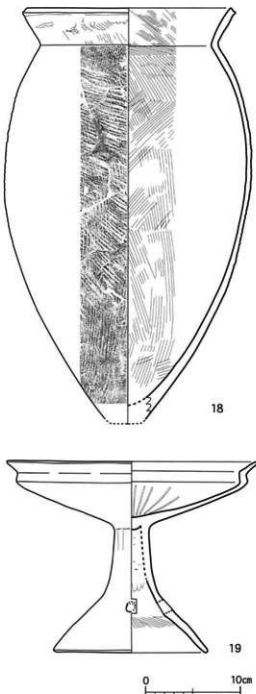
(19~21)、鎌 1点 (17) である。非製品は13点で、棒状鉄が6点 (2、7~10、12)、薄片状鉄が3点 (1、3、4)、塊状鉄が1点 (11)、板状鉄が1点 (13)、その他が1点 (16) である。計測値等は第10表に記載している。

特筆すべきは、鑄造鉄斧片である20と21である。20は差込口から刃部にかけての部分で、袋部には鑄造鉄斧特有の微隆突起が2条見える。21は側面部であり、横断面は山形を呈している。外面中軸線には鑄り痕が見える。いずれも再加工や再利用の痕跡は見られなかった。16は不明の鉄であるが、図や写真にあるように溶解して泡だったような部分が見える。鑄造製品の欠損品か。

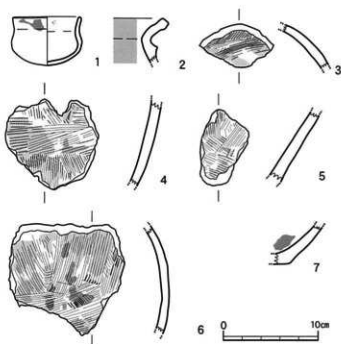
記載していない鉄も含めて、遺構別でみると、3号溝が12点と突出した出土数で、1号土坑で5点、2号土坑で3点出土している。遺構に伴わない鉄の出土数は11点で、3号溝の上面でもあるA-2区とB-2区において、各3点と比較的多く出土している。大半が溝に伴うものと考えられる。

③ 遺構に伴わない遺物 (第31図 P L 8)

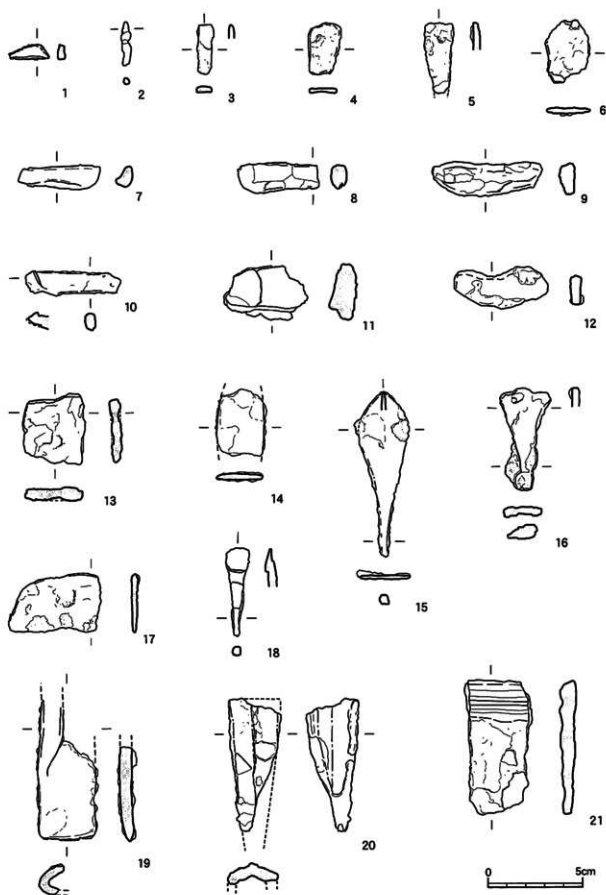
包含層から出土した遺物である。1は古代土師器の甕の口縁部である。2、3、6は土師器の坏である。2は全体が黒色を呈しており、ヘラミガキで表面は光沢を持つ。外器面底部はヘラケズリである。4は鉢である。5は須恵器の坏である。7~9は家形土器片と思われる。いずれも断面は曲線を描かず、板状の破片である。8、9は角の部分で、屈折部の接合剥離面が見られる。7の外器面には、M字突起状の貼付部分が見られる。10、11は鋸歯文が描かれた土器片である。10は小型壺の胴部か。11は小型鉢の口縁部と思われる。12は壺の肩部と思



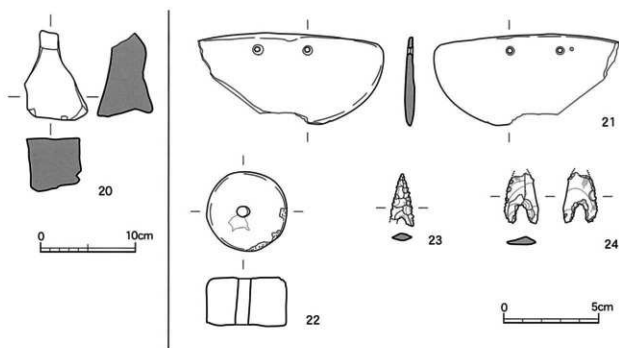
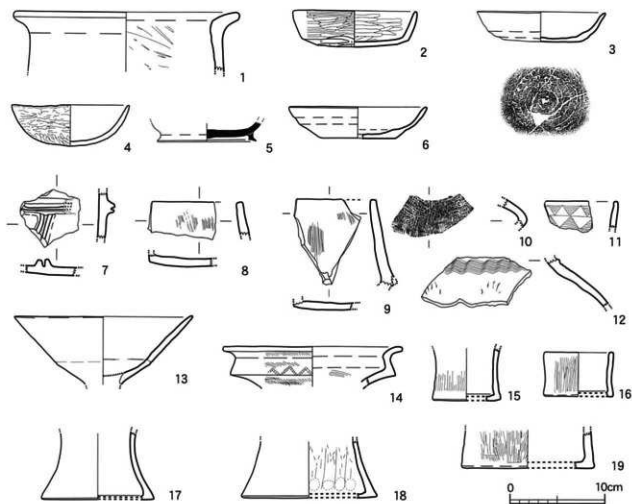
第28図 151番地 第1グリッド
土器群出土遺物実測図② (S=1/4)



第29図 151番地 第1グリッド出土
内面未付着土器片実測図 (S=1/4)

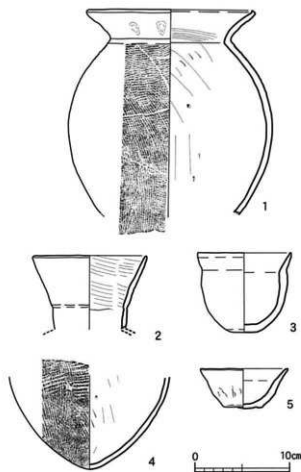


第30図 151番地 第1グリッド出土鉄実測図 (S = 1/2)



第31図 151番地 第1グリッド 遺構に伴わない遺物実測図（1～20はS=1/4 21～24はS=1/2）

われる。頭部には平行波状文が施され、その波状文の下位には5つが1組となったヘラ描き文様が2箇所確認された。13、14は高坏の坏部である。14の坏部屈折部には山形文が施されている。15～19はジョッキ形土器である。20は甌形である。21は石包丁である。実測図右図のとおりに、穿孔部分のさらに右に小さな円形のくぼみが見える。当初穿孔していたものの、途中で止めたため付いた痕であろう。22は土製の紡錘車である。23、24はいずれも黒曜石製の石鐮である。



第32図 151番地 第2グリッド
2号住居跡出土遺物実測図 (S=1/4)

イ 第2グリッド

検出されたのは硬化面1面と住居跡1基である。

(1) 硬化面 (第34図 P L 5)

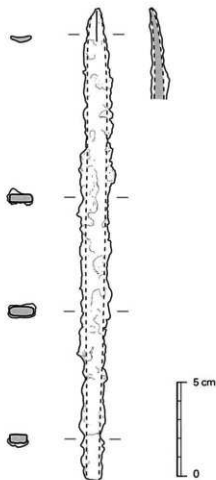
グリッド南東部に検出された。2層を除去した後に現れ、この硬化面に伴う遺構のプランは検出できなかった。かなり硬化しており、長期間機能していたことが窺える。面の平面形はいびつなひし形を呈しており、長軸3.6m、短軸3.4mを測る。面の標高は33.22m～33.27mで一部高いところがあったものの、全体にほぼ平坦であった。

硬化面に伴う状態で出土した遺物はなかった。

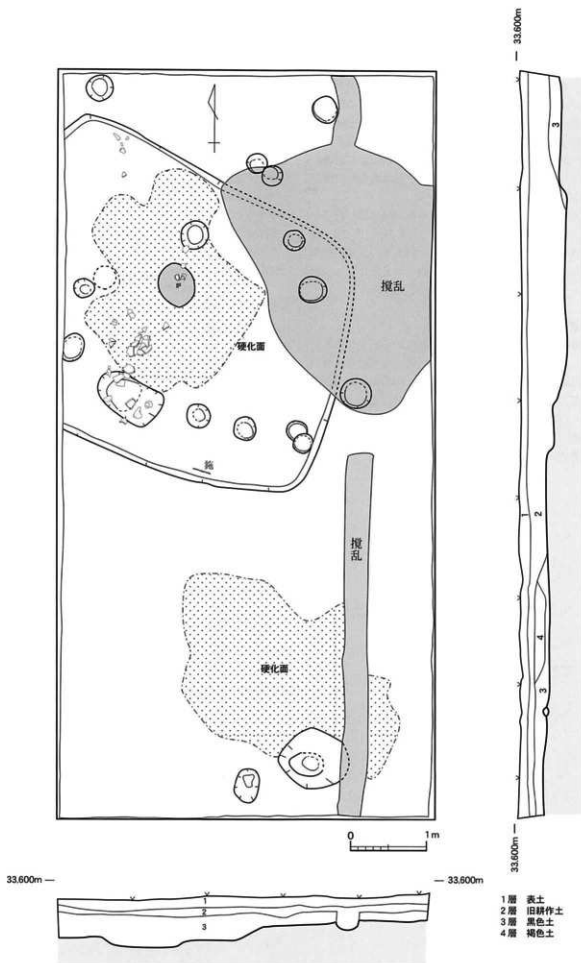
(2) 住居跡 (第32～34図 P L 5、9)

グリッド北側に検出された。住居南西部が調査区外で北東部は掘乱されているため、明確な規模は不明であるが、検出されたものを長軸の中心と仮定して算定すると、長軸5.0m、短軸3.8mとなる。

平面形はやや台形に近い長方形で、中心やや北側に円形の跡が検出された。また、南壁近くには長軸方向に長い楕円形の土坑があり、そこから北壁に向かって硬化面が検出された。柱穴は、北西側で検出されなかったが、4本柱であった可能性が高いと思われる。



第33図 151番地 第2グリッド 2号住居跡
出土鉄実測図 (S=1/2)



第34図 151番地 第2グリッド 遺構配置図及び土層断面図 (S = 1/50)

遺物は硬化面直上及び土坑、処から土器片が出土した。また、南壁に沿うようにして、鉄製の鎧が1点出土した。

第32図1、4は甕である。1の口縁部外器面に指押さえの痕が見える。口縁端部は内側に肥厚する。4は下半で底部はやや尖る。2は壺の口縁部である。頸部から直立した後、段を持って外に開く。3は小型の壺である。底部は平底である。5は鉢である。底部は高台状になっている。

第33図1は、鉄製の鎧である。全体が錆で覆われているが、完形である。断面は、幅0.7～1.3cm、厚さ0.5cmの長方形を呈する。長さは25.0cmと長大で、当遺跡内でも最大の鎧である。切先の横断面は三日月形をなし、縦断面を見ると、一方に反っているのが分かる。

(3) 遺構に伴わない遺物(第35図)

掲載した土器は、住居北東部の擾乱から出土したものである。よって、本来住居の遺物であった可能性が高い。

1は鉢形のミニチュア土器である。内器面に底部から口縁部の方向で爪の跡が残っている。2は甕の上半部である。口縁部外器面に粘土紐痕が見える。3、4は小型丸底甕である。5は完形の大型鉢である。内器面下半はヘラ磨きのような光沢部分がある。使用痕か。

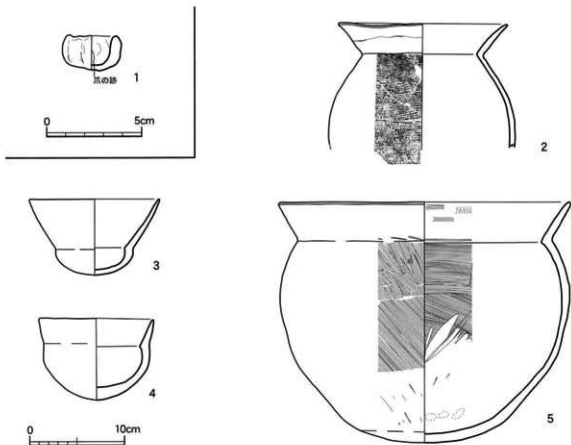
3 小結

(1) 溝について

当遺跡の繁栄期として考えられる弥生時代後期後半期において、位置的に遺跡の中央にあたる部分で、このような大溝が検出されたことは予想外で、その規模も驚くものであった。長さは不明であるが、幅3.6m、深さ1.1mと、遺跡内の溝としては、第11次調査(平成7年度:128番地)の溝に次ぐ規模のものである。3号溝の性格を考えると、場所や方向から、これまでのような外部から集落を守るためのものではなく、集落内部をさらに細かく区画するための溝であると言えよう。遺跡内の構造を把握するための鍵となる遺構になりそうである。

また、出土遺物にも特徴があった。土器の出土量である。溝の上層を中心に、層をなすほどの大量の土器片が出土した。もともと、当遺跡の溝の土器出土量は他の遺跡に比べ大変多いが、その中でもこの量は突出していた。わずかに0.5mの幅、長さ3.6m、深さ1.1mの間で、コンテナ9箱の土器が出土したのである。

層をなして出土した土器は、小片のものが非常に多かった。単に廃棄したわりには大きさが揃っているようにも思われる。舗装のような役割を持たせたのであろうか。下層においては、かなり大きな破片や完形に近い状態のものが出土しており、対照的である。いずれにせよ、



第35図 151番地 第2グリッド 遺構に伴わない遺物実測図 (S=1/4)

これら廃棄された土器の数量は、大量の土器を消費した集落の規模を示しており、当遺跡の特徴を表すものとして興味深い。

(2) 鉄について

今回の調査では、2つのグリッド合わせて36点の鉄が出土した。このうち12点は3号溝からの出土であり、溝の可能性である上面出土のものまで含めると、その数は22点に及ぶ。3号溝は上面検出を基本として、掘り下げたのはわずか50cm幅の2箇所だけであったにもかかわらず、これだけの数量が出土したので、溝埋土には相当量の鉄が包含されているのであろう。

ところで、溝内出土の22点を、製品と非製品の割合でみると、およそ3:1となり、非製品の割合が高い。このことは、このエリアが鉄に関して消費よりも、生産に関連する場所であったことを示している。過去の調査では、第2次調査（昭和49年度）で鉄鍛冶遺構と考えられる遺構（A-2号住居跡）が検出されているが、この遺構は溝から北東方向にわずか50m程度の場所に位置する（第4図参照）。時期はほぼ同時期と考えられるため、溝の埋没時に鉄鍛冶が行われていた可能性が強い。3号溝で出土した未製品の鉄は、製作時に排出される鉄くずを溝へ廃棄したものが大半と考えられる。

この結果、当調査地から北西の第2次調査地にかけてのエリアは、鉄鍛冶などの鉄生産エリアであったことが想定される。溝から南側については、ほとんど鉄が出土しなかったことから、この溝が鉄工場のエリアを区分する意味も持っていた可能性がある。

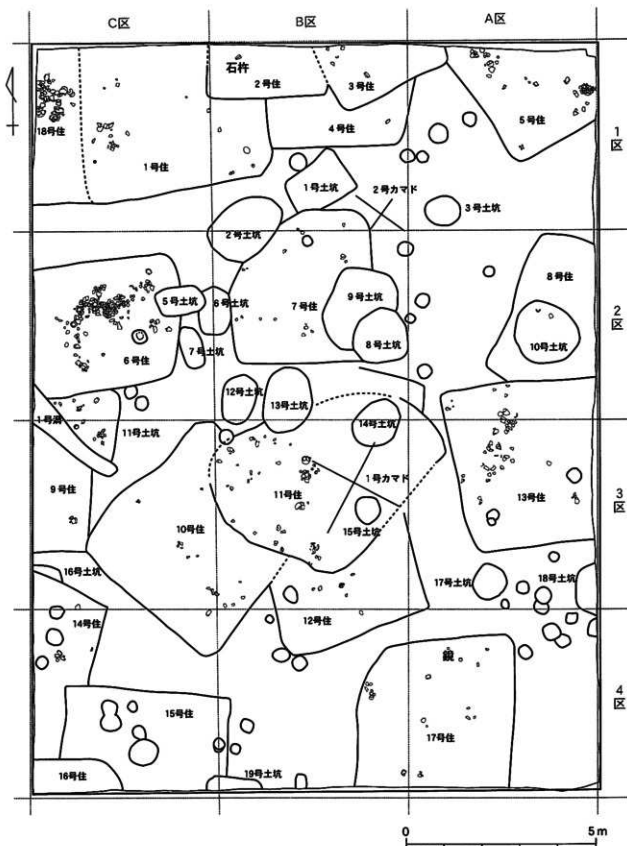
今回の調査で、もう1点注目すべき点は、鋳造の鉄が出土した点である。全3点のうち1点は木棺墓から出土したものであるが、これは副葬品ではなく流れ込みと考えている。おそらく、3号溝埋土にあったものが、木棺墓築造の際に掘り上げられて、再び埋まったものであろう。鋳造鉄と判断できた鉄3点は、一つは鋳造鉄斧の側面部であり、関も確認される。もう一つも鋳造鉄斧の表面部で、鋳造鉄斧特有の微隆突帯が見える。最後の1点は、器種不明であるが、鉄の融解部分が確認されたため、鋳造と考えた。現在のところ、完形の鋳造鉄斧は出土していないが、その一部は今回の2点以外に第12次調査（平成8年度：84-2番地）で1点出土している。いずれも破片であり、再加工した痕跡は認められていない。もともと完形であったものが破損し、再利用されずに廃棄されたものであろう。再利用は積極的に行われていないようである。

鋳造鉄斧が当遺跡に流通していたことが確認されたことは、今回の調査の大きな成果であった。

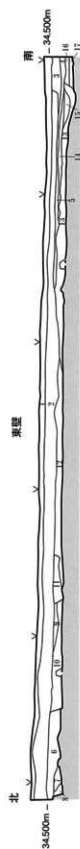
Ⅲ 110-2番地

1 調査地、層序

(1) 調査区について (第36、37図 P.L.10)



第36図 110-2番地遺構配置図 (S = 1/100)



- | | | |
|----------|-------------|------------------|
| 1層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 2層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 3層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 4層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 5層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 6層 表土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 7層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 8層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 9層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 10層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 11層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 12層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 13層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 14層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 15層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 16層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 17層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |



- | | | |
|----------|-------------|------------------|
| 18層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 19層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 20層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 21層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 22層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 23層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 24層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 25層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 26層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 27層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |
| 28層 暗褐色土 | 01ac0102/23 | しまりややあり、粘性あまりない、 |

第37図 110-2番地 グリッド土層断面実測図 (S=1/100)

110-2番地は、指定地に隣接する畑地で、現在はトウモロコシや牧草が耕作されている。

地形は一見平坦であるが、地表面の標高を見ると、北端が34.95m、南端が34.62mであり、北側から南側にかけて緩やかに低くなっていることが分かる。また、東西についても両端で標高差が0.19mあり、東側から西側にかけて同じ程度の傾斜が認められる。

調査区は畑の地割に合わせて、長さ20m、幅15mの南北方向に長いグリッドを設定し、5m単位で区を分け、東から西へA、B、C。北から南へ1、2、3、4と名づけ、A-1～C-4までの12区画に分けた。

(2) 層序について

基本層序は、表土から地山まで4層に分類された。堆積状況、土色、土質については、第37図を参照いただきたい。

2 遺構と遺物

110-2番地で検出された遺構は、住居跡が18基、土坑が19基、溝が1条、カマド状遺構が2基であった。遺

構ごとに記述する。

(1) 住居跡

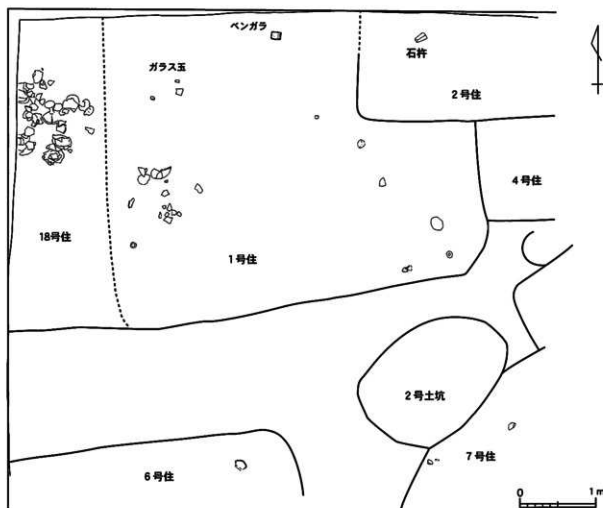
① 1号住居跡 (第38、39図 P L 11)

C-1区に位置する。住居北側は調査区外で、西側の18号住居跡、東側の4号住居跡を切っている。主軸はほぼ東西を向いており、東西幅は4.9mを測る。

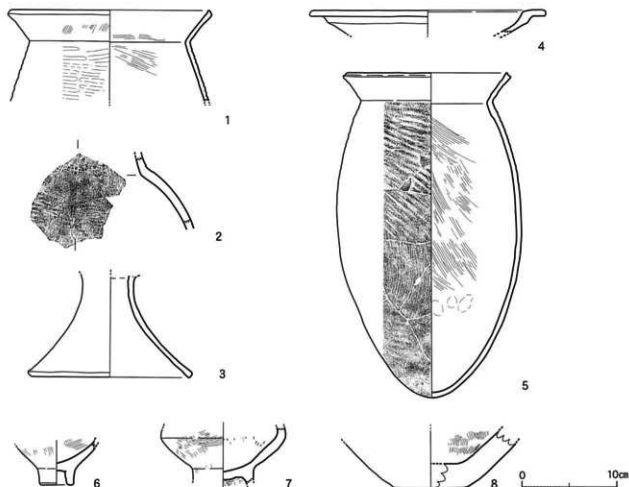
隣接する住居の前後関係を把握するために、グリッド北壁に沿ってサブトレンチを入れた。その結果、床面までの深さは28cmであった。また、床面には長軸13cm、短軸11cm、不整形の楕円状にベンガラが検出された。厚さは数mmとわずかであったが、暗褐色の埋土に鮮やかな赤色が映えていた。

全体を掘り下げていないため、床面直上の遺物はないが、埋土内からガラス玉 (第68図2) のほか、土器数点が出土した (第39図)。

1は甕の上半部である。2は壺の肩部である。タタキ後縦刷毛で調整されている。3は台付鉢の台部である。透孔がないことから判断した。4は高坏の口縁部である。5は長胴甕である。口唇部がややくぼんでいる。6は小



第38図 110-2番地 C-4区 遺構配置図 (S=1/50)



第39図 110-2 番地 1号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

型の鉢か。高台になっている。7は台付鉢か、8は壺の底部と思われる。

②2号住居跡(第38、40、41図 P L 11、17)

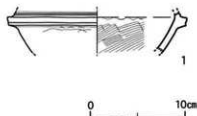
B-1区にあり、西側の1号住居跡と南側の4号住居跡を切り、3号住居跡に切られている。南壁から幅は3.2mであることが分かる。北側半分が調査区外であるため、長さは不明である。1号住居跡で述べたサブトレレンチから、深さは約30cmであることが分かった。

特筆すべきことは、サブトレレンチ内から朱の精製に使用された石杵が出土したことである。床面ほぼ直上で、やや斜めに倒れかけるような状態で出土した。

石杵の平面形は、頂点の丸い直角三角形を呈する(第41図 巻頭図版2 P L 17)。下辺の形状から、かなり使用されたことが窺える。両側面はほぼ平坦で整った形をなすが、人為的な加工は認められない。長さは14.3cm、幅は9.7cm、厚さは6.1cmを測る(値は全て最大値である)。重さは1.50kgであった。横断面は長方形というよりむしろ、台形に近く、背面から前面に行くにつれて厚みが薄くなっていく。側面の稜線は磨耗のため角を失い、丸みを帯びていて、部分的に光沢を持っている。磨面はやや

舟底状で両端が反り上がる。表面は滑らかで前面から背面の方向に条痕が見える。朱の付着は肉眼で全面にわたって確認できるが、特に背面が顕著で、中でも左側面側に濃く認められる。朱は石のくぼみに入り込んだ状態もあれば、面的に薄く広がっているものもある。面的に認められるのは、前面と背面に多い。石材は安山岩と思われる。

このほか上面で土器片が出土した。第40図1は無頭壺の胴部と思われる。屈折部には断面形が台形の突帯がめぐる。突帯の上位には数条の凹線が施されている。



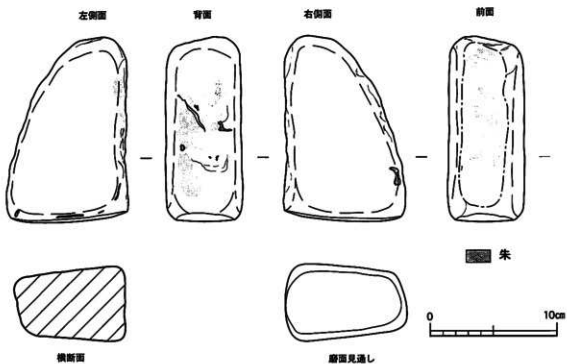
第40図 110-2 番地 2号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

③ 3号住居跡 (第42図)

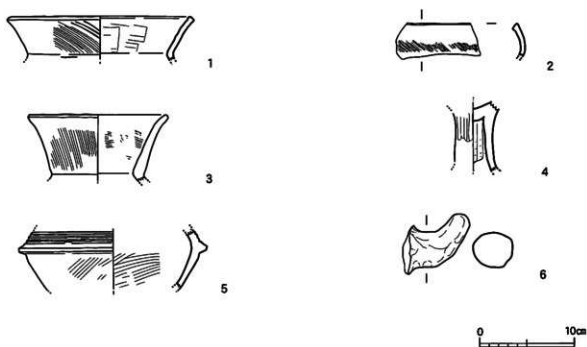
B-1区にあり、西側の2号住居跡、東側の5号住居跡、南側の4号住居跡を切っている。主軸は東北東-西南西を向き、長さは3.1mを測る。住居北半分は調査区外のため、もう一方の軸の長さは不明である。深さはサ

プトレンチで14cmと確認した。

遺物は上面で出土したもののみを取り上げた。第42図1は甕の口縁部である。おそらく長胴甕であろう。2は鉢の口縁部である。3は壺の口縁部である。4は高坏の脚部である。5は無頸壺の胴部と思われる。2号住居跡



第41図 110-2番地 2号住居跡出土 石片実測図 (S = 1/3)



第42図 110-2番地 3号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

出土とはほぼ同形で、若干胴部に丸みを帯びる。6は古代土師器甕の把手である。

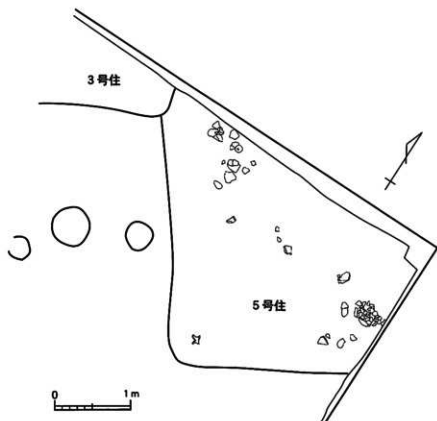
遺物は検出上面で土器片が出土しているが、小片のため掲載していない。

④ 4号住居跡

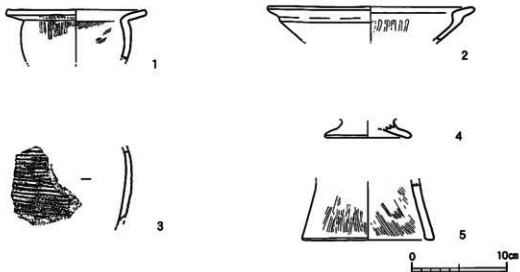
調査区北側中央（B-1区）に位置する。西側の1号住居跡、北側の3号、4号住居跡に切られている。そのため、規模は不明である。また、深さも確認していない。

⑤ 5号住居跡（第43、44図）

A-1区で検出された。大半が調査区外で、検出されたのは住居の南西部分だけである。平面形は方形を呈し、規模等は不明である。深さは、検出でとどめたため不明



第43図 110-2番地 5号住居跡実測図（S=1/50）



第44図 110-2番地 5号住居跡出土遺物実測図（S=1/4）

である。

遺物は検出上面で出土したが、大半は取り上げず現地に残した。第44図1は小型甕の上半部と思われる。2は高坏の口縁部である。3は甕の胴部と思われる。4は台付鉢の台部である。5は器台下半と思われる。

⑥6号住居跡 (第46図 P L 12)

C-2区で検出された。南の11号土坑を切り、1号溝、5号土坑に切られている。平面形は長方形を呈し、主軸は東西を向く。南北軸の長さは3.4mを測る。検出時点で相当量の土器が集中して出土した。住居廃棄段階に土器溜まりとなったようである。遺物は現地に保存し、取り上げていない。現地の確認で、遺物の時期はおおよそ弥生時代終末期と判断された。

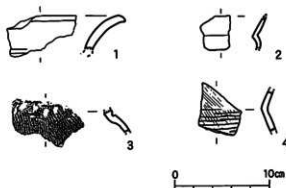
⑦7号住居跡

B-2区で検出されたほぼ正方形の住居跡である。北西部を2号土坑、西側を6号土坑、南西部を8号、9号土坑に切れ、北側の1号土坑を切っている。長軸は調査区とはほぼ平行で、南北軸は4.0m、東西軸は3.8mを測

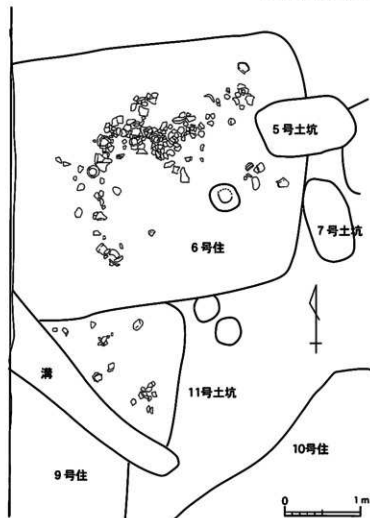
る。遺構の検出だけに留め、数点の土器片であった遺物は取り上げなかった。

⑧8号住居跡 (第45図)

A-2区で検出された。平面形は方形を呈し、主軸は北東-南西を向く。南側の13号住居跡に切れ、住居内で10号土坑に切られている。住居西壁の長さは4.1mを測る。検出作業時に数点の土器片が出土した。

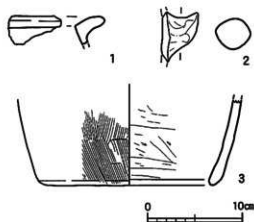


第45図 110-2番地
8号住居跡出土遺物実測図 (S=1/4)



第46図 110-2番地 6号住居跡、11号土坑ほか実測図 (S=1/50)

第45図 1は高杯の口縁部と思われる。2は小型丸底蓋の口縁部と思われる。3は蓋の肩部である。頸部に刺突文が施されている。4は甕の頸部である。外器面にタタキ目が見える。



第47図 110-2番地
10号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

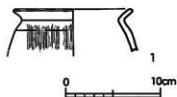
⑨9号住居跡

B-3区で検出された。北側の1号溝および11号土坑に切られている。主軸は調査区とほぼ平行であり、規模は不明である。遺物の取り上げは行わなかった。

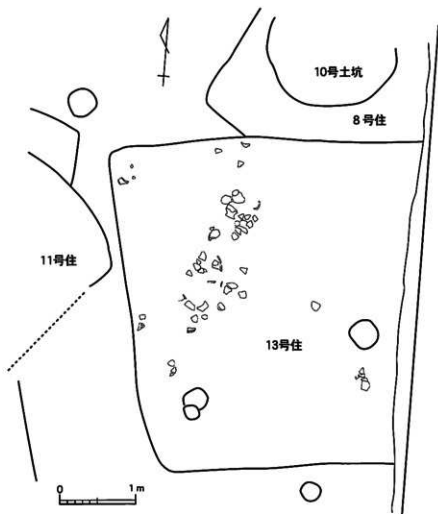
⑩10号住居跡 (第47図)

C-3区で検出された。平面形がほぼ正方形をなす住居跡である。主軸は北東-南西を向き、北東軸の長さは4.8m、それと直行する北西軸の長さは4.5mを測る。住居の北東部分は11号住居跡に切られ、西側の12号住居跡、東側の9号住居跡を切っている。

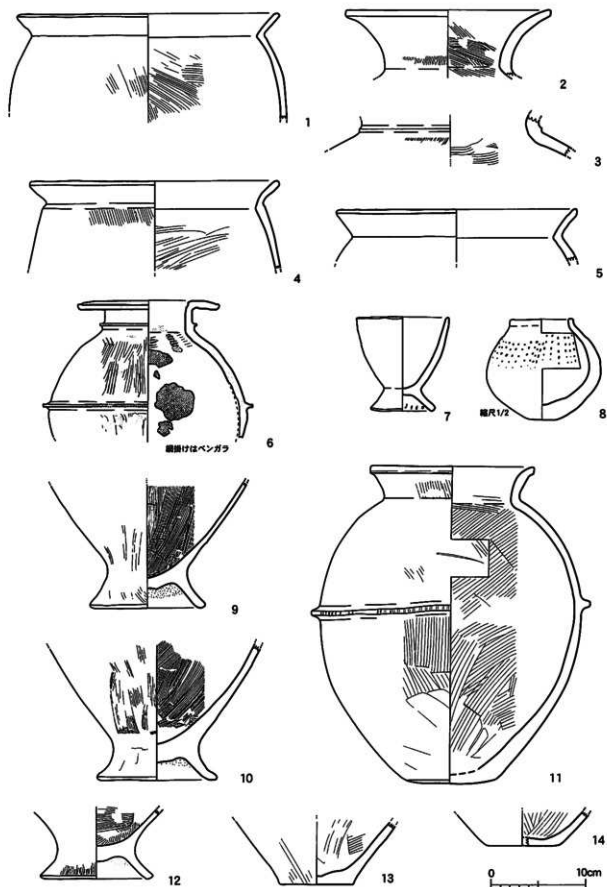
床面まで掘り下げなかったため、この遺構に伴う遺物ではない可能性が高いが、検出作業中に数点の土器片を



第48図 110-2番地 11号住居跡
出土遺物実測図 (S = 1/4)



第49図 110-2番地 13号住居跡実測図 (S = 1/50)



第50図 110-2番地 13号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

取り上げた。いずれも古代土師器である。第47図1は裏の口縁部である。2は把手である。3は甕の底部である。

⑪11号住居跡（不整形土坑）（第48図 P L 13）

B-3区で検出された不整形の遺構である。便宜的に住居跡とした。北東軸の長さは5.0mで、それと直行する北西軸の最大値は4.5mである。西側の10号住居跡、南側の12号住居跡を切っており、北側の13号住居跡や遺構内の14号土坑に切られている。この検出面より上層に1号カマドが検出されたため、そのカマドに伴う遺構かとも考えたが、積査の結果、そのように判断できる検出状況ではなかった。

遺物は検出面で少なからず出土したが、実測のみ行っで、現地に保存した。検出作業中に取り上げた土器片のうち、実測可能なものだけ掲載した。第48図1は小型甕の上半部である。

⑫12号住居跡

B-3区で検出された。主軸の西北西軸の長さは3.9mを測る。北西側の10号住居跡及び北側の11号住居跡に切られている。遺構の検出で留め、出土した土器片などの遺物は取り上げず、現地に残した。土器は、古代の土師器片が見られた。

⑬13号住居跡（第49、50図 巻頭図版2 P L 12、14）

A-3区で検出された。住居東半分が調査区外である。短軸がほぼ南北に向く、平面形が長方形の住居跡で、短軸の長さは1.3mを測る。検出時で、相当量の土器片が出土し、その中で赤彩された土器が確認されたので、周辺の土器とともに取り上げた。

第50図1、4、5は甕の口縁部である。いずれも頸部内器面の屈折部分が角張っている。2は甕の口縁部であ

る。3は甕の頸部である。6は甕の上半部である。口縁は鋤形をなし、頸部と胴部最大径部に突帯がめぐる。胴部は刻目突帯である。内器面の肩部から胴部にかけては鮮やかな赤色顔料（ベンガラ）が確認される。また、土器破損部の断面にも顔料が付着しているのも注目される。7は小型の台付鉢である。鉢が他と比べて深い。8は短頸甕のミニチュア土器である。肩部に1列5点からなる刺突文列が巡る。9、10、12は甕の下半部である。11は完形の甕である。口唇部下端には凹線状のくぼみが1条認められる。胴部上位には1本のへら描きが施され、胴部中位には1条の刻目突帯が巡る。13、14は甕の底部である。

また、検出上面で炭化物が出土した。これを取り上げて、樹種同定を委託した。その結果、ハイノキ属と分かった（詳細は第5章を参照）。

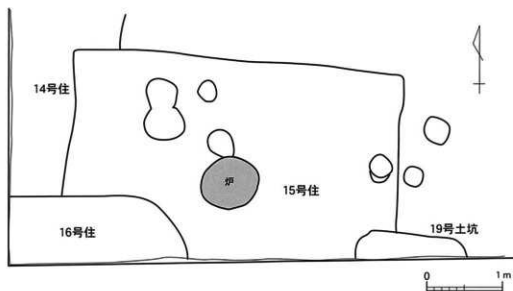
⑭14号住居跡

C-4区で検出された。東側の15号住居跡及び南側の16号住居跡に切られている。北側の16号土坑を切っている。住居跡西側の大半は調査区外であるため、規模は不明であるが、平面形は方形を呈すると思われる。検出で留めたため深さは不明である。遺物は取り上げていない。

⑮15号住居跡（第51、52図 P L 12）

C-4区で検出された。平面形は長方形を呈すると思われるが、住居南半分は調査区外であるため、全体の規模は不明である。主軸である東西軸の長さは4.4mを測る。

この部分は上層がかなり擾乱されており、検出作業中にはどのような遺構があるか判断できないでいた。その擾乱部分を除去したところ、非常に硬化した面が広がっていた。この周辺の遺構との前後関係が分からなかった

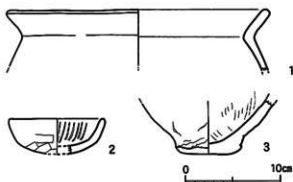


第51図 110-2 番地 15号、16号住居跡実測図（S=1/50）

ため、グリッド南壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、途中で床面が途切れていた。そこで、何らかの遺構が15号住居跡を切っていることが想定された。その後、もう一度検出面上面を精査したところ、西側に別の遺構（16号住居跡）があることが分かった。15号住居跡は16号住居跡に切られていた。

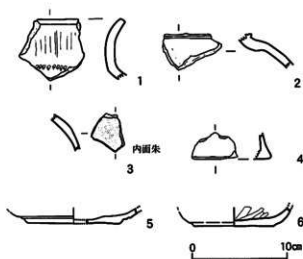
床面の中央部には、直径75cmの炉が検出された。炉の埋土は灰と焼土の混ざった暗褐色土であった。

遺物は、床面直上のものは見られなかった。いずれも

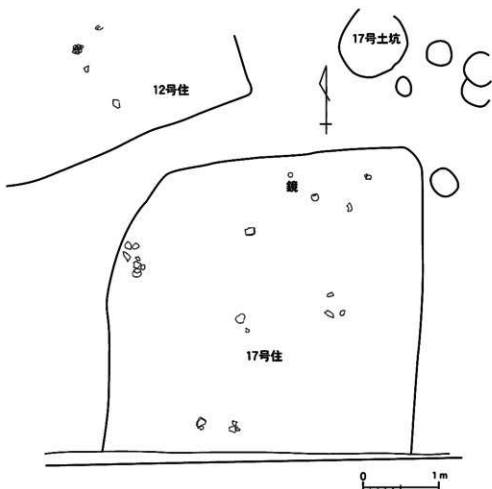


第52図 110-2 香地
15号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

埋土中のものである。第52図1は甕の口縁部である。2は鉢である。内器面は放射状のヘラ磨きが施され、外器面は底部がヘラ削りで整形されている。3は甕の底部と思われる。底部が分厚くなっている。



第53図 110-2 香地
17号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)



第54図 110-2 香地 17号住居跡実測図 (S = 1/50)

⑩16号住居跡 (第51図)

調査区南西隅で検出された。土坑の可能性もあるが、検出された範囲の規模から住居跡とした。北側の14号、15号住居跡を切っている。主軸は調査区と平行である。住居の北東角しか検出されていないので、規模は不明である。

⑪17号住居跡 (第53、54図)

A-4区で検出された。主軸は調査区とほぼ同じで、南北に長い長方形を呈する。住居南側が調査区外であるため、南北軸の長さは不明であるが、東西軸の長さは4.1mを測る。

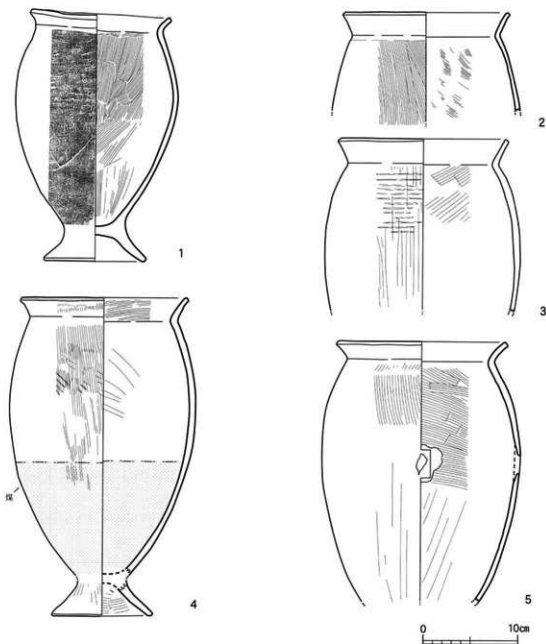
この住居を検出する前の段階で、小型仿製鏡(第69図)

が出土した。検出面からかなり上層で出土したため、鏡はこの住居には伴わないと考えた。

遺物は検出面で出土したものである。第53図1は壺の口縁部である。頸部に刺突文が施されている。2は壺の肩部である。頸部に三角突帯がめぐる。3は内面朱付着土器片である。おそらく裏の肩部であろう。4はジョッキ形土器の底部である。5、6は古代土師器の坏底部である。

⑫18号住居跡 (第38、55、56図 P.13、15)

C-1区で検出された。東側の1号住居跡に切られている。大半が調査区外であるため、規模は不明であるが、深さは10cmを測る。住居南壁から2.2m～3.4mの範囲に、

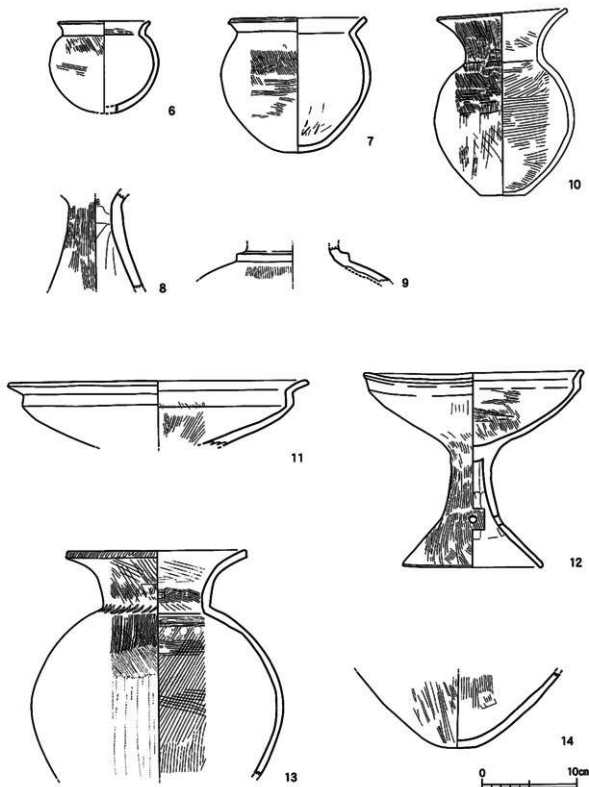


第55図 110-2 番地 18号住居跡出土遺物実測図① (S=1/4)

多数の土器が出土した。中には完形に近いものもあり、一括性が高いことからこれらを取り上げた。

第55図1～5は甕である。3、4の外器面にはタタキ目が薄く残る。また、4の胴部中位から底部にかけて、

両器面ともに煤の付着が明確に認められる。胴部中位から下位へ4cmの幅が帯状に最も煤けている。第56図6、7は小型の甕である。7の口唇部は凹輪状にくぼんでいる。8は高坏の脚台部と思われる。9は甕の頸部である。



第56図 110-2 香地 18号住居跡出土遺物実測図② (S = 1/4)

内器面が剥離している。10は完形の広口甕である。全体に黒色を呈する。11、12は高坏である。12の口唇部はややいびつである。13は蓋の上半部である。口唇部には刻目が施され、頸部にはヘラを押し当てた刺突文がめぐる。胴部中位から下位にかけては、外器面に縦方向のヘラ削りが認められる。内器面は全体に刷毛調整が施されているが、肩部に指押さえの痕が見える。14は蓋の底部である。

(2) 土坑

土坑は全部で19基検出された。

① 1号土坑

B-1区で検出された。主軸は北東-南西を向き、平面形は長方形を呈する。長軸は1.6m、短軸は1.3mを測る。南の7号住居跡に切られている。

上面で土器片が出土した(第57図3、7)。

② 2号土坑

B-1区とB-2区をまたがる箇所で検出された。平面形は楕円形で、主軸は1号土坑とほぼ同じである。長径は2.0m、短径は1.4mを測る。南東の7号住居跡を切る。

遺物は小片の土器である(第57図9)。

③ 3号土坑

A-1区で検出された。整った楕円形を呈する。主軸はほぼ東西で、長径は0.9m、短径は0.5mである。

④ 4号土坑 欠番

⑤ 5号土坑

C-2区で検出された。現代の擾乱である。

⑥ 6号土坑

B-2区とC-2区の境で検出された。主軸がほぼ南北を向く、楕円形の土坑である。長径は1.8m、短径は0.8mを測る。

⑦ 7号土坑

C-2区で検出された。主軸は北北西-南南東を向き、平面形は楕円形を呈する。長径1.1m、短径0.6mを測る。

⑧ 8号土坑

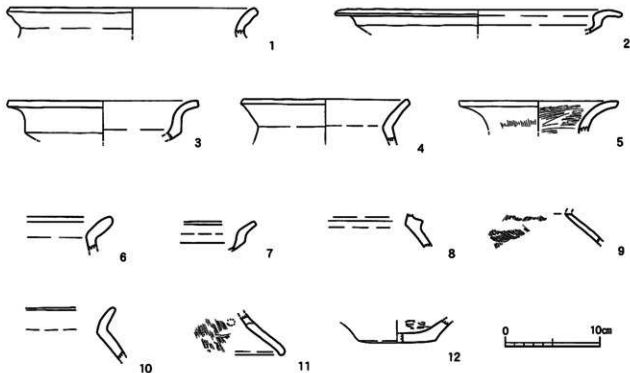
B-2区で検出された。いびつな円形を呈しており、直径は1.4mを測る。北西にある9号土坑を切っている。遺物は小片の土器片である(第57図2、6、10、12)。

⑨ 9号土坑

B-2区で検出された。ややいびつな楕円形を呈する。長径は2.2m、短径は1.7mを測る。主軸は北北東-南南西を向く。西の7号住居跡を切って、南東の8号土坑に切られている。

⑩ 10号土坑

A-2区で検出された。ちょうど8号住居跡内に位置



第57図 110-2番地 土坑出土遺物実測図 (S=1/4)

する。正門に近い楕円形を呈しており、主軸は西南西―東北東を向く。長径は1.6m、短径は1.2mである。

上面で土器の小片が出土した（第57図5、8）。

⑪11号土坑

C-2区からC-3区にかけて検出された。北側を6号住居跡、西を溝と9号住居跡に切られているため、規模は不明である。平面形は方形を呈すると思われる。

上面で少なからず土器片が出土したが、ほとんどを現地に残した。検出時に取上げた土器片が第57図1である。

⑫12号土坑

B-2区で検出された楕円形の土坑である。主軸は北北西―南南東を向き、長径は1.3m、短径は0.9mを測る。

⑬13号土坑

B-2区で検出された。南の11号住居跡を切っている。主軸はほぼ南北で、平面形は楕円形を呈する。長径は1.7m、短径は1.3mである。

⑭14号土坑

B-2区からB-3区にかけて広がる楕円形を呈する土坑である。主軸は北東―南西を向いており、11号住居跡を切っている。規模は長径1.3m、短径1.1mである。

小片の土器が出土している（第57図11）。

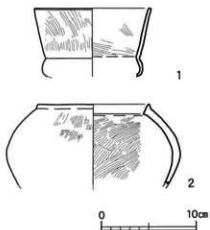
⑮15号土坑

B-3区で検出された小型の土坑である。ビットとすべきか判断に迷ったが、直径が0.7mとビットにしては大きいので土坑とした。

平面形はややいびつな円形を呈する。

⑯16号土坑

C-3区で検出された。南の14号住居跡に大半を切られているため、規模は不明である。検出されたのは北東の隅で、その形状から平面形は方形と推定される。



第58図 110-2番地 溝出土遺物実測図（S=1/4）

⑰17号土坑

A-3区で検出された。直径0.9mのほぼ正円形を呈する。

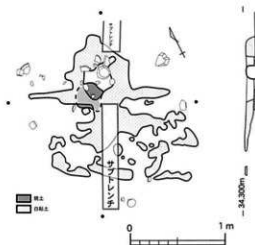
⑱18号土坑

A-3区西壁付近で検出された。西半分が調査区外である。やや角張る多角形を呈する。南北軸は1.4mを測る。

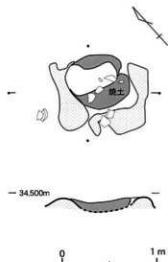
小片の土器が出土した（第57図4）。

⑲19号土坑

B-4区の調査区南壁付近に位置する。大半が調査区の外であり、検出されたのは土坑の北側の一部である。平面形は隅丸長方形と推定される。東西軸は1.5mを測る。



第59図 110-2番地 1号カマド実測図（S=1/40）



第60図 110-2番地 2号カマド実測図（S=1/40）

⑨土坑内出土遺物 (第57図)

1は甕の口縁部である。2、3は高杯の口縁部である。4は小型の甕の口縁部である。5は壺の口縁部。6は甕の口縁部。7は高杯の口縁部。8は壺の頸部。9は甕の肩部。10は甕の口縁部。11は高杯の脚台基部である。12は壺の底部である。

(3) 溝 (第46、58図)

調査区西端中央で、長さ2.8mにわたって検出された、最大幅0.5m、深さわずか9cmの浅い溝である。遺物はサブトレンチから出土したものである。第58図1は小型丸底壺である。2は短頸壺である。

(4) カマド

B-3区とB-1区で白粘土と焼土が集中して検出された。いずれも、検出当初は住居に伴うものと考え、周辺を精査したが、結局住居のプランはおろか、床面も検出することができなかった。そのため、屋外のカマドの可能性を考え、B-3区を1号カマド、もう一方を2号カマドとした。

①1号カマド (第59、61図 PL14)

B-3区で検出された。ちょうど11号住居跡東側に位置する。しかし上記のとおり、11号住居跡との係わりは確認できなかった。

主軸は北北東-南南西を向き、白粘土は長さ1.5m、幅1.8mの範囲に広がっていた。その範囲の北側に縦、

横32cmの範囲で粘土の無い黒褐色堆積部分があった。また、その内部からは、完形の甕 (第61図1) が底部を天に向けて、ほぼ直立した状態で出土した。さらに、下層からは直径約25cmの範囲で焼土が検出された。これらのことから、黒褐色が堆積していた範囲を受け部としたカマドであったと想定される。

このカマド及びその周辺から古代の土師器が出土した。第61図1は小型の甕である。2は甕の口縁部である。3は小型の鉢である。コップ状をなす。底部には指による調整痕が残る。また、底面には蓆の編みの痕が見える。4は土製の紡錘車と思われる。いびつな円形を呈する。中心部分が1.4cmと最も分厚く、周縁に行くにつれて薄くなっていく。直径は約6cmで、孔の直径はおよそ0.7cmである。

②2号カマド (第60、62図)

B-1区で検出された。主軸は北東-南西を向き、長さ82cm、幅85cmを測る。両袖の間隔は65cmで、それぞれの袖の長さとは幅は、東側袖の長さは43cm、幅は20cm、西側袖の長さは63cm、幅は23cmであった。焚口部には直径65cmの焼土が三日月状に広がっていた。煙道は確認できなかった。また、支柱などは出土しなかった。

カマドに伴うと判断された遺物は2点あった。第62図1は土師器の杯である。2は甕の口縁部である。

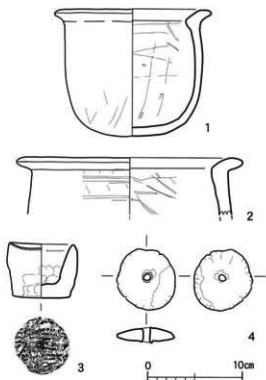
(5) 遺構に伴わない遺物 (第63～71図)

包含層割削及び検出作業中に出土したもので、遺構に伴わない遺物を掲載した。土器については完形に近いものが多いため、下層の遺構に伴う可能性を否定できないものもあるが、調査において明確に関連付けることができなかったため、別記する。

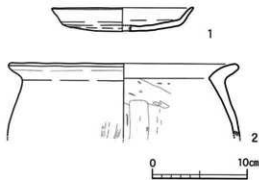
①土器

i 弥生時代～古墳時代 (第63、64図)

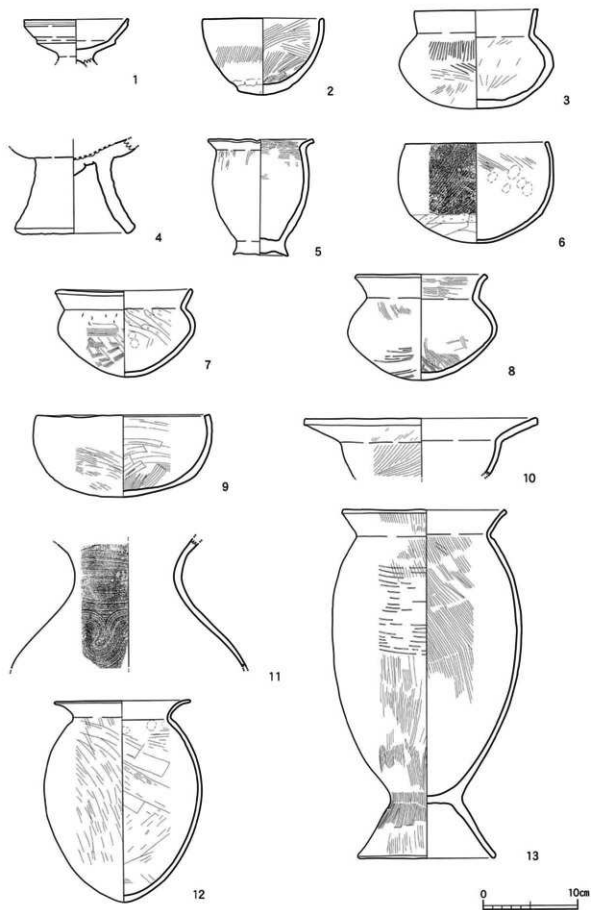
1は器台である。口唇部下に凹線がめぐる。2は鉢である。器壁に厚みがあり、雑な作りである。外器面には編目の痕が見える。3、7、8は有頸の鉢である。



第61図 110-2番地 1号カマド出土
遺物実測図 (S=1/4)



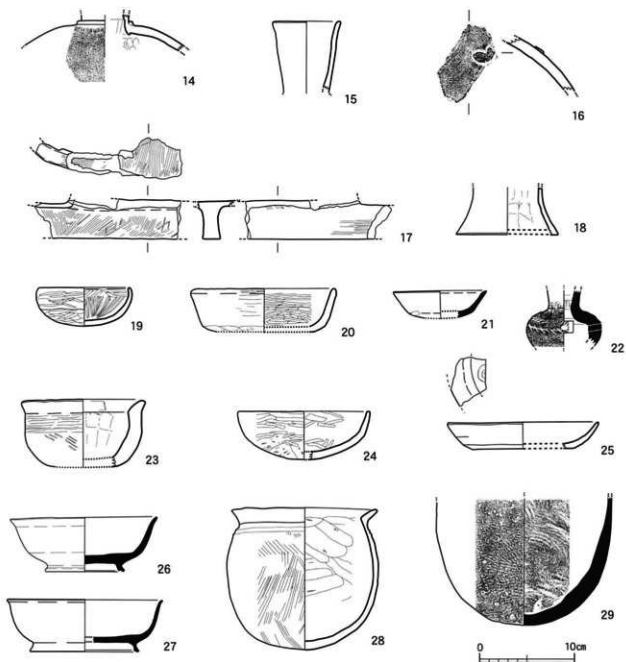
第62図 110-2番地 2号カマド出土
遺物実測図 (S=1/4)



第63図 110-2 番地 遺構に伴わない遺物実測図① (S = 1/4)

4は台付鉢の台部と思われる。焼成が悪く、器面は剥離して凹凸が激しい。また胎土も3mm大の粒の大きな長石などを多く含み、当遺跡の土器の質とは異なる。5は甕のミニチュアである。低い脚台が付く。6、9は完形の無頭の鉢である。6の口縁部から胴部にかけての外器面にはタタキが残る。10は高杯の口縁部である。11は壺の頸部から肩部である。頸部には櫛描平行文、肩部には櫛描波状文が施されている。胎土は精緻で色調は淡褐色を呈する。胎土のほか文様や器形から白川系土器の長頭壺と思われる。12は完形の甕である。焼成が悪く、外器面の調整痕は余り残っていない。13は完形の甕である。胴

部外器面にタタキ目が見える。14は壺の頸部である。頸部の突帯の下には、2列の波状文が施されている。15は長頭壺の口縁部である。16は壺の肩部である。外器面にはハート型の貼付文がある。17は器形不明土器である。破片は端部がやや曲がる板状を呈しており、一面はほぼ平らになって、その反対の辺には透かしが見られたため、平らな面を底面とする高台部分と考えた。一般の器とは考えにくく、何かを象った土製品の一部と思われるが、形態は全く不明である。18はジョッキ形土器の体部である。



第64図 110-2番地 遺構に伴わない遺物実測図② (S=1/4)

ii 古代、中世 (第65図)

19は黒色土器の碗である。内器面は黒色で、外器面は一部黒色を呈していない部分が見られる。ミガキによって光沢をもつ。20は土師器の坏である。外器面底部はケズリによって整形されている。21は須恵器の小型坏である。22は須恵器甕である。23は土師器の小型壺である。24、25は土師器の坏である。25の底部外器面には墨で同心円文が描かれている。26、27は須恵器の坏である。27の高台端部は内側に鋭く突き出ている。28は土師器の甕である。肩部に浅い凹線がめぐる。29は須恵質の甕下半である。外器面に格子状のタタキ目、内器面に同心円状のタタキ目が残る。焼成が甘く、軟質である。全体に灰色を呈するが一部にぶい褐色を呈する。

iii 縄文土器 (第65図 P L 17)

縄文土器がわずかに出土した。口縁部を中心に掲載する。

1、3は北久根山式土器の口縁部である。2は磨消縄文系土器の口縁部である。器壁はやや薄く、内湾する。4は曾畑式土器の深鉢胴部と思われる。胎土に滑石が混入する。5は磨消縄文系土器深鉢の口縁部である。平行する沈線で区画された中に磨消縄文が施されている。内器面はヘラ磨きが施されている。

iv 内面朱付着土器片 (第66図 巻頭図版2)

当調査区からは、上記のとおり朱の精製に使用された石杵が出土しているが、内器面に朱(またはベンガラ)が残る「内面朱付着土器片」も多く出土した。これまで

の調査では、一調査区で10点程度出土することはあったが、今回のように大きな破片で多数出土することは珍しい。特に、甕や鉢の口縁部が出土しており、時期の比定が可能となった点は大きな成果といえる。

出土数は、1cm角のような小片も含めて、合計で56点に上る。このうち、明らかに同個体であるものを統合していくと、少なくとも26個体の内面朱付着土器があったことが分かった。器種は、甕のほか、壺、鉢がある。

図に掲載した15点のうち、付着する赤色顔料が朱であるのは10点(2、3、6、7、9、11、12、13、14、15)で、このうち、3、12、15は同一個体である。

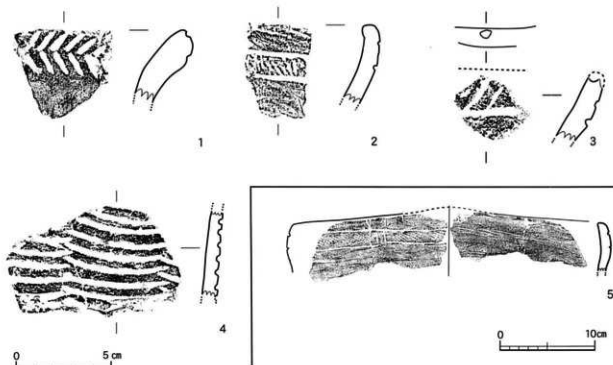
2の甕口縁部の形施から考えると、頸部に低い突帯がめぐっており、後期後半でもやや古手のものと思われる。また、14の甕胴部外器面にはタタキ目が残っており、弥生時代終末期の頃と考えられる。7は高坏か。

v ミニチュア土器 (第67図)

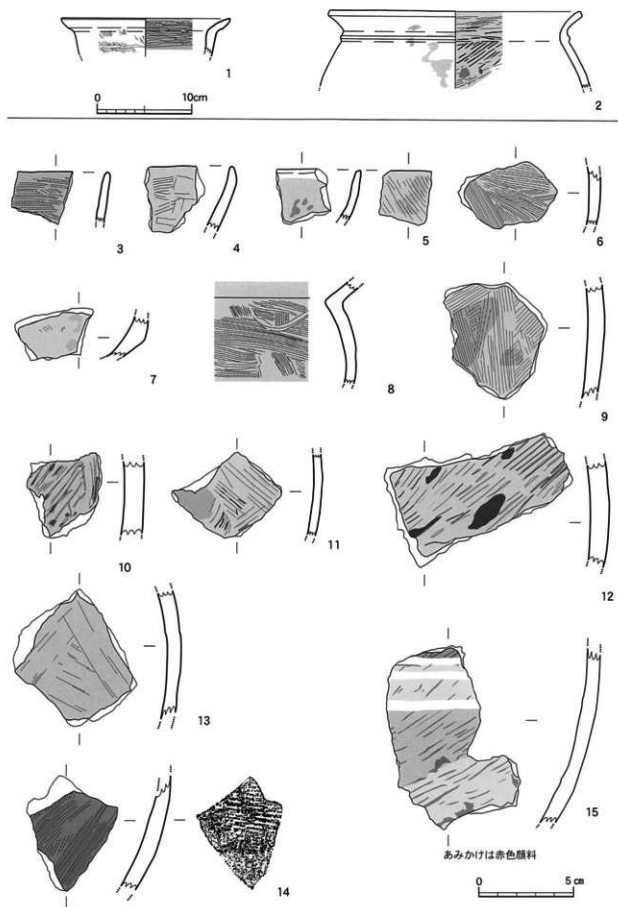
第67図12、14は鉢のミニチュア土器である。14は作りが雑で、形がいびつである。13は器種不明のミニチュア土器である。15は鉢のミニチュア土器である。円柱状の粘土の塊に指を入れて成形されたようである。口唇部が内側に肥厚する。16は壺のミニチュア土器である。

②土製品 (第67図)

1は勾玉である。2～4は土錐である。5は焼成粘土塊か。6～8はスプーン形土製品と思われる。



第65図 110-2番地出土 縄文土器実測図 (1~4はS=1/2、5はS=1/4)



第66図 110-2番地出土 内面朱付着土器片実測図 (S = 1/2, 1, 2はS = 1/4)

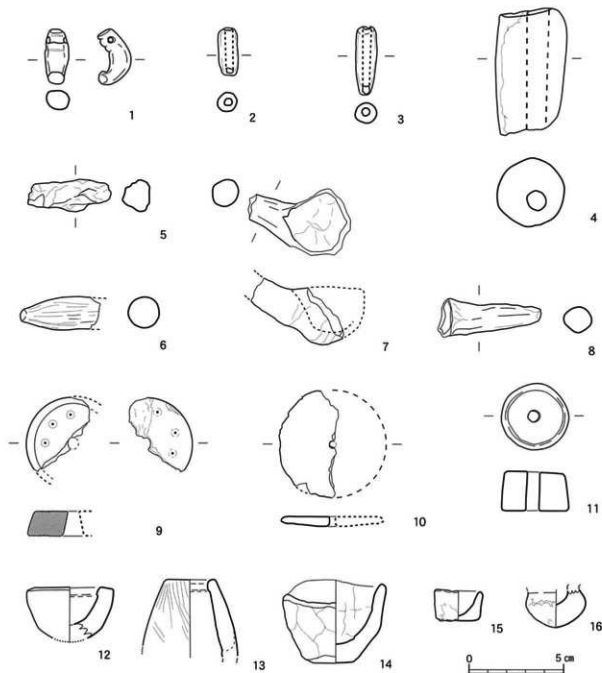
③紡錘車 (第67図 巻頭図版2 PL17)

石製及び土製の紡錘車が出土した。9は滑石製の紡錘車である。約半分を欠いている。断面は台形を呈し、厚さは1.3cmである。上面の直径は2.0cm、下面の直径は2.4cmと推定される。孔の直径も上面と下面では異なり、上面の孔は6mm、下面の孔の直径は12mmと推定される。表面には直径4mmのコンパス文が刻まれている。円の形態と直径は同一であるため、同器具で施されたと判断される。確認されたコンパス文の数は3つであるが、互いの間隔から推定すると本来は8つあったと考えられる。重さは25.0gを量る。10は土製の紡錘車である。ほぼ半

分が欠けており、推定直径は28mmで、孔の推定直径は3mmである。厚さは最大55mmで、中心部から周縁にかけて薄くなっていく。重さは現状で9.0gであった。11は須恵質の紡錘車である。ヘラ切りによって整形され、上下両面とも平坦な面をなしている。上面の直径は32mm、下面の直径は36mmで、厚さは20～22mmを測る。

④玉類 (第68図 巻頭図版2 PL17)

1～4はガラス玉である。5は軟玉(ネフライト)製の勾玉である。これまで石製勾玉は、滑石製が1点(42次: H13年度120-1番地)あるのみで、今回が2例目と

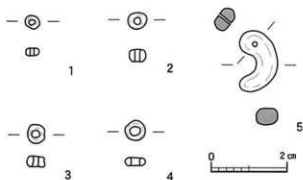


第67図 110-2番地出土 紡錘車、土製品等実測図 (S=1/2)

なる。勾玉出土地の周囲も精査してみたが、伴う遺構は検出できなかった。

⑤小型仿製鏡（第69図 巻頭図版2 P L 13, 17）

17号住居跡の部分で触れたが、A-4区の17号住居跡



第68図 110-2番地出土 玉類実測図（S=1/1）



第69図 110-2番地出土
小型仿製鏡実測図（S=1/1）



第70図 110-2番地出土 石器実測図（S=1/4）

北側の地点で小型仿製鏡が1面出土した。出土状況は、背面を天に向けほぼ水平の状態であった（P L 13）。

径は4.7cmと小さく、縁の厚さは0.28cmである。重さは12.7gを量る。

櫛歯文帯および擬銘帯のくぼんだ部分と縁の外周部にベンガラが付着しており、特に櫛歯文帯に顕著に見られる。銅の質はあまり良くなく、ヒビが1本外周から鈕に向かって入っており、錆も進んでいる。また、錆上がりも悪く、全体の約3分の1は文様が見えない。

背文は、外周から縁→櫛歯文帯→擬銘帯→鈕の順で構成されている。縁の幅は狭く、断面は角張っている。擬銘帯は、図で言うところの鈕から左部分が不鮮明であるが、銘は抽象と思われる。これらのことから、重圓文日光鏡系仿製鏡1類b類とされる（高倉 1985）。

⑥石器（第70図）

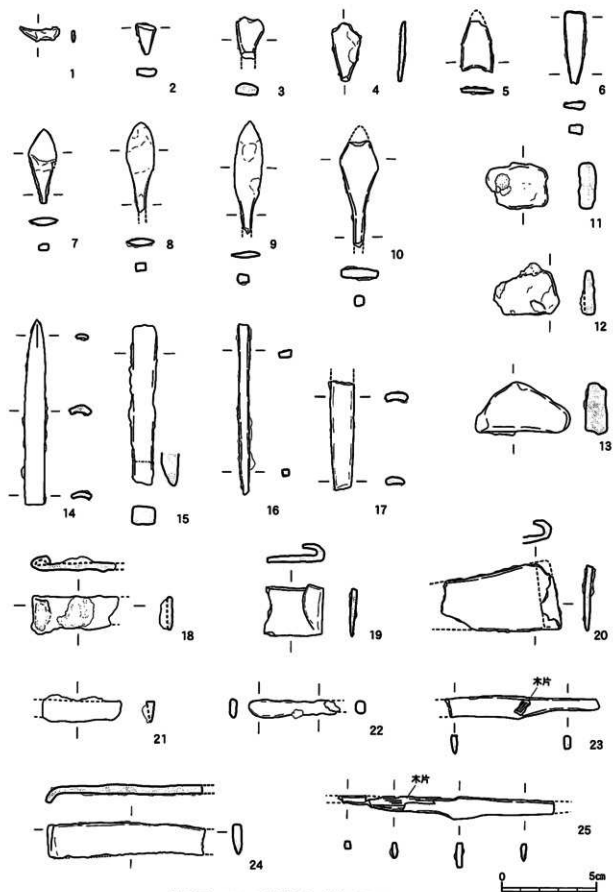
石器の出土数はわずかであった。1は完形の磨製石斧である。色調は薄黄緑色を呈する。重さは622gを量る。3は石包丁の未製品と思われる。2、4は砥石である。いずれも砂岩と思われる。4の一方の底面には浅い溝が見える。

⑦鉄（第71図 P L 17）

鉄は合計25点出土した。このうち製品と考えられるものが18点と大半を占めている。

製品は、鉄鍔7点（4～10）、釘1点（16）、鉋2点（14、17）、刀子3点（21、23、25）、手鎌2点（18、19）、鎌2点（20、24）、鋳1点（15）である。非製品は7点で、薄片状鉄が1点（1）、棒状鉄が1点（22）、板状鉄が5点（2、3、11～13）である。計測値等は第10表に記載している。

遺構に伴うものではなく、地区別で出土量をみると、B-2区が5点、C-1区が3点で比較的多く出土している。



第71圖 110-2 番地出土 鉄実測圖 (S = 1/2)

3 まとめ

(1) 遺構について

110-2番地においては、住居跡18基、土坑19基と数多くの遺構を検出した。全ての遺構を掘り下げて、時期を確定したわけではないが、上面の出土土器や包含層の遺物から見て、弥生時代後期後半から終末にかけての遺構が主体と言える。集落において、この時期のかなり密集した居住域を確認できたことは一つの成果といえよう。

また遺構の時期については、近隣の調査区である東側の13次調査（H8年度：110番地）や42次調査（H13年度：120-1番地）と比べて、古墳時代の遺構が極端に少ないことが注目される。ともに、密集した住居跡が検出されており、居住域であることに変わりはないが、時代によって居住域が移動した可能性が考えられる。集落の変遷を考える上で、重要な手がかりとして、注目していきたい。現時点では、時代が新しくなるにつれて、集落の居住域の中心が東側へ移っていくということを想定しておく。

(2) 遺物について

今回の調査では、遺構を完掘せず、検出で留めながらも、当遺跡を代表するような重要な遺物が数多く出土した。

①小型仿製鏡について

一つ目の重要な遺物は、当遺跡で完形で5例目となった小型仿製鏡である。今回出土した仿製鏡は、高倉洋彰氏の分類で重圓文日光鏡系仿製鏡第1型b類、田尻義子氏の分類で重圓文系小型仿製鏡第1型え類とされる。時期は後期初頭から前半に比定されており、当遺跡内では最も古い小型仿製鏡ということになる。国内で流通し始めた比較的早い時期に、この集落も仿製鏡の流通ルートに含まれていたということが明らかとなった。

②朱精製関連遺物について

二つ目の重要な遺物としては、朱精製に関連する遺物の出土が挙げられる。2号住居跡から、朱精製の石杵が1点出土した。ほぼ床直上の出土であったので、この住居跡に伴うものと考えてよいであろう。石杵の時期であるが、2号住居跡の出土土器は、上層出土の小片だけであり、それだけでは時代を限定することができない。遺構の前後関係を見ると、弥生時代終末から古墳時代初頭に収まる。ただし、当調査区においては、古墳時代前期の遺物が極端に少ない。これらを総合すると、2号住居跡、石杵の時期は弥生時代終末頃と判断される。

石杵については、13次調査で表採された棒状石杵を始め、合わせて4点確認されているが、住居跡に伴って出土したのは、今回が初例である。これにより、赤色顔料の精製に関してある程度の時期を特定できたことは、大きな成果であった。

石杵と併せて、内面朱付土器の出土数が非常に多いことも見逃せない。これは石杵が出土したと無関係

ではないであろう。

今回の集中的な出土を積極的に評価して、当調査地点（110-2番地）が、集落における赤色顔料精製の中心エリアであると考えておきたい。

高倉洋彰 1985 「弥生時代小型仿製鏡について」『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学協会

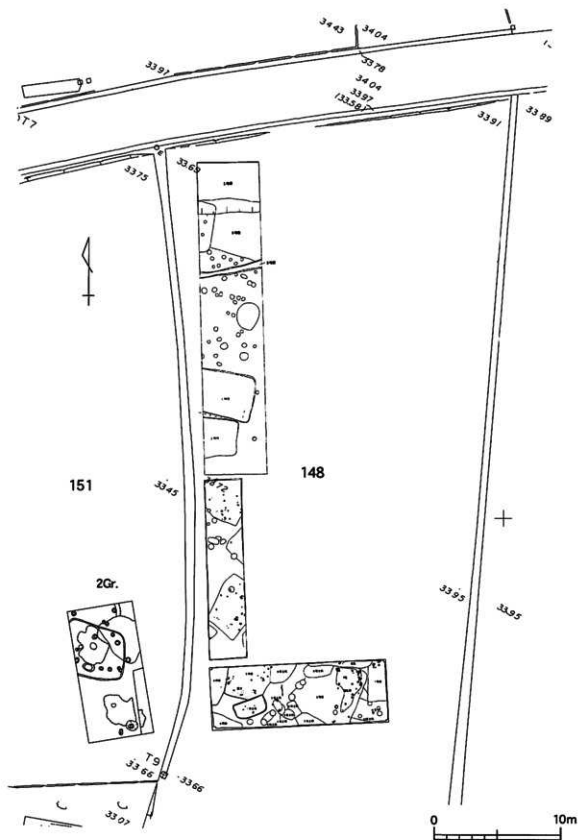
田尻義子 2003 「弥生時代小型仿製鏡の製作地—初期小型仿製鏡の検討—」『青丘学術論集』第22集 財団法人韓国文化研究振興財団

IV 148番地 (第72図 P L18)

1 調査地、順序

(1) 調査区について

148番地は、道路を東西に走る県道方保田山鹿線と、そこから北東側へ分岐し、馬見塚集落へ向かう市道に挟まれた部分で、151番地の東隣の畑である。

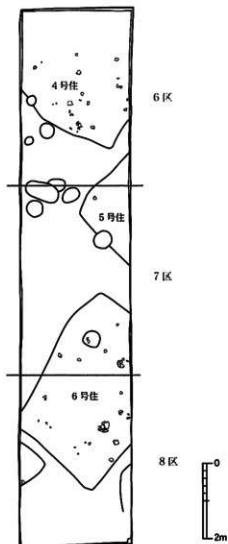
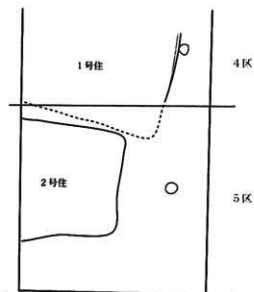
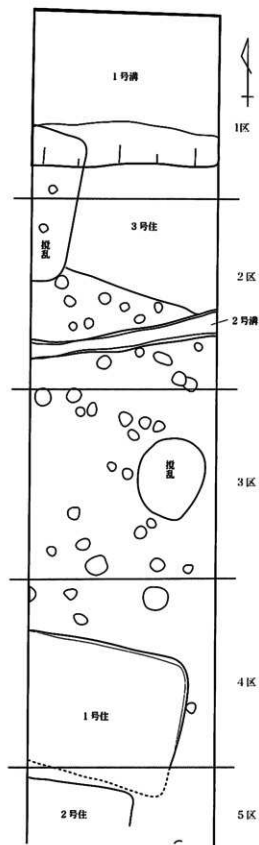


第72図 方保田148番地 調査区配置図 (S = 1/300)

現在はトウモロコシや牧草が耕作されている。

地形は151番地と同様である。北に接する市道よりも

低く、東から西へかけて徐々に低くなっていき、この緩
傾斜は西側の151番地へ続いていく。



第73図 148番地 第1トレンチ追構配置図 (S = 1/100)

調査区は畑の地割に合わせて、長さ25m、幅5mの南北方向に長いトレンチを設定し、これを第1トレンチとした。また、第1トレンチの延長上で北端から40mの地点を基点として、長さ14m、幅5mのトレンチを第1トレンチと直交方向に設定した。これを第2トレンチとした。調査中に第1トレンチを第2トレンチとつなげるような形で、幅3mで延長し、最終的にはトレンチの長さは40mとなった。第1トレンチについては、便宜的に北から5m単位で分け、1区、2区…と名づけた。

(2) 層序について (第74図)

基本層序は、表土から地山まで3層に分層された。遺構検出は2層を除去した段階で行われるべきであるが、調査当初はそれに気づかず、地山を検出面としてしまった。第1トレンチ1区から3区の一部にかけては、後世の擾乱のためそれほど影響はないと思われるが、3区の一部から4区の遺構は、実質遺構を掘り下げたことになった。第1トレンチ5区から8区においては、3層上面で検出することに成功した。第2トレンチについては、擾乱が激しかったため、包含層にあたる3層はほとんど残っていなかった。幸い、擾乱は地山までは達していなかったため、地山の上面を検出面とした。

堆積状況、土色、土質については、第74図を参照いただきたい。

2 遺構と遺物

148番地第1トレンチで検出された遺構は、住居跡が1基、土坑が10基、溝が2条であった。遺構ごとに記述する。

A 第1トレンチ

(1) 溝

①1号溝 (第75、76図 P.L.18、20)

1区で検出された。埋土は、耕作土と同じ灰褐色の締まった土であり、当初は擾乱部分と判断し、特に留意せず下へ掘り下げた。しかし、想定していた深さになっても地山が検出されなかったため、溝状の掘り込みであることに気づき、それ以降は慎重に掘り進めた。結果、1号溝の深さは検出面から0.6m、地表から1.3mの深さに達していた。

溝の主軸は東西方向であり、溝の北半分は調査区外である。南側から北へ3.0～3.7mの部分で、礫層が帯状に検出された。当初、これらの礫層は地山層の一部と判断していたが、礫の周りを非常に締まった粘土が覆っていたことや、礫層が一定の幅を保った状態で検出されたことから、人為的に舗装のように敷き詰められたものと判断した。1号溝は、道路の可能性が高いと考える。

遺物は、近代の磁器片のほかに、中世の遺物も出土した。今回は中世の遺物を掲載した。

1は瓦質土器火鉢の口縁部である。菊花文が施される。2は磁鉢の口縁部と思われる。3は青磁碗の底部である。4は灰の底部である。5は三脚付の灰である。口縁が短

く開く。6は甕の頸部である。

②2号溝 (第77図)

2区で検出された。深さわずか5cmの浅い溝である。埋土は黒褐色土で、後世の擾乱による埋土とは異なるため遺構とした。幅は35cmで、溝の主軸はほぼ東西を向く。遺物は出土しなかった。

(2) 住居跡

①1号住居跡 (第78図)

4区で検出された。西側が調査区外となっている。南壁をほとんど検出できなかったが、トレンチ断面などから推定すると、長軸は東南東～西北西方向で、幅は2.4mを測る。平面形は長方形を呈すると思われる。深さは10cmを測る。住居内は中央に長軸40cm、短軸30cmの楕円形を呈した炉が検出された。炉は掘り下げていないが、上面を見ると炭化物を多く含んだ黒褐色土が堆積していた。炉周辺はしっかりと硬化面が広がっていた。

出土遺物は床面から浮いた状態で土器片が出土した。遺物は現地に残した。器形が分かるものとしては、小型丸底蓋と鉢があった。

②2号住居跡 (第79～81図 P.L.18、20)

5区で検出された。すぐ北側には1号住居跡がある。住居跡の西側が調査区外であるため、長さは不明であるが、幅は2.9mを測る。長軸はほぼ東西方向であり、平面形は長方形を呈すると思われる。この住居跡は3層上面で検出できたのだが、果たして本当に検出されたように遺構があるのか、併せて時期確認のために床面まで掘り下げた。埋土は礫や小石を多く含む褐色土で、上面が検出面の層となる3層に比べて、やや赤みがかった。また、部分的に炭化材や焼土を含んでいて、下層ではかなりの塊で焼土が検出された。

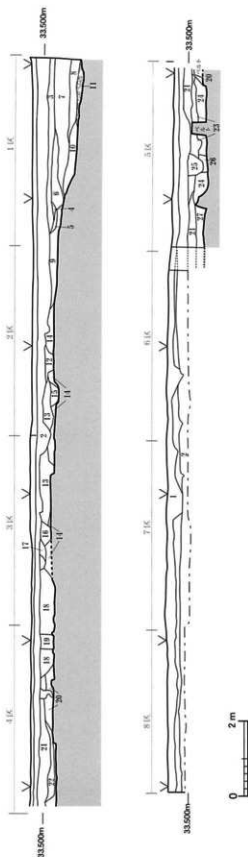
床は非常に硬化した面が全体に広がっており、中央部西壁近くには楕円形の炉を検出した。炉の直径は70cmで、深さは35cmであった。炉の埋土は炭化物を多く含んだ黒色土で、この埋土は持ち帰り、ウォーターフローテーションにより炭化物を採取した。明らかに種子と識別できたものについて、鑑定を依頼したところ1点はイネ、1点はササゲ属であることが分かった(詳細は第5章を参照)。

出土した炭化材についても、これらのうち9点の鑑定を委託した。その結果、ムクノキ、ヤマグワ?、コナラ、アカガシ亜属であることが分かった。併せて炭化物の1点について放射性炭素年代測定を行った結果、2020±60R.P.(交点:紀元前10年)という数字が出された(詳細は第5章を参照)。

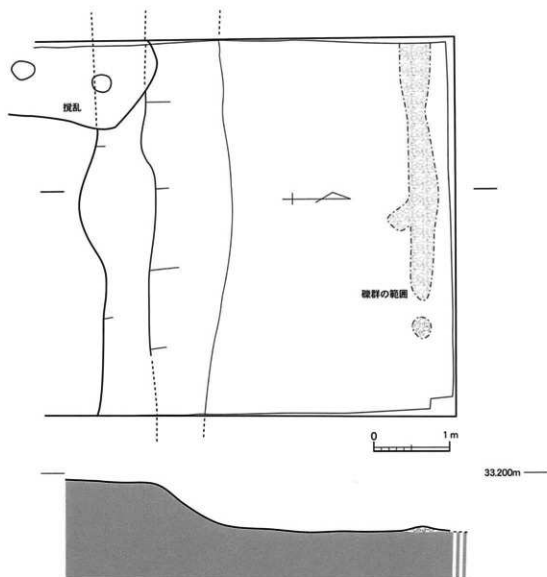
遺物は弥生時代後期後半が中心の土器片が出土した。また、上層で銅形土製品が1点出土した(第81図23 P.L.20)。

第80図1、3、5は甕の口縁部である。2、6は甕の

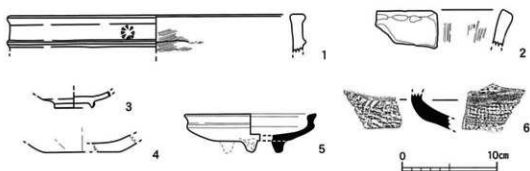
図74 148番地 断面図 (S 1 = 1) 第11号



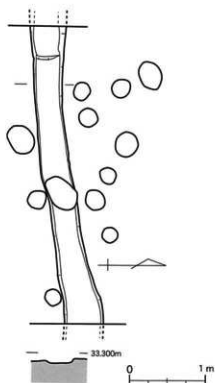
- | | | | | | |
|-----|-------------------|-----|-------------------|-----|-------------------|
| 1層 | 表土 | 14層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 17層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 2層 | 耕作土 | 15層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 18層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 3層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 16層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 19層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 4層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 17層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 20層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 5層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 18層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 21層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 6層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 19層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 22層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 7層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 20層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 23層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 8層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 21層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 24層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 9層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 22層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 25層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 10層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 23層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 26層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 11層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 24層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 27層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 |
| 12層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 25層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | | |
| 13層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | 26層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | | |
| | | 27層 | 黒褐色土 (blue7.5) 11 | | |



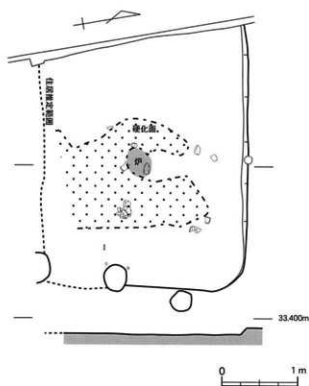
第75図 148番地 第1トレンチ 1号溝実測図 (S = 1/50)



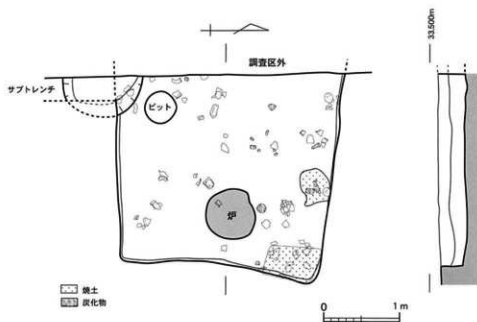
第76図 148番地 第1トレンチ 1号溝出土遺物実測図



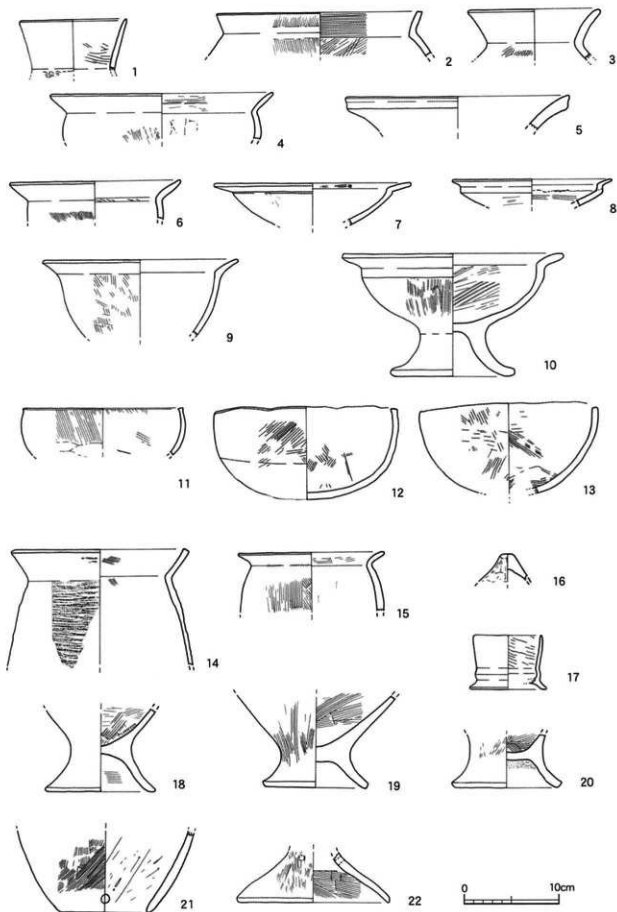
第77図 148番地 第1トレンチ
2号溝実測図 (S = 1/50)



第78図 148番地 第1トレンチ
1号住居跡実測図 (S = 1/50)



第79図 148番地 第1トレンチ 2号住居跡実測図 (S = 1/50)



第80図 148番地 第1トレンチ 2号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

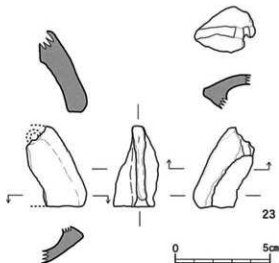
口縁部である。4は鉢の口縁部と思われる。7、8は高環の坏部である。9は台付鉢と思われる。10は高環である。脚部がハの字に広がり低い。11~13は無頸の鉢である。14、15は甕の上半部である。16はミニチュア土器で蓋か？ 17は小型の台付鉢である。口縁部が直立し、体部がわずかに膨らむ。台は短く外へ開く。18~20は甕の脚台部である。21は古代土師器の甕底部である。器壁に穿孔が見られる。22は高環の裾部である。第81図23（P.L.20）は埴形土製品である。出土したのは全体のほぼ縦半分である。残存部から復原すると、平面形は三角形に近い釣鐘状の形態であったと思われる。側面には鱗が表現されている。そのため横断面は、両端が角張る格円形で、ちょうどラグビーボールのような形を呈している。高さは4.3cmで、裾下端の長さは5.5cm、幅は2.0cmと推定される。鈕と舞の表現はいまいで、鈕は直径4mmの穿孔で表現されている。またその孔と交差するように、舌を吊り下げるための孔が同じ径で穿てある。

③ 3号住居跡

2区で検出された。西壁が傾乱のためなくなっており、北側は1号溝に切られていたため、規模は不明である。また、南東隅は2号溝に切られている。長軸は北東-南西を向く。遺構は、検出のみで留めた。遺物も出土していない。

④ 4号住居跡

6区で検出された方形を呈するとと思われる住居跡である。検出面は3層上面で、それよりもやや赤みがかった色調であることを判断材料とした。検出されたのは、住居跡大半が調査区外であったため、規模は不明である。検出で留め、下層へは掘り下げていない。



第81図 148番地 第1トレンチ 2号住居跡出土
埴形土製品 実測図（S=1/2）

⑤ 5号住居跡

7区で検出された。検出されたのは住居跡西隅だけで、大半が調査区外である。埋土は4号住居跡と同様である。ここも検出だけに留めている。

⑥ 6号住居跡（第82、83図 P.L.20）

8区で検出された。主軸は北東-南西を向き、平面形は長方形を呈する。長軸は4.2m、短軸は2.8mを測る。埋土の状況は4号、5号住居跡と同様である。検出時点で出土した土器を取り上げたが、床面までは掘り下げていない。

第83図1は甕の口縁部である。口唇部に方形の刺突文が施されている。2は甕の口縁部。3は甕の上半部と思われる。4は甕の下半部と思われる。底部に丸みがあり、丸底である。5は甕である。頸部には刻目が施された突帯がめぐる。突帯の下には突帯の刻目を施す際に付いたと思われる列点文が付く。胴部上半にはタタキ目が残る。

③ 遺構に伴わない遺物

包含層から出土した遺物である。

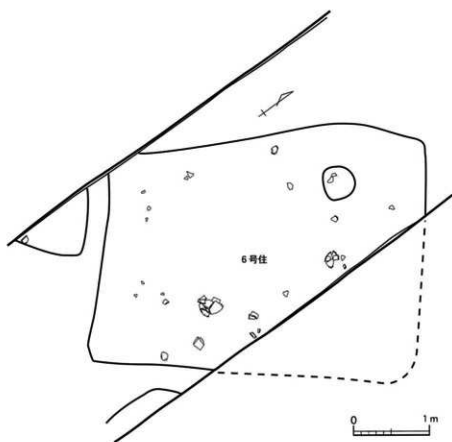
① 土器、土製品（第84、85図）

1は小型丸底甕である。2は甕である。3は甕の上半部である。口縁端部は角張る。4は台付鉢である。内器面はヘラ磨きが施されている。5、6は鉢である。7は小型甕の下半部である。8は須恵器の坏身である。9は器台で、図の左側辺は透孔である。10はジョッキ形土器か。底部は平底で胴部がやや膨らむ。11は鼓形器台である。12は須恵器長頸甕の頸部から胴部である。13は脚台甕である。形がいびつである。14、15は内面朱付着土器である。14は鉢の口縁部と思われる。15はミニチュア土器で内器面底部にベンガラが付着する。16はスプーン形土製品と思われる。端部に向かって若干反る。17は円盤状の土器片である。18は手づくね土器の器台か。19はミニチュア土器の器台である。第85図20は絵画土器片で、高環の裾部か。4区で出土した。色調は橙色で、焼成は悪い。端部は摩滅しているものの、角張っていたと思われる。復原径の大きさと外反する角度から、裾部と判断した。外器面には細線で絵が描かれている。3本の弧線を組み合わせてできた「戦斧」のような形状の図が2箇所ある。それ以外には、横方向の4本の平行線が中に描かれた長方形が1つあり、その長方形の下辺から4本の直線が下方向に延びている。この長方形の図は高床式建物のようにも見えるが、断定できない。

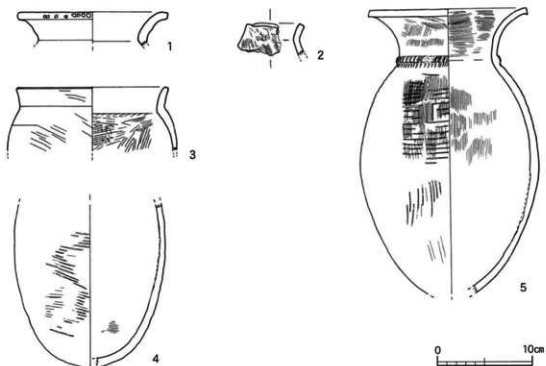
② 鉄器（第86図）

合計4点の鉄が出土した。いずれも4区の出土である。1号住居跡内である可能性が高いが、出土時に確認していないため遺構から外した。

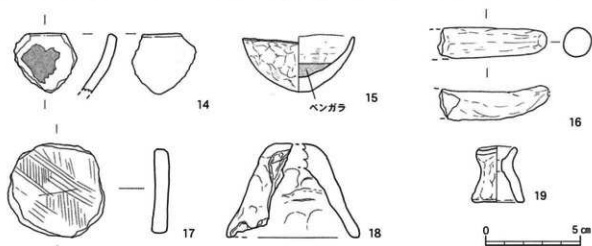
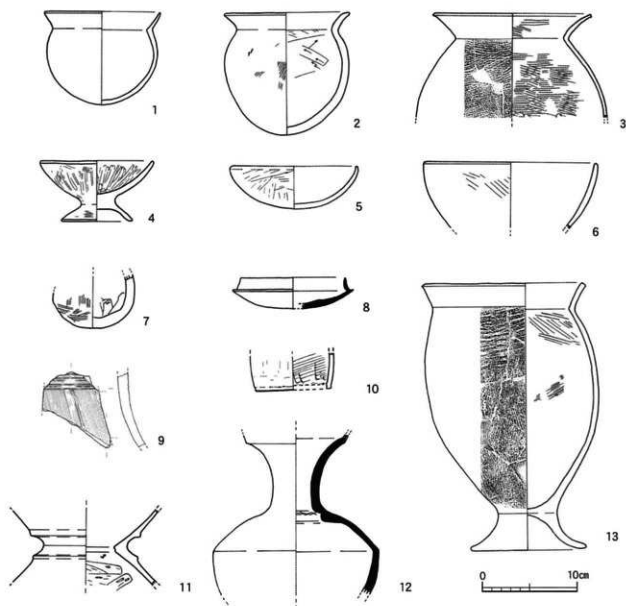
1は棒状鉄である。整った形をしているが、刀部は見当たらない。断面は長方形を呈する。2は刀子片である。3は板状鉄である。厚さは均一である。4は鉋片である。



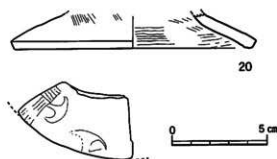
第82図 148番地 第1トレンチ 6号住居跡実測図 (S = 1/50)



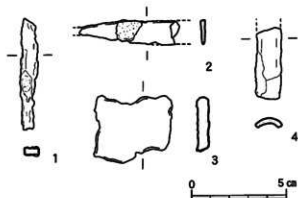
第83図 148番地 第1トレンチ 6号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)



第84図 148番地 第1トレンチ 遺構に伴わない遺物 実測図① (1~13はS = 1/4、14~19はS = 1/2)



第85図 148番地 第1トレンチ 遺構に伴わない遺物
実測図② (絵画土器) (S=1/2)



第86図 148番地出土 鉄実測図 (S=1/2)

イ 第2トレンチ (第87図 P.L.19)

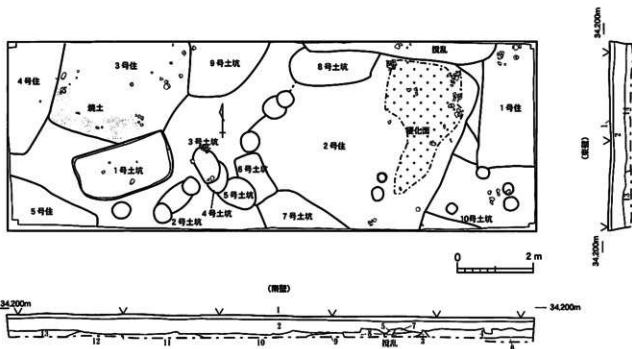
148番地第2トレンチで検出された遺構は、住居跡が5基、土坑が10基であった。遺構の大半を検出にとどめたため、深さはほとんど不明である。また、遺構の切り合いが激しく、調査区外にかかっているものが大半であったため、規模が分かるものも少なかった。そのため個別ではなく、種別ごとにまとめて記述する。

(1) 住居跡 (第87～89図)

5基の住居跡が検出された。

1号住居跡は北東隅で主軸はほぼ南北を向く。遺物は、検出面で土器片が数点出土したが、小片であったため時期判断ができていない。

2号住居跡は調査区中央やや東で検出された。上面で検出できず、硬化面で住居跡と気づいた。6～8号土坑に切られている。主軸は北北東～南南西を向き、住居北



- 1層 灰土
- 2層 耕作土
- 3層 黒褐色土 (Blue10YR2/2) しまりなく、粘性ない。不純物少ない。
- 4層 黒褐色土 (Blue10YR2/3) しまりなく、粘性ややある。住居跡埋土。
- 5層 暗褐色土 (Blue10YR3/3) しまりあって、粘性ややある。ビット埋土。
- 6層 黒色土 (Blue2.5Y2/1) しまりなく、粘性ない。住居跡埋土上層。
- 7層 黒色土 (Blue10YR2/1) しまり、粘性ともにない。
- 8層 黒褐色土 (Blue10YR2/2) しまりあって、粘性ない。

- 9層 黒褐色土 (Blue10YR3/1) しまりなく、粘性ややある。
- 10層 黒褐色土 (Blue10YR2/2) しまり、粘性ともにややある。土坑埋土。
- 11層 黒褐色土 (Blue10YR2/3) しまりなく、粘性ある。住居跡埋土。均質な土。
- 12層 黒褐色土 (Blue10YR2/3) しまりややある。粘性ある。11層に、オレンジ色の粒子をわずかに含む土。
- 13層 黒褐色土 (Blue10YR2/2) しまり、粘性ややある。地山のブロックを含む。
- 14層 黒色土 (Blue10YR1.7/1) しまりなく、粘性ある。一部に黄土粒を含む。住居跡埋土。

第87図 148番地 第2トレンチ 遺構配置図及び土層断面実測図 (S=1/100)

西部では硬化面が検出された。硬化面上で少なからず土器片が出土したが、取り上げていない。

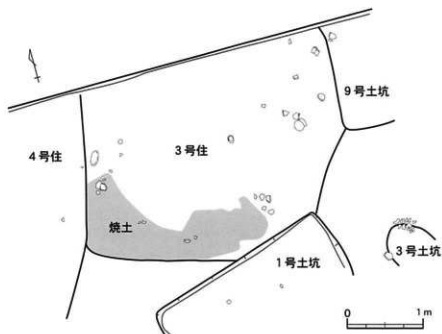
3号住居跡は調査区北東側で検出された(第88図)。1号土坑、9号土坑、4号住居跡に切られている。主軸は北北東—南南西を向く。南壁には焼土が広い範囲で検出された。

3号住居跡では、検出面で土器片が出土し、遺構の時期を知るために取り上げた。第89図1は甕の上半部である。2、5、6は小型丸底甕である。3は鉢である。4

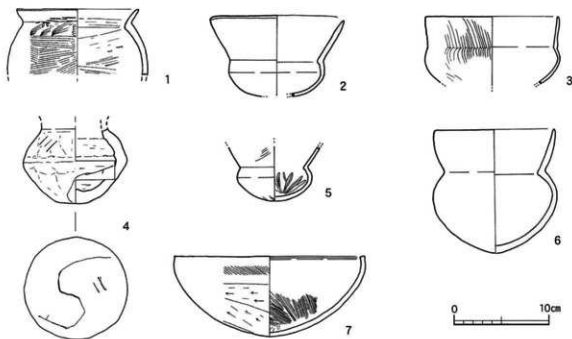
は小型の甕である。底部には細線で曲線が描かれていて、底面から見ると、S字状になっている。7は鉢である。口縁端部は内外両側にわずかに突き出る。

4号住居跡は調査区東端で検出された。主軸は北北東—南南西を向くと思われる。

5号住居跡は調査区南西隅で検出された。主軸は2～4号住居跡と同様に北北東—南南西を向くと思われる。



第88図 148番地 第2トレンチ 3号住居跡実測図 (S = 1/50)



第89図 148番地 第2トレンチ 3号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

(2) 土坑 (第87図)

土坑は合計10基検出された。

1号土坑は調査区中央やや南西で検出された長方形を呈する土坑である。これについては、遺構の内容を把握するために掘り下げた。しかし、深さが10cmと非常に浅く、遺物も土器の小片だけであったため、判断材料は少ないが、形状から土壌墓の可能性が考えられる。

2～5号土坑は円形ないしは楕円形を呈し、長軸は0.8～1.2mを測る。3～5号土坑については、互いが重複した状態で検出された。

6号土坑は長方形を呈する土坑である。南東の7号土坑を切っている。

8号土坑は2号住居跡の北西部を切っている。長軸2.4mを測り、楕円形を呈する。

9号土坑は北壁中央で検出された。3号住居跡との切り合い関係が不明瞭で、平面形は不整形である。

10号土坑は調査区南西部で検出された。2号住居跡に切られている。

(3) 遺構に伴わない遺物 (第90図)

1は壺の口縁部である。2は壺の肩部である。外面に櫛歯波状文とその下位に貼付円文が施されている。3は片口である。4は小型の壺である。外面全面および内器面口縁部にヘラ磨きが施されている。5は鉢である。深さがあり、外面下半はヘラ削りで整形されている。6は台付鉢である。

3 小結

①溝について

148番地を調査地とした目的は、西隣の151番地で検出された大溝の延長を確認することであった。予想では、第1トレンチの北側と考えられたが、中世以降の1号溝があったため、確認することができなかった。もし、この1号溝が弥生時代の大溝を切っていたとすれば、周辺の包含層や溝の埋土から相当量の土器片が出土してもおかしくないはずであるが、溝を含めて、第1トレンチでは遺物の出土量が極端に少なかった。

弥生時代の大溝が検出されなかったのは、1号溝が切った可能性のほかに、弥生時代の大溝が北側に大きく曲がっている可能性も考えておく必要があるようだ。

②遺構密度について

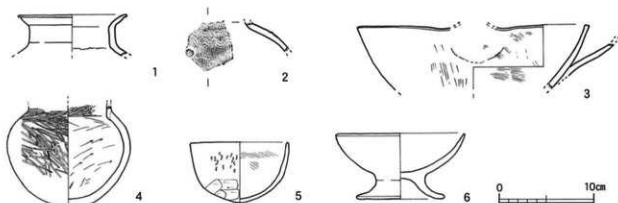
第2トレンチについては、住居跡や土坑が重複する比較的高密度な遺構の検出が見られたが、対照的に第1トレンチにおいては、151番地の大溝南側と同様な薄い遺構密度が見られた。包含層の残り具合を見ると、第1トレンチ北側は後世に削平を受けていることが分かっているが、それを加味しても極端に少ない印象を受けた。また、遺物の出土量も同様に少なかった。もともと利用されなかった場所だったのか、それとも広場の空間だったのか、現時点では判断し得ないが、遺構がとても少ない特異な場合であったことを指摘しておきたい。

③まとめ

検出された遺構は住居跡が中心で、時代は弥生時代終末から古墳時代初頭の範囲に入る。遺物の出土量は少なく、北側に行くほど顕著であった。それは遺構についても同様で、当遺跡内においては特異な様相であった。

遺物については、鐔形土製品と絵画土器が目立つ。鐔形土製品は遺跡内3例目(41次調査:196～1番地、42次調査:120～1番地3区)であり、これは今までになく、鰭が表現されたものであった。絵画土器片は1点出土した。これまでに、鳥がモチーフとなったもの(40次調査:209番地)、木の葉を描いたもの(25次調査:816・817番地)など数点出土している。今回の図柄は判断できなかったため、お気付きの方はご教示をぜひともお願いしたい。

最後に、調査区北側の遺構密度が薄い理由、また、西から続くはずの大溝がどのように東方向へ伸びていくのかが、今後の課題として残された。



第90図 148番地 第2トレンチ 遺構に伴わない遺物実測図 (S=1/4)

第2節 平成15年度の調査

1 はじめに

1 調査の目的

平成14年度と同様に、遺跡の中心地を始めとした区域別の機能など遺跡内の構造関係や時期的変遷を把握するとともに、今後の保護政策に向けた対策の資料を取得するため調査を行った。

調査地については、146番地、137-1番地、30・33番地の3地点である。平成14年度調査の延長として、指定地南接部分を中心に選択した。このエリアは平成14年度調査でも記述しているが、東側にかけて次第に標高が高くなっている。その最も高い部分について、どのような遺構が存在するのかを確認するために146番地を対象とした。

次に、昭和41年に鹿本高校考古学部によって調査され、弥生時代後期の喪棺墓が検出された地点（当時は塚の本遺跡と呼称）周辺を改めて調査し、その一帯が墓域としてどの程度の期間機能していたのか、またその範囲を確認するため137-1番地を選んだ。

最後に30・33番地は、場所は上記の2地点とは離れ、遺跡北側にあたる部分で、台地表面から一段低くなったところである。9次調査（H3年度：32-2番地）及び12次調査（H8年度：84-2番地）で確認された同一の溝が、台地を切り通しているのか、それとも台地の地形に沿って通っていくのかを確認するために、この地を調査することにした。

2 調査の経過など

平成15年度の3調査区は、146番地→137-1番地→30・33番地の順で実施した。

146番地は平成15年6月2日に調査区を設定し、翌3日に表土除去。9日から作業員らとともに発掘を開始した。随時、遺構および遺物出土状況の実測を行いながら、7月23日に空撮を行い、8月4日に発掘作業を終了した。その後、4日から11日に埋め戻し、11日に機材等を撤収した。

137-1番地は、平成15年9月16日に調査区を設定した。9月17日に重機で表土を除去し、その後作業員を入れて発掘に取り掛かった。10月30日に作業を終了し、10月31日に埋め戻しが完了した。

30・33番地は、平成16年12月4日に調査区を設定した。調査区が狭小のため、人力で表土を除去し、その後下層へ発掘を続けた。12月27日に作業を終了し、同日に埋め戻しを完了し、機材を撤収した。

3 遺跡見学、調査検討委員会の実施について

平成15年7月17日、146番地の調査について、山鹿市市議会文教厚生委員会の視察があった。また、137-1番地の調査では、鹿児島県国分市議会の議員など8名の視察があった。

平成15年9月30日には、調査検討委員会を開催し、各委員からのご助言、ご指導をいただいた。



第91図 平成15年度調査地図（S = 1/1000）

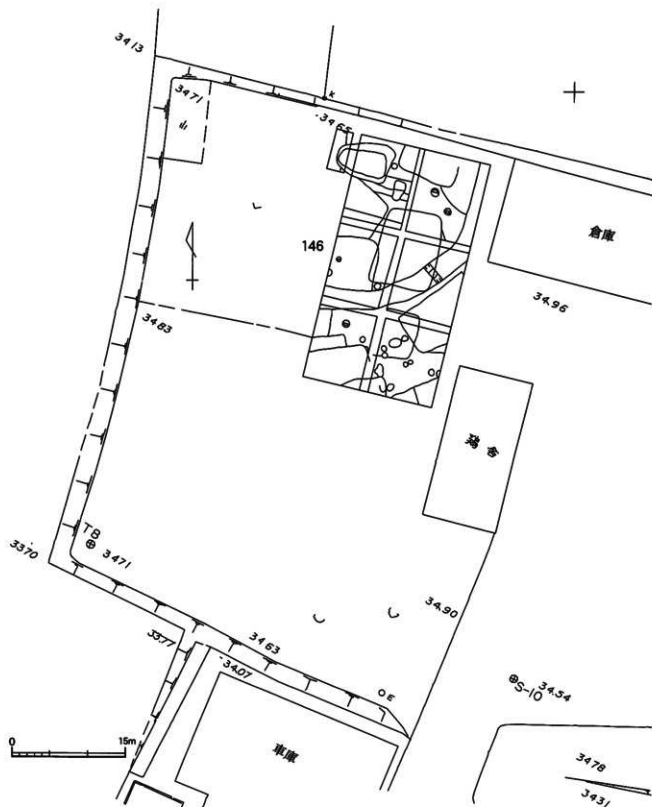
II 146番地

1 調査地、層序

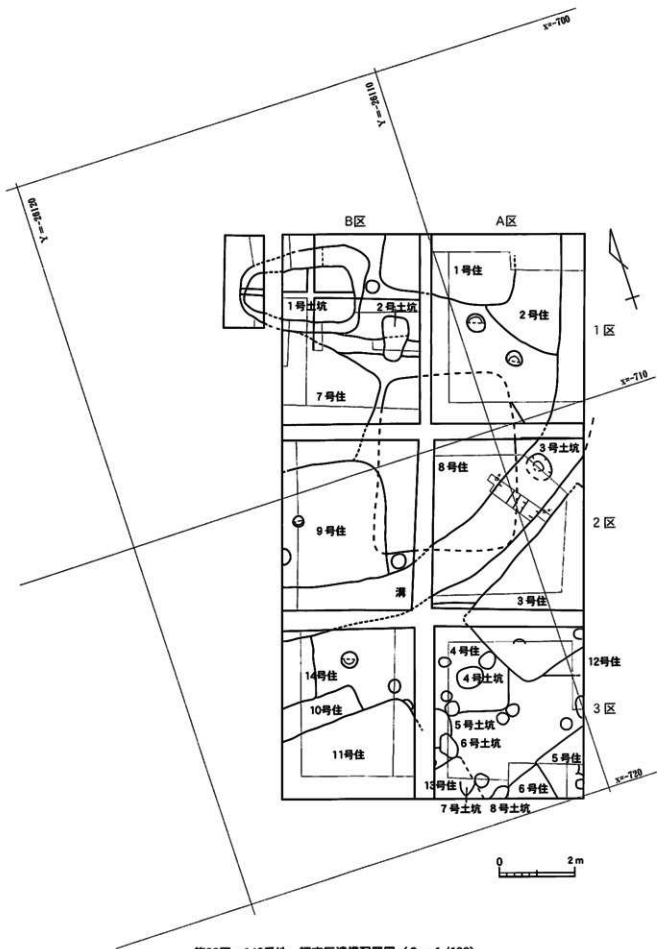
(1) 調査区について（第92図 PL21）

146番地は、県道方保田山鹿線とそこから分岐し馬見塚集落へ向かう市道に挟まれた区域の一部分で、現在は

畑である。この地点は、挟んでいる道のちょうど中間の部分に当たり、周辺の畑よりも標高が高くなっている。特に北側の畑及び西側の畑との比高差がある。逆の南側及び東側はほぼ高低差はないが、若干その先に向かって標高を下げていく。調査区内では急激な地形の変化はな



第92図 146番地 調査区配置図 (S = 1/250)



第93図 146番地 調査区遺構配置図 (S = 1/100)

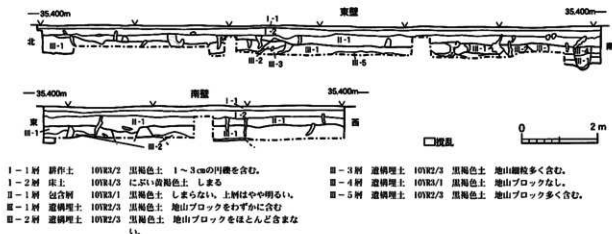
く、地表面はほぼ平坦の面をなしている。

調査区は畑の地割に合わせて、長さ15m、幅10mの南北方向に長いグリッドを設定し、これを5m四方で区分けした。この区分けしたグリッドを東から西へA区、B区とし、北から南へ1、2、3区と名づけた。これにより、北東のグリッドはA-1区、南西のグリッドはB-3区と呼称することとした。またこのほかにB-1区で一部検出された土坑の全体を確認するため、西方向に東

西1m、南北2.5m拡張した。これをB-1区拡張部と呼ぶことにした。

(2) 層序について (第94図)

基本層序は、表土から地山まで3層に分層された。堆積状況、土色、土質については、第94図を参照いただきたい。



第94図 146番地 調査区土層断面図 (S = 1/100)

2 遺構と遺物

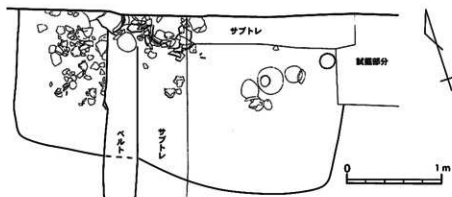
146番地で検出された遺構は、住居跡が14基、土坑が8基、溝が1条であった。遺構種別ごとに記述する。

(1) 住居跡

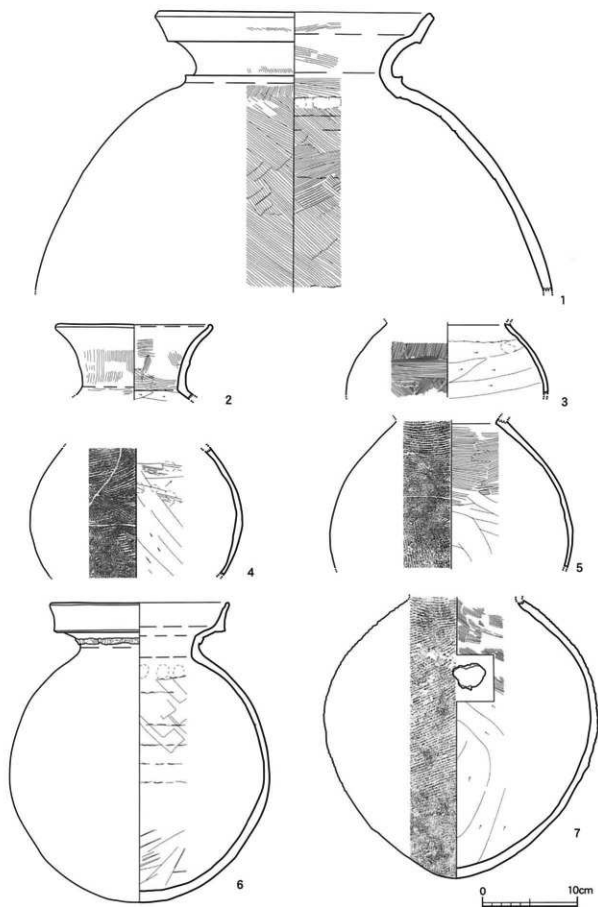
当調査区では、合計14基の住居跡が検出された。調査面積にしては、かなり密集しているといえる。ただし、遺構の大半は検出だけで全体を掘り下げたわけではないため、果たしてこれらすべてが住居跡であるかどうか疑わしいものもある。

① 1号住居跡 (第95～98図 P.L.22、25、26)

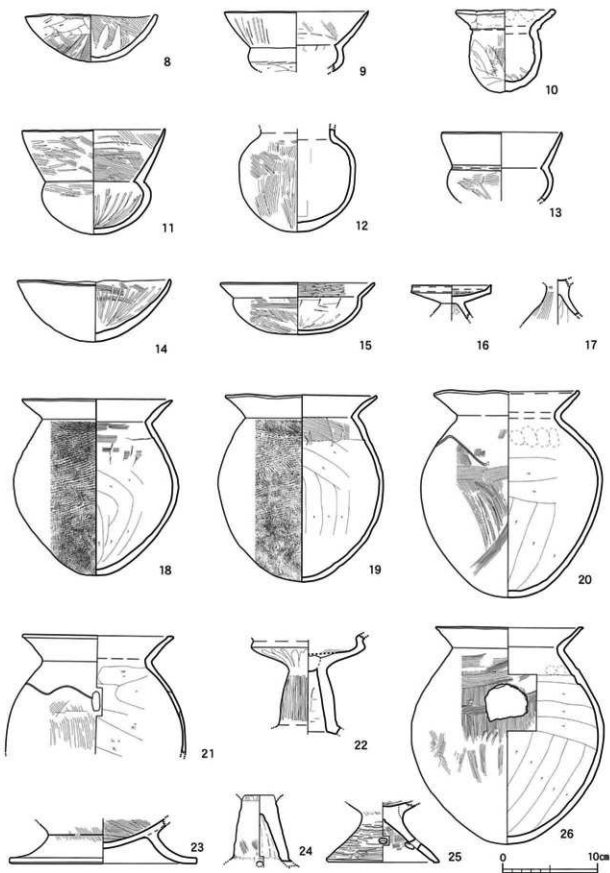
A-1区からA-2区にわたって検出された。ほぼ北半分が調査区外であり、西の2号住居跡を切っている。全体の規模は不明であるが、平面形は方形を呈すると思われる。主軸は西北西-東南東を向き、その長さは3.6mを測る。調査区北壁に沿って、幅50cmのサブトレントを床面まで掘り下げたところ、深さは0.28mであった。なお、住居跡全体は完掘していない。



第95図 146番地 1号住居跡実測図 (S = 1/40)



第96図 146番地 1号住居跡出土遺物実測図① (S = 1/4)



第97図 146番地 1号住居跡出土遺物実測図② (S = 1/4)

遺物は、遺構を検出する途中で大型の破片や形の残っている土器が出土しており、遺構の検出よりも、遺物の出土が早く分かった。

土器の集中した出土地は南東隅と中央から西側にかけて2箇所があって、中央から西側にかけての部分は、調査区の北壁に近づくほど出土量が多く、特に壁沿いでは破片の大きなものも多く見られた。また、南西隅ではほぼ完形の甕や小型丸底壺などワレの少ない土器が目立った。

完掘していないため、住居跡としてよいか疑問が残るが、この遺構は、これまでの調査でもしばしば見られるように、住居跡が埋没する間に土器溜まりとして利用されたもので、多量の土器は、廃棄されたものと考えた。よって、一括性の高い資料のため、取り上げることで良好な資料が得られると判断し、検出時及びサブトレッチ部分で出土した遺物については、実測のもの取り上げた。

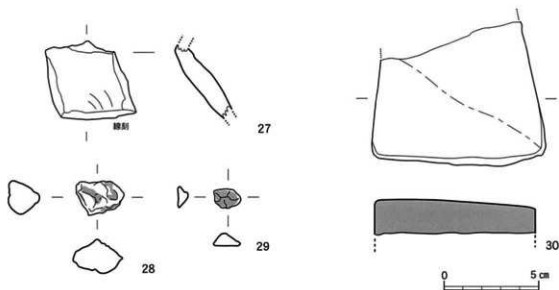
第98図1は大型の複合口縁壺の上半である。口径は28.6cm、胴部の最大径は54.6cmにも及ぶ。全体的に器壁の厚さは均一で、作りも丁寧である。内器面には輪積み痕が残る。また、口縁部の内器面には黒色の顔料が全体に付着している。2は壺の口縁部である。内器面の頸部屈折部から肩部にかけてはヘラケズリが施されている。3は甕の胴部上半である。4は甕の胴部である。5は甕の胴部上半と思われる。頭部のすばまり方と胴部最大径がやや大きいので、甕ではなく壺と判断した。6は完形の複合口縁壺である。球形の胴部で、頭部は短く直立したのち外反し、さらに口縁部は直立する。頭部には幅8mm程度の貼付突帯が通る。その突帯は、工具状のもので押圧されて広がり、連続したスタンプ文となっている。内器面の肩部には指頭圧痕が見える。7は口縁部を欠いた壺である。外器面の頭部から胴部下位にかけてタタキ目が明瞭に残る。胴部上位に1箇所穿孔がある。第97図

8は完形の鉢である。内器面には放射状のヘラミガキが見える。9は小型丸底壺である。10は小型の壺である。手握ねで作りが雑である。11は小型丸底壺である。内器面には放射状のヘラミガキが施されている。12は小型壺の胴部である。球状の胴部で頭部はほぼ直立する。13は底部を欠いた小型丸底壺である。外器面頸部屈折部には、幅5mmの凹線が施されている。14は完形の鉢である。内器面に放射状のヘラミガキが施されている。15は有頭の鉢である。口縁部内器面は横方向のヘラミガキが施されている。16は器台の受部である。17は台付鉢の台部と思われる。18、19、20、21、26は甕である。このうち、21以外、全て完形である。18、21の外器面には煤が多量に付着する。21と26の口縁端部は上面が平坦なしている。22は口縁部と胴部を欠いた高坏である。23は台付鉢の下半である。24は高坏の柱部で、坏部との接合部には放射状に刻まれたヘラ痕が残る。25は台付鉢である。外器面はヘラミガキが施されている。第98図27は壺の肩部か。外器面に3本のヘラ描きが見える。28、29は赤色顔料が付着した粘土塊である。29は一面だけが平坦である。30は砥石である。断面は精美な長方形を呈していたと思われるが割れている。

②2号住居跡(第99図)

A-1区の北東部で検出された。西側の1号住居跡と西の溝に切られているため、平面形や規模は不明である。グリッド北壁沿いのサブトレッチ発掘の結果、深さは最大30cmであることが分かった。遺物はサブトレッチ発掘時に多少出土した。

第99図1は甕の上半部である。口縁端部が角張る。2は高坏の口縁部と思われる。坏部からほぼ直角に内傾し、端部は角張る。3は甕の上半部である。4は底部を欠く鉢である。内器面の一部にヘラミガキが見える。5は高

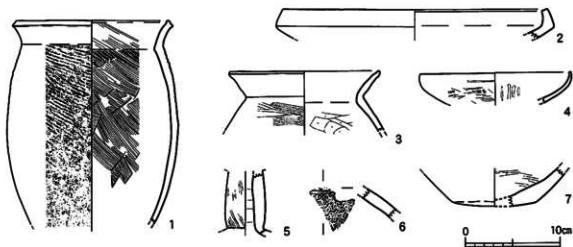


第98図 146番地 1号住居跡出土遺物実測図③ (S = 1/2)

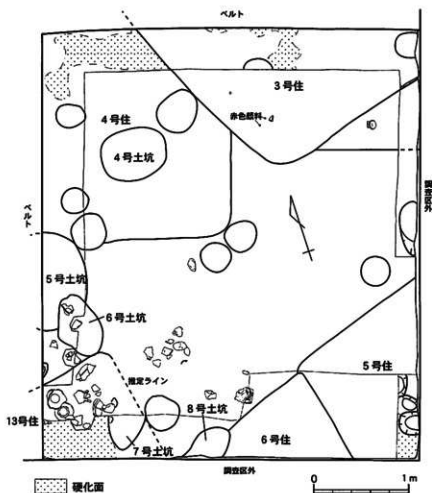
杯の柱部である。筒状を呈する。6は蓋の肩部と思われる。外器面に櫛描波状文が明瞭に残る。7は蓋の底部と思われる。

③3号住居跡（第101図）

A-2区からA-3区で検出された。南西の4号住居跡と南の12号住居跡を切っている。住居跡東部が調査区外であるが、主軸が北東-南西向き、平面形は長方形を呈すると思われる。長さは4.8m、幅は2.2mを測る。



第99図 146番地 2号住居跡出土遺物実測図（S=1/4）



第100図 146番地 A-3区 遺構検出状況実測図（S=1/40）

グリッド東壁土層図によると、深さは最大30cmであった。

掲載している遺物は検出中に出土したものである。第101図1は土製玉である。直径は2.6cmで、穿孔の直径は4mmである。2は大型甕の胴部と思われる。突帯は2条あったと考えられる。3は台付鉢の裾部と思われる。

④4号住居跡 (第100図 P L 24)

A-3区北西隅で検出された。北東の3号住居跡や南西の5号土坑に切られている。また、西壁はグリッドの土層ベルトのため、検出されなかったと思われる。主軸は調査グリッドとほぼ同じで、長さは2.8mを測る。遺物は特になかった。

⑤5号住居跡 (第100図)

A-3区南東隅で検出された。大半が調査区外であるため、規模は不明であるが、検出された住居跡の北西部分から判断すると、平面形は方形を呈すると思われる。主軸は北北西-南南東を向く。南西にあるほぼ同軸の6号住居跡に切られている。

⑥6号住居跡 (第100図)

5号住居跡の南西に接するようにして検出された。5号住居跡と同様に大半が調査区外であるが、平面形は方形、主軸は北北西-南南東を向くと思われる。

⑦7号住居跡 (第102図)

B-1区で検出された。南東隅だけがはっきりと検出できたが、それ以外はうまく把握することができなかった。おそらく、B-2区まで広がり、南の9号住居跡に切られていると思われる。検出できた部分で判断すると、平面形は方形で、主軸は北東-南西を向くものと思われる。

遺物は検出時に土器片が出土した。第102図1はミニチュアの鉢である。ヘラ状工具で調整された痕が見える。

⑧8号住居跡

調査区中央付近に位置する。平面形は長方形を呈する。南を1号溝に、西を9号住居跡に切られ、東で14号住居跡を切る。南北4.5m、東西は推定で3.4m、床面まで掘削していないため深さは不明である。

⑨9号住居跡

調査区西側中央に位置する。東を8号住居跡に、南を1号溝に切られる。西壁も調査区外にあるため軸方向や規模などは不明である。南北3.1m、東西2.7mの範囲を検出した。

⑩10号住居跡 (P L 24)

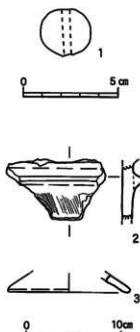
調査区南端に位置する住居跡である。北の4号住居跡を切り、南の大部分を11号住居跡に切られている。大半が調査区外に位置する。東西2.2m、南北0.7mを検出した。

⑪11号住居跡 (第104図 P L 24)

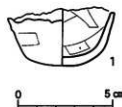
調査区南端で検出された。北の4号住居跡と10号住居跡を切り、南の13号住居跡に切られている。10号住居跡とは軸方向が同じで、ほぼ東西を向く。大部分が調査区外にあるため規模は不明である。

グリッドの西壁と南壁に沿って幅50cmのサブトレンチを入れたところ、完形に近い甕などが出土した (P L 24)。

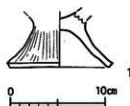
第104図1はミニチュア土器の壺か。胴部から底部で、平底を呈する。2は



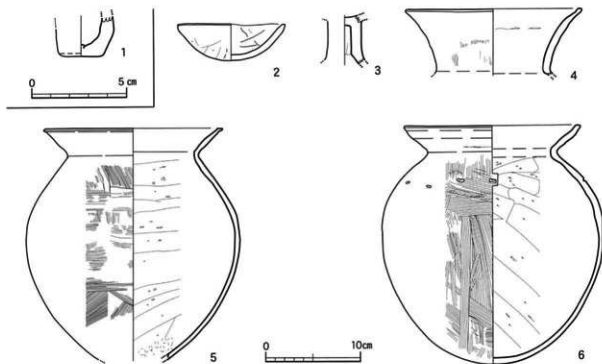
第101図 146番地 3号住居跡
出土遺物実測図
(1はS=1/2、他はS=1/4)



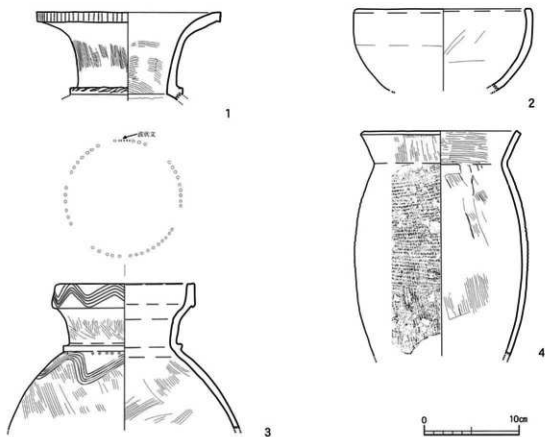
第102図 146番地 7号住居跡
出土遺物実測図 (S=1/2)



第103図 146番地 12号住居跡
出土遺物実測図 (S=1/4)



第104図 146番地 11号住居跡出土遺物実測図 (1は $S = 1/2$ 他は $S = 1/4$)



第105図 146番地 13号住居跡出土遺物実測図 ($S = 1/4$)

浅い鉢である。3は長脚の付く鉢と思われる。4は広口壺の口縁部である。5及び6は甕である。いずれも外器面はハケで調整され、内器面はヘラケズリである。6には、肩部外器面に等間隔の列点が見られる。6はほぼ縦半分が残っているが、全体の4分の1にその列点が見られ、一周廻るものではない。

⑫12号住居跡 (第103図)

調査区南東に位置する住居跡。大部分が調査区外にあり3号住居跡に掘り込まれているため、軸方向や規模は判然としない。東西1.0mを検出した。検出時に取上げた甕の脚台を掲載した (第103図1)。

⑬13号住居跡 (第100、105図 P L 27)

調査区南端に位置する住居跡である。北にある11号住居跡を切っており、住居内の7号土坑に切られている。主軸はほぼ東西を向く。大部分が調査区外にあるため、規模は判然としない。東西2.5mを検出した。

グリッド南壁とグリッド中央を南北に設定した土層ベルトに沿って、幅50cmのサブトレッチを設定し、掘り下げたところ、破片の大きな壺の口縁部や甕などが出土した。

第105図1は広口壺の口縁部である。口縁端部には縦方向の刻目が通る。また、頸部にはナメ方向に刻目が施された突帯が通る。2は鉢である。3は二重口縁壺の上半である。口縁部と肩部には、5本1組の波状文が通る。その波は6つ描かれている。頸部には三角突帯が通る。突帯と波状文の間に竹管文が施されている。その竹管文は、時計回りの方向で見ると、5つの竹管文の次は6つ。その次は7つというように、一つずつ数を増やし、その数が10になると、もとの5つの竹管文に至るように付けられている。施文した当時の人の、数を強く意識した表現を見受けられる貴重な資料と言える。4は長胴甕の上半である。外器面に横方向のタタキ目が明確に残る。

(2) 土坑

土坑は全部で8基検出した。このうち、1号土坑については溝とともに別記する。土坑は特にA-3区で集中して検出された。

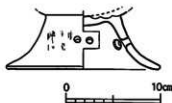
ほとんど掘り下げていないため、取り上げた遺物は少なく、1点のみ記載した。第106図は6号土坑で出土した付台鉢の台部である。

(3) 溝及び1号土坑

①溝 (第107図 P L 23)

溝はA-1、A-2、B-2区で弧を描き、長さ14mが検出された。幅1.2m、深さ0.4mで埋土は黒褐色土であった。断面形はほぼ三角形を呈する。

埋土が他と異なり、規模や遺物がほとんど出土しない点などから、当遺跡の中心となる弥生時代後期から古墳時代前期よりも新しい遺構であることが想定された。



第106図 146番地 6号土坑出土遺物実測図 (S=1/4)

また、弧を描いているためこの溝が円形を描くと仮定し、その直径を推定してみると、外周の値は17.9mとなり、その円の中心には1号土坑が位置することがわかった。以上のことから、この溝は円墳の周溝であると判断される。

②1号土坑 (第107～109図 P L 23)

1号土坑はその軸が調査区の軸とほぼ同一方向で、西北西-東南東を長軸とする。その長さは3.2m、直行する短軸の長さは2.4mである。平面形はやや歪な台形を呈しており、東側の辺が長い。当初は検出だけにとどめる予定であったが、遺構の時期とその構造を確認するために、サブトレッチを設定し掘り下げることにした。しかし、途中半分の角礫や円礫が多量に出土し、幅の狭いサブトレッチでこれ以上掘り下げるのは困難と判断し、床面まで掘り下げることは断念した。なお深さは約60cmまで確認した。

土坑の埋土は粘質のある黒褐色土で、15cm大の円礫、角礫を多く含む。また、石棺の一部と思われる内面に赤色顔料が塗布された凝灰岩片も出土した。土器については、須恵器片2点と弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器片が数点出土した。

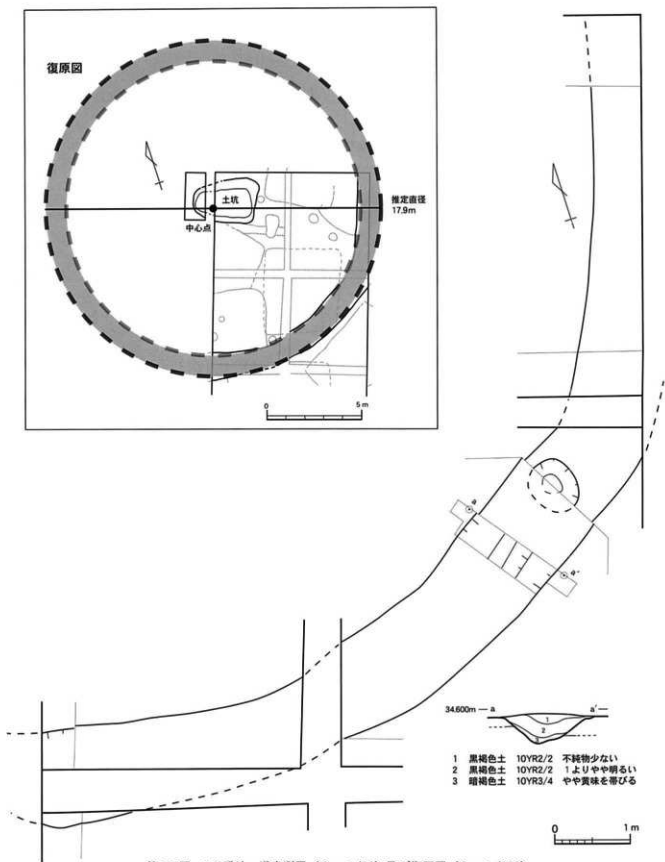
第109図1、2は須恵器片である。内器面には同心円のタタキ目が残る。外器面は平行文のタタキの後縦方向に刷毛を施している。3は甕である。4は甕の脚台と思われる。

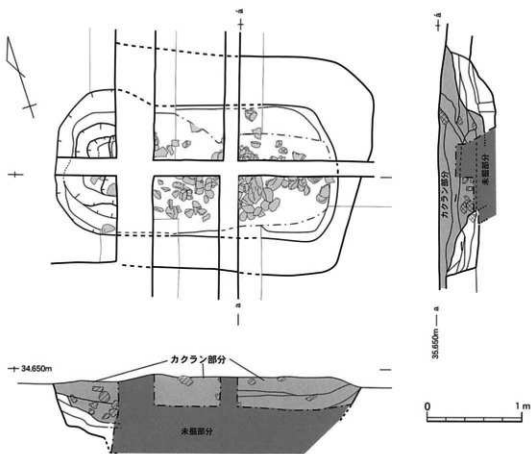
(4) 遺構に伴わない遺物

包含層掘削中で出土したうち、図化できたものを掲載した。これらは遺構が検出できる前の段階で出土したものである。残存率の高い遺物については、平板で位置を記録した上で取り上げた。これら出土地点と検出遺構を重ねた図が第115図である。この図によると2及び24が8号住居跡上に、7及び14が11号住居跡上に位置するが、検出できていない段階で取り上げたため、遺構外とした。

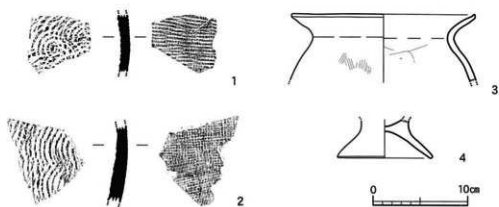
①土器 (第110図 P L 26)

1、3は完形の小型甕である。1の胴部内器面及び口縁部外器面には粘土紐の痕が見える。2は甕の上半である。口唇部は凹線が通る。4は有頸の鉢、5と7は無形の鉢である。6は付台無頸鉢である。8、12、16、17は付台鉢と思われる。9、13は甕である。二つの形態は異なるが、どちらも底部に1つの穴が空く。10は山陰系の

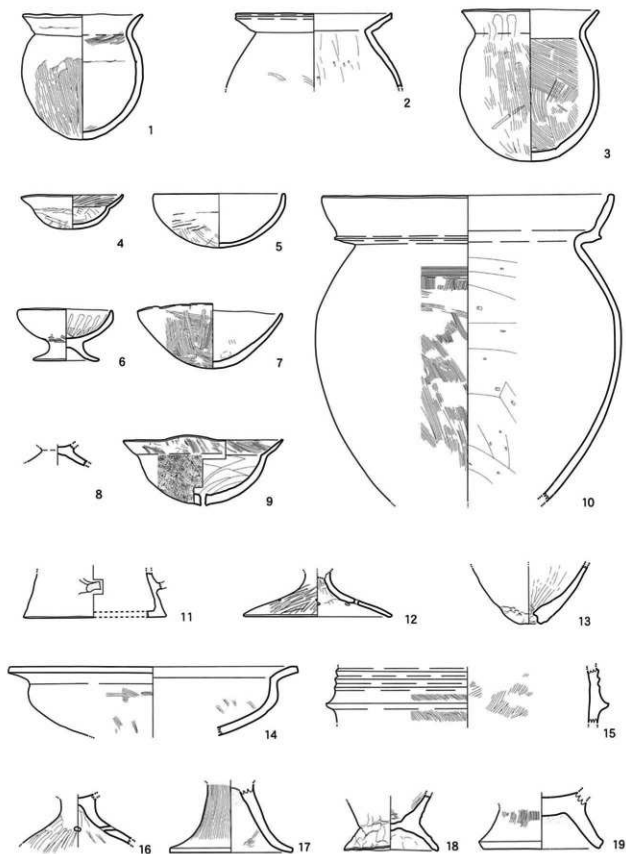




第108図 146番地 1号土坑実測図 (S = 1/40)



第109図 146番地 1号土坑出土遺物実測図 (S = 1/4)



第110図 146番地 遺構に伴わない遺物実測図① (S = 1/4)

0 10cm

変である。11はジョッキ形土器の底部である。14は高坏の坏部である。15は壺の胴部か。18、19は壺の脚台部である。18は調整が非常に雑である。

②内面朱附着土器片 (第111図)

20～22は内面朱附着土器片である。

③ミニチュア土器ほか (第111図)

23は、器種は不明だが、外面にモミの痕が明瞭に残る。24～28はミニチュア土器である。24は鉢形、25は片口形、26は笠形？、27は変形、28は高坏形を呈する。29は管玉形の土製品である。30は鐏形土製品の舌か？ 31は焼成粘土塊で、モミ痕のほかイネの葉と思われる圧痕が明瞭に見られる。

④古代、中世の土器 (第112図)

32～35は青磁片である。32は合子か、33は碗の口縁部、34は体部、35は底部である。

36は移動式カマドの上部及び焚口部である。37は石鍋片である。38、39、42～44、46は須恵器である。40、41、45は土師器である。38は高坏の坏部である。39は壺の底部である。40は小型の壺の口縁部である。41は壺の下半である。42は壺の肩部である。43～46は坏である。

⑤石器 (第113図)

石器は砥石と石鏃が出土した。47、48は砥石で石材は砂岩と思われる。49は黒曜石製の石鏃である。

⑥鉄

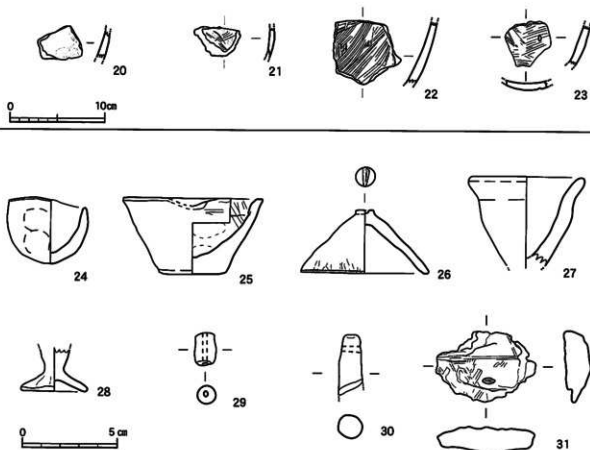
146番地では、鉄が21点出土した。このうち製品が10点で、器種としては鏃が5点、鉈が2点、刀子が2点、鎌が1点であった。また鉄4点以外はすべて欠損している。

1～5は鏃である。1は無茎である。6、7は鉈の切先である。8、9は棒状鉄である。約5mm角の棒状を呈する。両端とも欠損している。10、11は鉄片である。12、14は棒状鉄で、12はやや反っている。13、17は刀子の切先部か。15は棒状鉄でやや太い。定型化した素材の一種か。16、18、20は板状鉄片である。厚さがほぼ均一である。19は鎌と思われる。21は刀子か。

3 小結

(1) 円墳について

弥生時代後期後半から古墳時代前期にわたる住居跡群を切る形で円墳が検出された。推定直径17.9mの円墳で、主体部は竪穴の石棺1基と推定される。時期を断定できる遺物がないために、明言しかねるが、主体部と周辺の



第111図 146番地 遺構に伴わない遺物実測図② (20～23はS=1/4 24～31はS=1/2)

古墳の状況から5世紀内に収まるものと考えられる。主体部は盗掘により擾乱を受けていて、墓坑程度の確認しかできなかった。

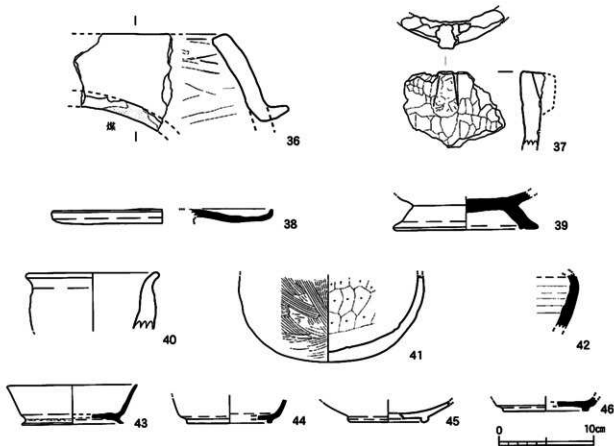
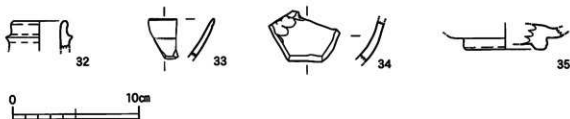
大正年間に記された『大道村郷土誌』によれば、方保田村における古墳は「亀塚、端山、清水山、中島、宮の裏、立石、京塚、馬見塚山4基」が知られている（中村ほか1982、中村2006）。その古墳配置見取り図に従えば、当地は亀塚古墳から北側へ39間（39丈の誤りか？）と書かれた中島古墳の位置と符合する。中島古墳は円墳で、『大道村郷土誌』には「亀塚を去る三十九間の所の小原なり大正三年七月二十五日の発掘。石棺及び古槍を得たり」とある。今回の調査では、主体部は盗掘を受けていて、石棺の残欠が出土していることから、記述と符号する点が多い。これらのことから、146番地で検出された円分は中島古墳である可能性が高いことを指摘しておく。

(2) 竹管文のある壺について

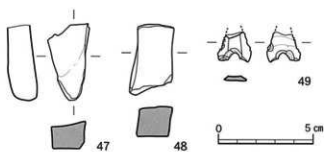
遺物については、13号住居跡で出土した竹管文のある壺が特筆するものとして挙げられる。肩部に施された竹管文の数が5から10まで、時計回り方向に1つつ増えていくものであった。数を示す資料として大変珍しいものである。

(3) まとめ

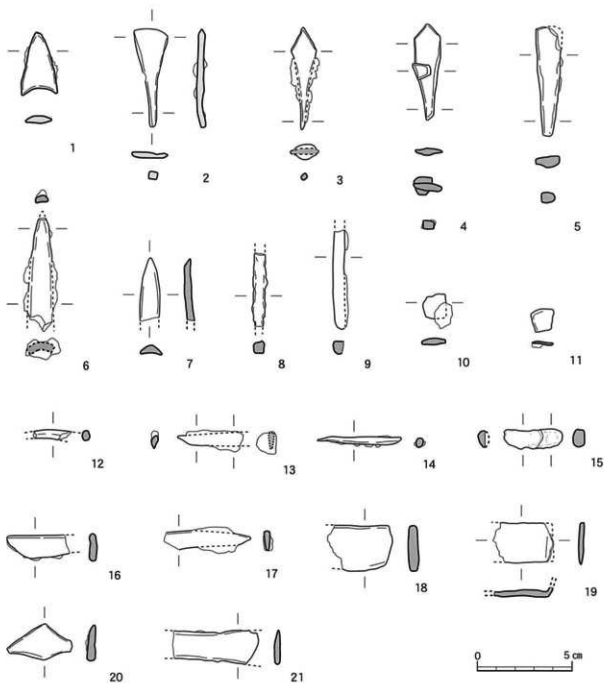
今回調査した146番地では、150mの範囲で14基の住居跡と8基の土坑を検出した。それぞれの時期については、米菰が大半であるため概要でしか述べられないが、古墳時代初頭から前期にかけての時期が中心といえよう。当調査区は周囲に比べて標高の高い部分であった。しかしこのエリアにおいても、階層差を示すような特殊な遺構というものは確認されず、一般的な古墳時代初頭から古



第112図 146番地 遺構に伴わない遺物実測図③ (32～35はS=1/3 36～46はS=1/4)



第113図 146番地 遺構に伴わない遺物実測図④ (S = 1/2)



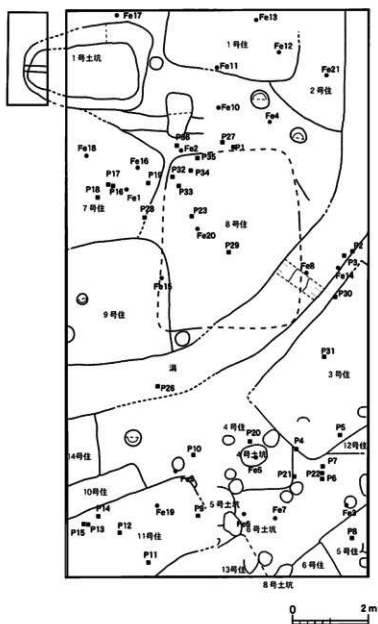
第114図 146番地出土鉄実測図 (S = 1/2)

墳時代前期を主体とする住居跡群が確認されるにとどまった。

今回検出された住居跡の重複状況やその時期などは、第13次調査(119番地)での様相とよく似ている。古墳時代前期を中心とした時期に、頻繁に立て替えられた住居跡(居住域)の範囲が当地まで広がっていたことを確認できたことが、今回の成果と言える。

中村幸史郎ほか 1982 『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書第2集 山鹿市教育委員会

中村幸史郎ほか 2006 『方保田東原遺跡(7)』山鹿市文化財調査報告書第2集 山鹿市教育委員会



第115図 146番地 遺物出土地ドット(S=1/100)

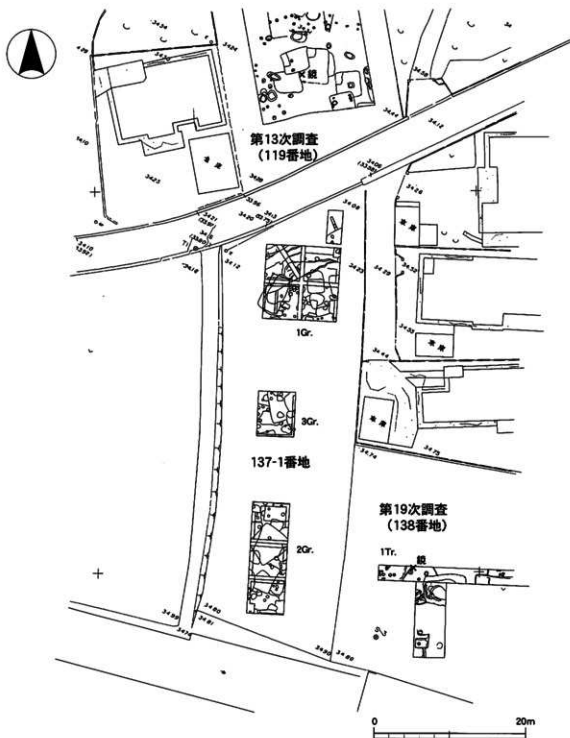
II 137-1番地

1 調査地、層序

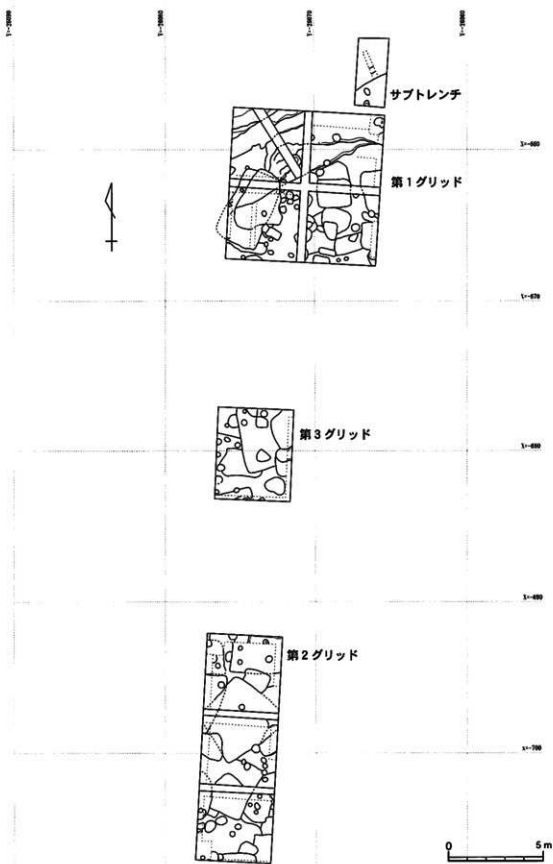
(1) 調査区について (第116図)

137-1番地は、県道方保田山麓線とそこから分岐し馬見塚集落へ向かう市道に挟まれた区域の一部分で、現在は畑で家畜飼料のトウモロコシや牧草が耕作されている。

この畑はかつて桑畑であった。昭和41年、開墾中に甕棺が出土したという連絡を受け、鹿本高校及び鹿本農業高校が発掘調査を行った。当時は塚の本遺跡と呼ばれている(立山・徳丸1967)。調査の結果、弥生時代後期の甕棺2基と箱式石棺1基が検出された。この調査は、方保田東原遺跡内での数少ない墓地道構であり、遺跡内の空間的機能を考える上でも貴重な調査であったといえる。



第116図 137-1番地周辺検出遺構配置図 (S = 1/500)



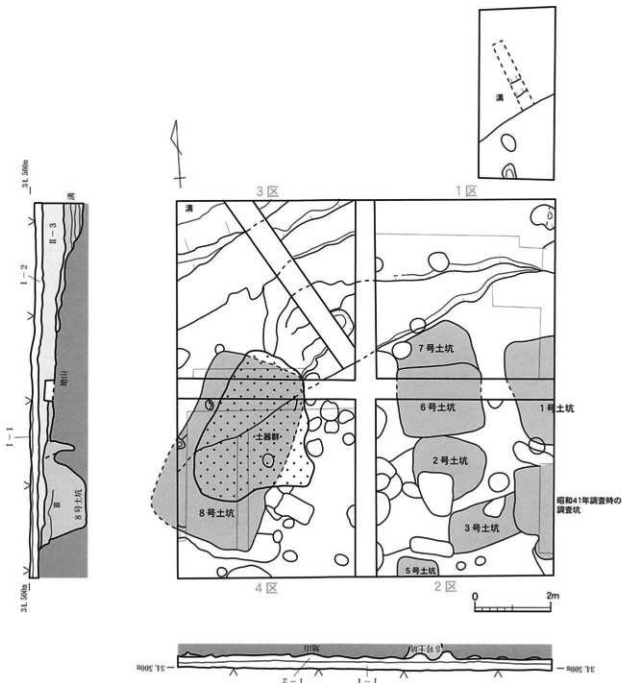
第117図 137-1番地 調査区配置図 (S = 1/200)

今回の調査は、昭和41年の調査を踏まえて、墓域の広がりや時期の確認を一つの目的とした。また、第13次調査（H8年度調査：119番地）と第19次調査（H9年度調査：138番地）の二つの調査地点からは合計3面（119番地が2面、138番地が1面）の小型仿製鏡が出土している。その間に位置する137-1番地についても、青銅鏡の出土を始めとして、集落内における特別な場所であることを示す遺構や遺物の発見が期待された。

当該地は北側が馬見塚集落への市道に接しており、西側には市道から南へ向かう里道が通っている。地形は、

南側に向かってなだらかに高くなっていくが、一見それには気付かないほどわずかなもので、ほとんど平坦といつてよい。

第19次調査地（H15年度：146番地）とは南西方向でほぼ接しており、そこよりも当地が一段低くなっている。また西側は、第46次及び第48次調査地（H14年度：151番地、148番地）が続き、西に行くほど標高が徐々に下がっていく。一方、南東側は第19次調査地とほぼ接している。道を挟んで北側は、第13次調査地点がある。ちなみに第13次調査地点は北に向かうにつれて徐々に標高が



第118図 137-1番地 第1グリッド 遺構配置図及び土層断面図 (S=1/100)

高くなっていき、逆に当調査地は南側に向かって標高が高くなるので、この調査地周辺では、当地の北側の市道付近が最も低い地点となる。

調査区は畑の地割に合わせて、3つの調査区を設けた。

最も北側の調査区は10m四方の第1グリッドで、これを5m四方で区分けした。北東を1区、南東を2区、北西を3区、南西を4区とした。また調査区で検出された溝の方向を確認するため、1区北側に拡張のサブトレンチ(幅1.5m、長さ4.5m)を設けた。

続いて、第1グリッドの西辺と同軸に幅4m、長さ15mの第2グリッドを設定した。第1グリッドと第2グリッドには10m間隔をおいた。第2グリッドは北から南へ5mごとに区分けして、北から1区～3区と名づけた。

さらに、第1グリッドの墓域の広がりを確認するために、第3グリッドを最後に設定した。第3グリッドは、第1と第2グリッドの間で、第1グリッドの4m南に設けた。軸は同じとし、幅は4m、長さは5mとした。

立山広吉・徳丸達也 1987「熊本県山鹿市方保田塚の本道跡調査報告」『石人』第8巻2月号、城史史談会

(2) 層序について

基本層序は、表土から地山まで3層に分層された。堆積状況については、第118、128、133図を参照いただきたい。

- I 層 耕作土(黒褐色土 2.5V3/2)しまりない。
- II 層 包含層(黒褐色土 7.5V3/1)しまりない。
- III 層 遺構埋土(黒土 7.5V3/2)基本的にしまりない。地山ブロックを包含するかもしれないので、分層が可能。

2 遺構と遺物

137-1番地で検出された遺構は、溝1条、住居路が14基、土坑が18基であった。基本的に検出で留め、遺構掘削を行わなかった。遺構及び遺物について、グリッドごとに記述する。

(1) 第1グリッド(第118図 P L28)

第1グリッドでは、合計8基の土坑(甕棺墓1基を含む)と溝1条が検出された。2区において土坑がかなり重複して検出され、また南東角では昭和41年の調査時の調査坑が検出された。

住居跡と確認できる遺構が検出されなかったのが、この調査区の特徴である。

①土坑

土坑は全部で8基検出され、特に2区で6基の土坑が集中して検出された。

1号土坑

調査区西壁中央付近で検出された。ほぼ半分が調査区外であるため、規模は不明であるが、北北西-南南東を主軸とし、その長さは2.8mを測る。

2号土坑

2区のほぼ中央に位置する。丸みを帯びた不整形の土

坑である。長軸の方向は西北西-東南東を向き、長さは1.9mである。北側にある6号土坑に切られている。

3号土坑

2区の南西部にあり、西の4号土坑に切られている。やや歪な長方形を呈しており、長軸は東北東-西西南西を向く。長さは不明であるが、幅は1.1mである。

4号土坑

2区南東にある。鹿本高校考古学部による昭和41年の調査の調査坑に切られている。

5号土坑(P L30)

2区の南壁にかかっていた土坑で、南半分は調査区外である。おそらく隅丸の長方形を呈するものと思われる。幅は不明であるが、長さは1.1mを測る。長軸はほぼ東西を向く。検出段階で、大きな破片の土器片がかつまって出土した。甕棺の一部と判断したので、遺物は取り上げず、現地に残した。口縁部は失われており、肩部と胴部の一部が確認された。

6号土坑

1区から2区にまたがるようにして検出された。平面形は整った長方形を呈しており、隅はやや丸みを帯びている。長軸はほぼ東西を向いており、長さは2.2m、幅は1.85mを測る。北側の7号土坑と南側の2号土坑を切っている。

7号土坑

1区南側で検出された。ほぼ南半分を6号土坑に切られているため、規模は不明である。このほかピットなどにも切られているため、平面形も不明であるが、方形を呈する可能性が高い。

8号土坑(第119、120図 P L30)

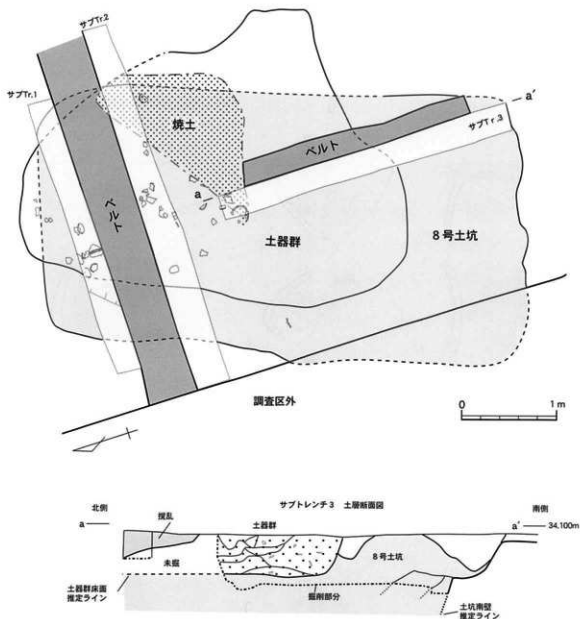
4区のほぼ全体にわたって検出された土坑である。当初は、上面の土器群と一体のものとして判断していたため、不整形を呈すると思っていたが、精査の結果、整った隅丸長方形を呈することが分かった。上層の土器群に切られている。

長軸は北東-南西を向いており、長さは5.0m、幅は2.8mを測る巨大な土坑である。深さは、グリッド西壁に沿ったあたりで、幅20cmのサブトレンチを設定し掘り下げた結果、1.3mというかなりの深さであった。掘削した部分だけで言えば、床面は平坦である。

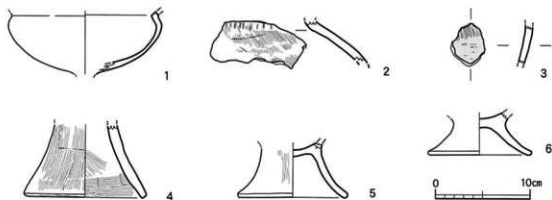
埋土は暗褐色土で締りが余りなく、それは底面ほど顕著であった。

遺物はほとんど掘り下げていないため、取り上げたものは少ない。このうち大型の土坑である8号土坑のみ、深さを確認するためサブトレンチを設定して、その範囲を底面まで掘り下げた。掲載した遺物は8号土坑の遺物であり、焼土層からの出土が2～4で、それ以外は埋土内の出土である。

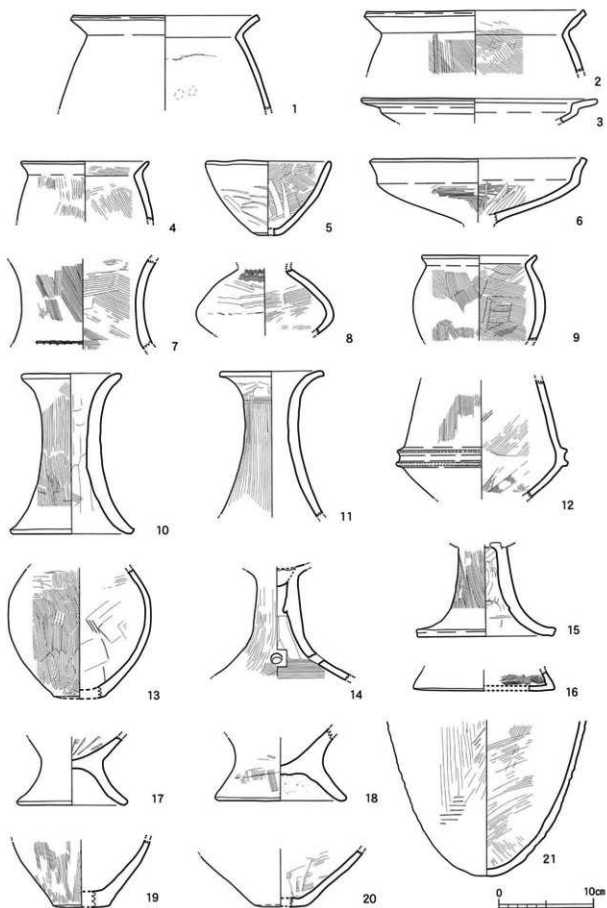
第120図1は有頸の台付鉢の鉢部と思われる。2は蓋の頸部である。3は甕の胴部か。内面未付着土器片である。4は器台の下半である。5は甕の脚部である。6も甕の脚部と思われるが、台付鉢の可能性もある。



第119図 137-1番地 第1グリッド 8号土坑実測図 (S = 1/40)



第120図 137-1番地 第1グリッド 8号土坑出土遺物実測図 (S = 1/4)



第121図 137-1番地 第1グリッド 土器群出土遺物実測図① (S = 1/4)

②土器群

4区のほぼ中央で検出され、ちょうど8号土坑北東部を切っている。平面形は楕円形に台形の突出部が付いた形態をなしている。長軸は北北東-南南西を向いており、長さは4m、幅は最大部で3.1mを測る。深さは0.4mであった。

埋土は焼土粒や炭化物を含む暗褐色土で、他の遺構の埋土に比べて乾燥度合いが強く、粘性の弱い土質であった。

出土する土器は、大きな破片が数点見られたものの、大半は小片の土器であった。土層観察で、8号土坑が埋まってしまった後に、土坑が掘られ、その中に土器片が埋まっていることが分かったが、遺構の主軸方向がほぼ同一であることから、土器溜まりが形成されたのは、8号土坑埋没後、ほどない時間の可能性がある。

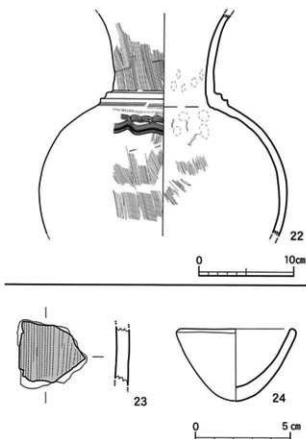
ほぼ全体を検出だけで留めたため、取り上げた遺物は検出中のものである。

第121図1、2は甕の上半部である。3は高坏の口縁部である。4、9は小型甕の上半部である。5は平底を呈する鉢である。6は高坏の坏部である。口縁部がほとんど屈折しない。7は壺の頸部である。肩部との境界に櫛歯状文が施されている。8は壺の胴部上半である。外器面がヘラミガキの精製土器で、肩部には波状文が施

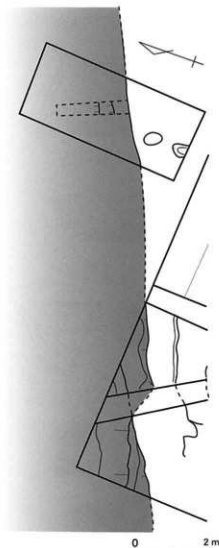
されている。10、11は器台である。11は底部を欠く。12は台付鉢と思われる。屈折部に2条の刻目突帯が回り、口縁部に向かって直線的にすばまっていく。特徴的な器形である。13は壺の胴部から底部と思われる。ほぼ平底を呈する。14は高坏の脚部である。3つの透孔がある。15は台付鉢の脚部と思われる。こちらは透孔がない。16はジョッキ形土器の底部である。17、18は甕の脚台である。19、20は壺の底部と思われる。いずれも平底を呈する。21は甕の下半である。長胴の丸底を呈する甕である。第122図22は壺の口縁部から胴部にかけての部位である。頸部には2条の突帯が回り、肩部には2種類の波状文（6本単位と8本単位）が施されている。23は壺の胴部から、内面朱付着土器片である。24は鉢形のミニチュア土器である。

③溝（第123図 PL28）

3区の北西隅で検出された。軸は西北西-東南東を向



第122図 137-1番地 第1グリッド 土器群出土遺物実測図②
(22はS=1/4 23、24はS=1/2)



第123図 137-1番地 第1グリッド
溝実測図 (S=1/100)

いており、大半は調査区外であるため幅は不明であるが、深さは0.5mを測る。埋土が粘性の強い灰褐色土であったため、その段階で中世以降の遺構であることが分かっていった。また、位置や遺構の深さから第18次調査（H14年度：148番地）で検出された溝と同一である想定がされた。そのため、この溝がさらにどの方向へ延びていくのかを確認するために、1区北側に拡張トレンチを設定して、溝の検出を試みた。

すると、軸をほぼ同じくして、北東方向に延びる溝状遺構が検出され、現在使用されている市道とほぼ同じ軸であることも確認された。

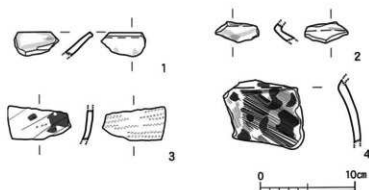
遺物はほとんど出土しなかったが、グリッド内からは青磁片や瓦質土器が数点出土しているので、第18次調査の結果と合わせて見ても、これらの遺物は当遺構の時期とさほど変わらないものと思われる。

④遺構に伴わない遺物

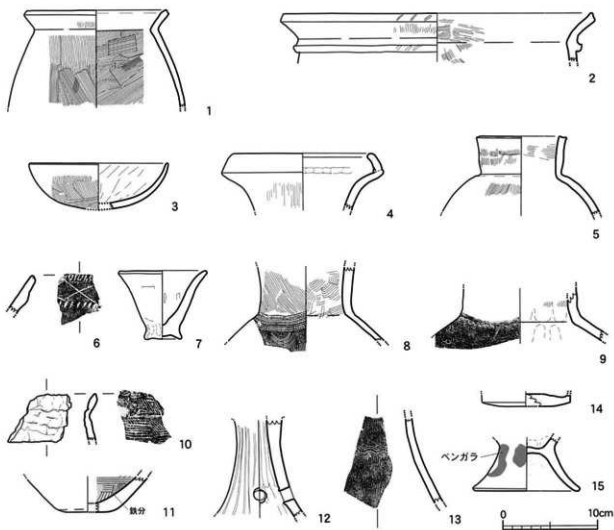
第1グリッド内で出土した、遺構に伴わない遺物である。

i 内面朱付着土器片（第124図）

全部で4点であり、1～3は1区、4は3区で出土し



第124図 137-1番地 第1グリッド出土
内面朱付着土器片実測図（S=1/4）



第125図 137-1番地 第1グリッド 遺構に伴わない遺物実測図①（S=1/4）

た。1と2については、両器面に赤色顔料の付着が見られた。1は壺の口唇部と思われる。2は壺の頸部と思われる。3は壺の胴部か。外器面にはタタキ目が残る。4は鉢の肩部か。赤色顔料の付着に濃淡が見られる。

ii 土器 (第125～126図)

1は甕の上半である。2は甕の口縁部である。頸部に1条の刻目突帯が走り、口唇部にも同様の刻目がみられる。口径が32.6cmと弥生時代後期の甕としては大型の部類である。甕棺の可能性もある。3は鉢である。4は壺の口縁部である。上端が内傾する二重口縁で、内器面には屈折部に粘土の貼付が見える。5は壺の上半である。口縁部はほぼ直立する。6は壺の口縁部と思われる。口唇部とその下位に刻目を施し、その間に工具を押さえつけX字状の文様を施している。7は鉢形ミニチュア土器である。台を有する。8は壺の口縁部から頸部にかけての部分である。頸部には波状文とその下位に扇状文が施されている。9も壺の頸部である。頸部には波状文が見える。10は器種不明の口縁部である。内器面に粘土紐の痕が明瞭に残る。11は壺の底部である。内器面に鉄分が付着している。12は高坏の脚部である。13は台付鉢の鉢部と思われる。口縁部へ直線的にすぼまる形態で、中位には連続の波状文が施されている。14は器種不明の底部である。底部から胴部へ直立する形状になる。15は甕の脚台で外器面にベンガラが付着している。16～18は青磁碗の口縁部である。16は外器面に3条の細沈線が通る。19は青磁碗の底部である。内器面に目跡が残る。20は須

恵器坏身の底部である。

iii 石器 (第127図 P L 31)

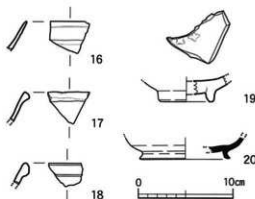
22はほぼ完型の磨製石斧である。23は扁平磨製石斧の刃部である。

iv 土鍾 (第127図24)

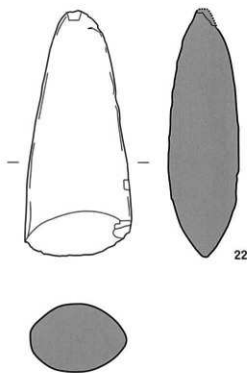
24は半欠の土鍾である。重さは1.9gを量る。

v 鉄 (第136図 P L 31)

鉄は第1グリッド内では7点出土した。このうち明確に製品と判断できたものは11の鎌だけであり、それ以外は製品の可能性のあるもの(鉄2点[1, 7]、鎌1点



第126図 137-1番地 第1グリッド
遺構に伴わない遺物実測図② (S = 1/4)



第127図 137-1番地 第1グリッド 遺構に伴わない遺物(石器、土鍾)実測図 (S = 1/2)

[5]), または不明のものであった(薄片状2点[3、4]、棒状1点[15])。

出土分布は、4区で5点と最も多く、1区と3区で1点ずつ出土した。

(2) 第2グリッド(第128図 P L 29)

第2グリッドでは、住居跡が9基、土坑が7基検出された。第1グリッドとは対照的に土坑は少なく、住居跡が遺構の主体であった。

① 住居跡

住居跡については、基本的に全体を掘り下げていないため、深さが不明なものもある。また、検出時の形態や規模で判断しているため、調査区端で検出されたものはその根拠がかなり薄い。今回は、検出された遺構の長軸の長さで、土坑か住居跡かを判断した。

なお、遺物についてはサブトレッチ掘削時のみ取り上げを行い、それ以外は現地に残した。そのため、床面直上の遺物は掲載できていない。ただし、6号住居跡だけはサブトレッチ内で土器が出土したため、出土状況を記録後取り上げた。

1号住居跡

1区北東で検出された。主軸はほぼ南北を向き、平面形は方形を呈すると思われる。下層の2号住居跡を切っている。規模は不明である。

2号住居跡

1区北東隅で検出された。大半が調査区外であるうえに、上層の1号住居跡に切られており、1号住居跡を掘り下げていないため、規模は不明である。

3号住居跡(第130図)

1区北西で検出された。明確に検出できたのは東壁のみであり、平面形もはっきりとは分からなかった。おそらく方形を呈するものと思われる。

第130図1は鉢である。深さがある。2は高杯の脚台基部である。3は台付鉢の台部である。小径の透孔が2つセットで4箇所あったと思われる。

4号住居跡(第130図)

1区南西から2区北西にわたって検出された。西半分は調査区外で南東部分も東は5号住居跡、南は2号土坑に切られている。

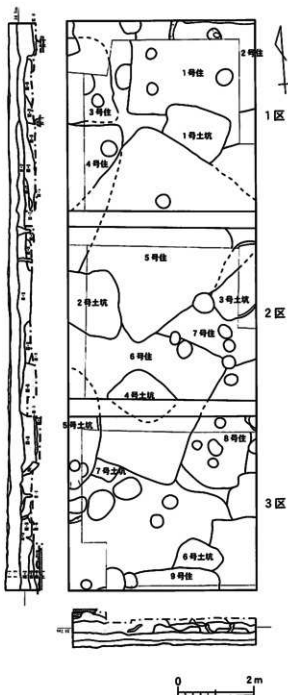
第130図4は高杯の杯部である。内器面にヘラミガキが施されている。5は器台の中位と思われる。

5号住居跡(第130図)

1区南半分から2区北半分にかけて検出された。西壁を2号土坑に切られているが、ほぼ全体が検出された。平面形はほぼ正方形を呈しており、主軸は北東-南西を

向く。北東-南西軸は4.8m、その対軸は4.2mを測る。北東の1号土坑と北西の4号住居跡を切っており、南西の2号住居跡に切られている。また、南の6号住居跡及び7号住居跡も切っている。南東の3号土坑については、前後関係を把握できなかった。

第130図7は小型壺の上半である。8は壺の口縁部から肩部である。肩部には波状文が施されている。9は壺の底部である。



第128図 137-1 番地 第2グリッド
遺構配置図及び土層断面図 (S=1/100)

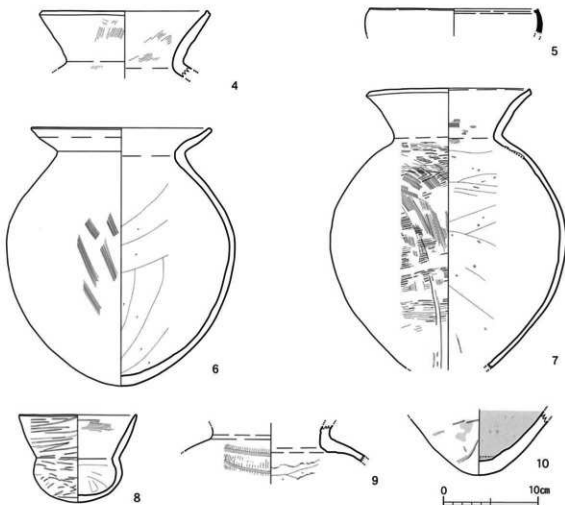
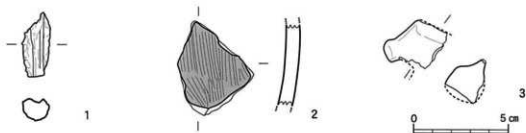
6号住居跡 (第129図 PL 29)

2区南半分から3区北側にかけて検出された。北側を5号住居跡と2号土坑に、南西を5号土坑に、中央部を4号土坑に切られており、北東の7号住居跡と西の8号住居跡を切っている。主軸は南南西-北北東を向いており、長さは不明であるが、幅は3.7mを測る。平面形は長方形を呈すると思われる。

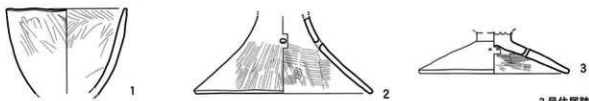
調査区ベルトに沿ってサブトレンチを設定し、掘り下げたところ、住居跡内から復元可能な土器が少なからず出土した (PL 29)。これらは、この住居の時期を知る

ために出土状況実測後取り上げた。

第129図1は焼成粘土塊か。2は内面朱付着土器である。内器面にベンガラが付着する。3は土馬の頭部か。鼻先と鬚部分が表現されているように見える。4は壺の口縁部である。5は須恵器の鉢である。6は甕である。口縁部は内湾しながら外に開き、端部は丸みを持つ。7は壺である。胴部には細い条痕のようにタタキ目が残るが、その上に刷毛で調整されている。8は小型丸底甕である。外器面は細かいヘラミガキが施されている。9は壺の頸部である。10は甕の底部と思われる。内器面には、



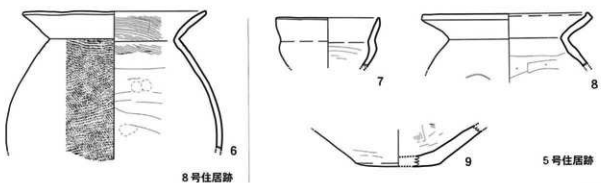
第129図 137-1番地 第2グリッド 6号住居跡出土遺物実測図 (1~3はS=1/2 4~10はS=1/4)



3号住居跡

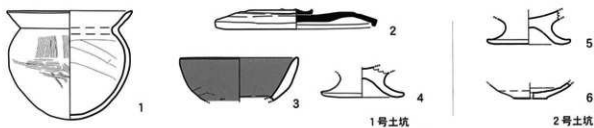


4号住居跡



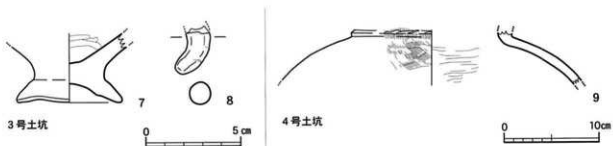
5号住居跡

第130図 137-1番地 第2グリッド 3～5号、8号住居跡出土遺物実測図 (S=1/4)



1号土坑

2号土坑



3号土坑

4号土坑

第131図 137-1番地 第2グリッド 土坑出土遺物実測図 (S=1/4 7, 8はS=1/2)

ベンガラが付着する。

7号住居跡

2区東側で検出された。周辺を全て別の遺構に切られており、検出できた壁は南壁だけである。

8号住居跡

2区南東から4区北東において検出された。北の7号住居跡と西の6号住居跡に切られており、検出された壁は南西部分の壁である。規模は不明である。

第130図6は壁の上半である。外器面にはタタキ目とその後のナメ刷毛が明瞭に残る。

9号住居跡

3区南壁付近で北壁部分が検出された。6号土坑及び10号住居跡を切っている。大半が調査区外であるため、規模は不明である。

10号住居跡

3区南東隅で検出された。検出された住居北西部分から判断すると、主軸はほぼ南北を向くと思われる。西側は9号住居跡と6号土坑に切られており、大半が調査区外であるため、規模は不明である。

②土坑

土坑は7基検出されたが、平面形は方形（1号、2号、4号、7号）と楕円形（3号、5号）と不整形（6号）が見られた。

1号土坑（第131図 P L 31）

1区のほぼ中央で検出された。平面形はやや歪な長方形を呈しており、主軸は北西—東南東向き、長さは1.6mを測る。幅は南西の5号住居跡に切られているため、不明である。

第131図1は小型の甕である。内器面はヘラケズリが施されている。2は須恵器の坏蓋である。3は黒色土器の碗である。両器面とも黒色を呈する。4は台付鉢の台部である。

2号土坑（第131図）

2区東側で検出された。西半分は調査区の外である。平面形は不整形である。主軸はほぼ東西を向く。5号住居跡及び6号住居跡を切る。

第131図5は台付鉢の台部である。6は白磁皿の底部である。内器面に沈線が巡る。

3号土坑（第131図）

2区北東で検出された。主軸は北西—南東向き、平面形は楕円形を呈する。長軸は推定で2.2m、短軸は推定1.3mを測る。7号住居跡を切っており、北西にある5号住居跡との前後関係は把握できなかった。

第131図7は台付鉢の台部と思われる。器壁が厚い。8は土製勾玉の下半である。

4号土坑（第131図）

2区南端で、6号住居跡のほぼ中央部で検出された。南半分が土層観察ベルトのため、検出できていないが、平面形は長方形で、主軸は北西—南東を向くと思われる。また長さは1.4m、幅1.2mと推定される。

第131図9は甕の肩部である。頸部には1条の突帯が巡る。

5号土坑

3区北西隅で検出された。土坑の西半分は調査区外である。明確に検出できたのは南東部分であり、北東部分はいま検出することができなかったが、推定すると、第128図のようになる。主軸はほぼ南北を向き、平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は不明である。東側の6号住居跡、7号土坑を切っている。

6号土坑

3区南東で検出された不整形の土坑である。南半分を9号住居跡に切られている。規模は不明である。

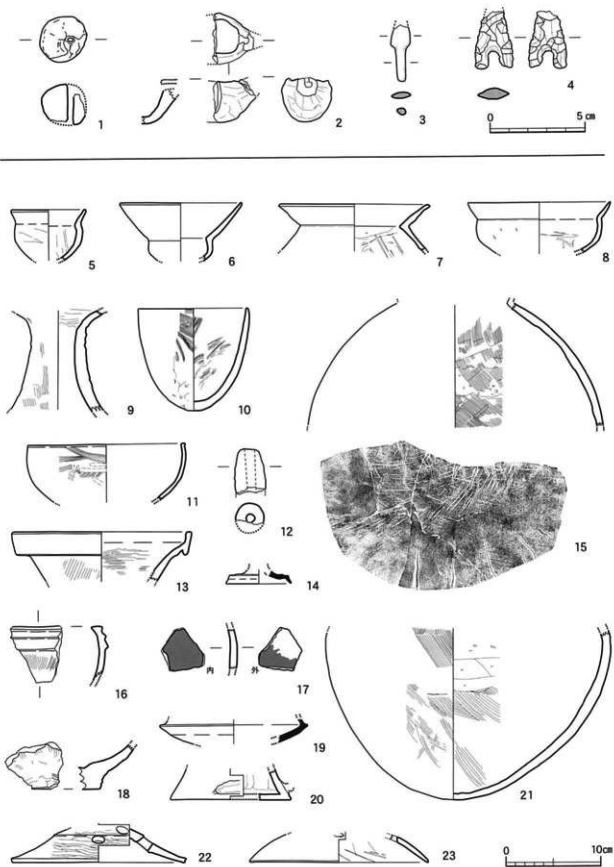
③遺構に伴わない遺物（第132図 P L 31）

i 土器、土製品

1は土製玉である。2はスプーン形土製品か。4は黒曜石製の石鏃である。先端を欠く。5は小型の甕である。6は小型丸底甕の上半である。口縁部が発達している。7は甕の口縁部から肩部である。8は鉢である。9は器台である。10、11は鉢である。10は深みがある。11は口唇部が外に肥厚する。12は半欠の土鍾である。13は甕の口縁部である。14は須恵器の小型の高坏脚台榅部と思われる。15は甕の胴部上半である。外器面に、右から左方向へ連続したヘラ描きがわずかに見られる。ヘラ描きの方向は二つあり、一つはほぼ水平方向、もう一つは左下がりの斜め方向である。図柄は不明であるが絵文土器と思われる。16は鉢の口縁部と思われる。口縁部下位に2条の突帯が巡る。17は甕の胴部か。両器面に赤色顔料が付着している。18は甕の底部と思われる。底部はかなり分厚い。19は須恵器の坏身である。20はジョッキ形土器の底部である。21は甕の下半である。球胴で丸底を呈する。22は鼓形器台の下半である。屈折部を境に上下にそれぞれ透孔が施されている。23は高坏の榅部か。器壁が薄く、内湾しながら榅部へ至る。

ii 銅鐵（第132図）

3は銅鐵である。1区で出土した。鋒部を欠いており、現存の長さは2.0cmで、最大幅は1.1cmである。断面形が楕円形を呈する茎部の長軸は0.3cmを測る。銅の質は悪く、ブロンズ病も進んでいるため、欠損した鋒部の断面は中空になっている。



第132回 137-1番地 第2グリッド 遺構に伴わない遺物実測図（1～4はS=1/2 5～23はS=1/4）

iii 鉄 (第136図)

鉄は第2グリッド内では9点出土した。このうち8、9、12は完形の鉄であった。また製品としては、半欠ではあったが手鎌 [16] も1点出土している。明確に製品と判断できたものはこれら4点で、それ以外は鉄の可能性のあるものが1点 [10] ある。また、不明のものは3点見られ、その内訳は棒状が2点 [6、14]、板状が1点 [19] であった。このほか、小型ながらも鉄滓が1点 [2] 出土しているのは注目される。

出土分布は、1区で3点、2区で2点、3区で4点となっており、際立った偏りは見られなかった。

(2) 第3グリッド (第133図 P L 29)

第3グリッドでは、住居跡が4基、土坑が4基検出された。ここでは、住居と土坑が入り混じるように検出された。調査範囲が狭いため、住居跡については、全体の規模が分かるような検出はなかった。しかし、土坑と比べたとき明らかに大きいものは住居跡とした。遺物は、1号住居跡の検出時に出土したもののみである。土坑については、遺物も小片であったため、掲載していない。

① 住居跡

1号住居跡 (第134図)

北東隅で検出された。大半が調査区外で、検出されたのは住居跡北西部分だけである。規模及び平面形は不明である。南側の1号土坑に切られている。

検出時に数点の遺物が出土した。1は古代土師器の甕である。2は甕の脚部と思われる。

2号住居跡

調査区中央から北西にかけて、住居跡の南西部が検出された。平面形は方形を呈すると思われるが、大半が調査区外であるため規模は不明である。北西の3号住居跡、南東の2号土坑を切っており、東の1号住居跡や1号土坑、3号土坑に切られている。

3号住居跡

調査区北西隅で検出された。大半が調査区外で、東側も2号住居跡に切られているため、確認されたのは南壁の一部である。よって規模、平面形は不明である。

② 土坑

1号土坑

調査区東壁中央付近で検出された。東側がうまく検出できなかったが、楕円形を呈し、主軸はほぼ東西を向くと思われる。1号住居跡と3号土坑を切っている。

2号土坑

調査区ほぼ中央で検出された。東側を2号住居

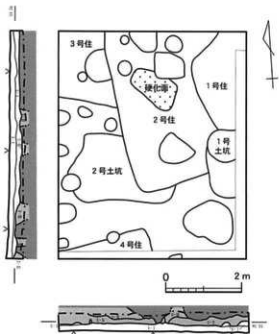
跡に切られているが、平面形はやや歪な長方形を呈すると思われる。主軸はほぼ東西を向き、長さは2.8m、幅は1.7mを測る。1グリッドで検出された土坑に規模や形態がよく似ているため、土坑墓か甕棺墓の可能性もある。

3号土坑

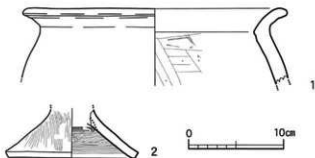
調査区東壁中央付近で検出された。東半分が調査区外であり、北側を1号土坑に切られている。規模等は不明である。

4号土坑

調査区南東隅で検出された不整形 (隅丸台形) の土坑である。長さは1.3m、幅は1.1mを測る。



第133図 137-1番地 第3グリッド
遺構配置図及び土層断面図 (S = 1/100)

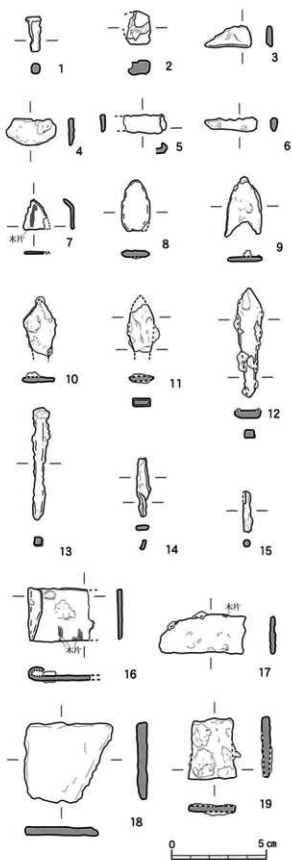


第134図 137-1番地 第3グリッド
1号住居跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

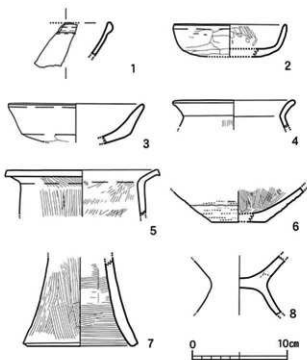
③遺構に伴わない遺物（第135図）

包含層掘削から検出作業中に出土した遺物である。

1は青磁碗の口縁部である。2、3は土師器の坏である。いずれも底部はヘラケズリによって整形されている。また2の内器面はヘラミガキが施されている。4、5は甕の口縁部である。6は甕の底部である。底部にはタタキが残る。7は器台の下半である。8は甕の脚台部である。



第136図 137-1番地出土 鉄実測図（S=1/2）



第135図 137-1番地 第3グリッド
遺構に伴わない遺物実測図（S=1/4）

3 小結

(1) 墓域について

今回の調査の目的は、昭和41年の調査結果を踏まえ、墓域の範囲確認が主であった。調査の結果、長さ5.0m、幅2.8m、深さ1.3mという大規模な8号土坑を筆頭に合計18基の土坑が検出された。喪棺が一部露出して確認された5号土坑を除き、大半の土坑は検出で留めたため確定はできないが、規模や形状から判断すると、第1グリッドで検出された8基の土坑は、喪棺墓や土坑墓の墓である可能性が高いと思われる。とりわけ、8号土坑については、上述のとおり非常に規模が大きく、大型の喪棺墓であることが予想される。

分布については、第1グリッドでは、特に東南部で密集した状態で検出されたのに対し、そこから約10m南へ離れた第3グリッドではわずか1基の検出であった。このことから第3グリッドより南は墓域が広がらないと推察される。一方、墓域の北端については、調査区北端が中世の溝に切られているため推定する要素が少ないが、道を挟んだ北側の第13次調査では、喪棺墓や土坑墓が一切検出されなかったことを考えると、当調査区の第1グリッド北辺が墓域の北端とされる。東西の範囲については、今回の調査では判断し得ないが、南北の範囲に対して著しく広がることは考えにくく、このエリアに形成された弥生時代後期の喪棺を主体とした墓域は、小規模であったものと思われる。

(2) 居住域について

調査区南側にある第2グリッドでは、住居跡が重複した状態で検出されており、居住地であることが判明した。出土遺物については、床面まで掘り上げたものがほとんどないこともあるが、突出した遺物は見当たらない。遺物の時期を見ると、包含層の遺物も含め、弥生時代後期に比定されるものは極めて少なく、古墳時代初頭以降が大半であった。北側の墓域との関係を見ると、弥生時代終末までこの一帯は、活発な土地利用がなかった地

域であったようである。

(3) 溝について

最後に注目する遺構として、第1グリッド北端で検出された溝を取り上げたい。

第18次調査と今回の調査で検出した溝を検証してみると、埋土、規模から判断して同一であることはほぼ間違いないと判断される。床面まで掘り下げた第18次調査では、床面に硬化面と礫で敷き固めた帯状の面が検出された。溝の底面には、人為的な所作が加わっていた。また、中世の壕として考えられる溝と今回の溝では、規模が明らかに異なり、特にその深さについて、差が際立っている。例えば、台地の南端にあたる第39次調査（H11年度調査：220番地）で検出された溝は、深さが2mを超えるのに対し、今回の溝の深さは1mにも満たない。

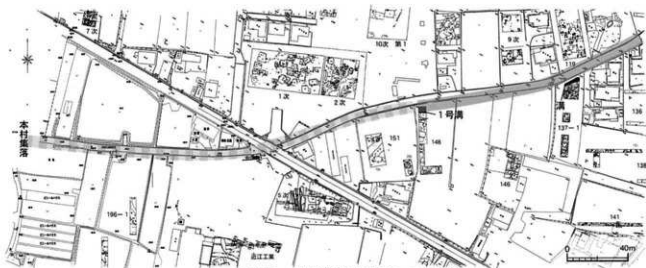
これらのことから、今回検出された溝は壕ではなく、道と判断される。

さて、この道は、現在の市道と向きがほぼ同じで、市道が中世の溝をほぼなぞっていることが分かった。市道は西へ行くと、本村という集落へ続く（第2、3、137図参照）。この本村集落は、さらに西に位置する中世の城（方保田城）の城下町とも考えられ、今も部分的ではあるが、方形に区画された町割が残っている。

このようなことから、今回検出されたこの溝は、方保田城から東（菊池方面）へ向かう道と推察する。

『肥後国誌』やその他文献によれば、方保田城主である方保田家は菊池氏の庶流であり、互いの関係は深かったと容易に想像できる。そのような社会状況のなかで、この道は方保田城建設に併せて新たに整備されたのではなかろうか。

今回の道は方保田城に関わった中世の交通を知る上で重要な遺構と捉えられそうである。さらなる延長方向や形状などについては、今後の調査の積み重ねによって明らかになっていくであろう。



第137図 中世道路想定図 (S = 1/2500)

Ⅲ 30・33番地

1 調査地、層序

(1) 調査区について (第138図 P L 32)

30・33番地は、方保田の台地の北端の一段下がった部分にあたり、近年まで畑として利用されていた。南側は一段高くなっており、地表面の高低差は約1mである。一方北側は当調査区のように段々畑が形成されていて、方保田川へと下りていく。調査区の標高は約32.3～32.9mで、南から北の方保田川に向けてやや低くなる。

調査地の傾斜を確認するために、台地に対して直角方向に調査区を設定した。東から順に1・2・3トレンチとした。いずれの調査区も幅1mで、表土及び包含層を除去した後、調査区幅の半分を地山まで完掘し、断面図を作成した。調査区の南端では地表面から0.6～0.8mの掘削で遺構検出面に達したのに対し、北端では0.6～1.1mの掘削を要した。

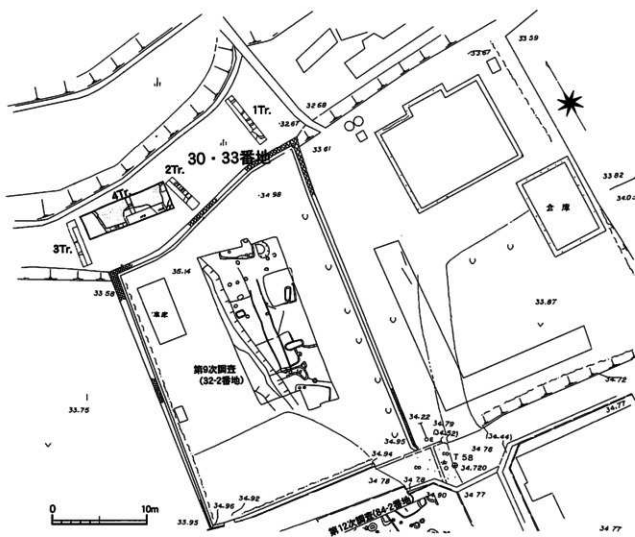
また、1～3トレンチの結果を受けて、2トレンチと3トレンチの間に4トレンチを設定した。4トレンチは、幅約3.0m、長さ9.5mである。

なお、今回の調査は当初、30番地のみを対象としていたが、現地確認の誤りがあり、33番地の一部も掘削した。このため、除草の際33番地の果樹を一部伐採するというミスがあり、地権者の松村氏には大変なご迷惑をおかけしてしまった。このことを明記して改めてお詫びするとともに、今後調査区の境界確認に慎重を期することとしたい。

(2) 層序について

基本的な堆積の様相は以下のとおり。

- I層 耕作土 厚さ20～40cm 黒褐色土、締まらない。
- II層 包含層 厚さ10～20cm 黒褐色土、中世の土師質土器や近世の染付陶器を含み、締まらない。
- III層 遺構埋土 黒色粘質土、地山起源のロームブロックを含む
- IV層 地山 黄褐色土、締まる。直径5～15cmの円礫をふくみ、固く締まる。



第138図 30・33番地 調査区配置図 (S = 1/400)

2 遺構と遺物

(1) 1～3トレンチ (第139～141図 P L 32)

それぞれ、地山層上面まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

(2) 4トレンチ (第142図 P L 32)

1～3トレンチの結果を受けて、2トレンチと3トレンチの間に設定した。トレンチは、幅約3.0m、長さ9.5mである。表土及び包含層の厚さは1～3トレンチと大差なく、調査区の東端では現地表下0.8mで、西端では

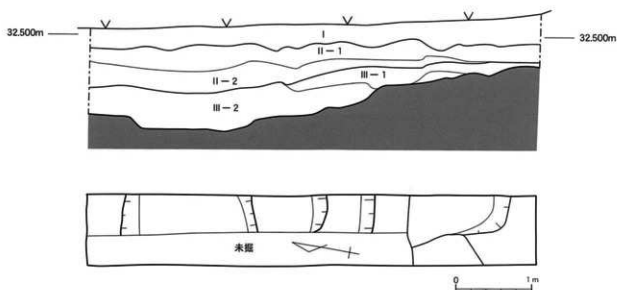
現地表下0.6mの掘削で検出面に達した。

遺構は、溝4条を検出した。

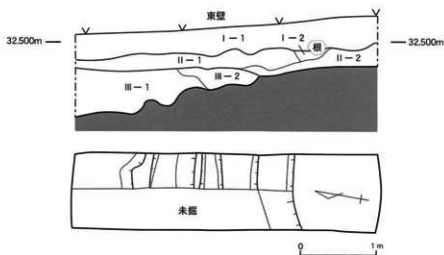
① 1号溝

1号溝は、調査区の中央やや西側に位置する。南から北方向に幅が広がる。位置と規模などから、南に隣接する第9次調査 (H3年度：32-2) および第12次調査 (H2年度：84-2) で検出した溝とは別の溝と考えられる。

西肩はやや広がり、東肩は調査区中央付近の地山の高まりで判然としないが、調査区中央のサブトレンチで一



第139図 30・33番地 第1トレンチ 実測図 (S = 1/50)



第140図 30・33番地 第2トレンチ 実測図 (S = 1/50)

部を確認した。調査区南壁断面で幅2.4m、深さ1.0mを測る。断面は台形で底部は平坦（底部幅1.3m）、上層で土器が多量に出土し、下層ではほとんど出土していない。

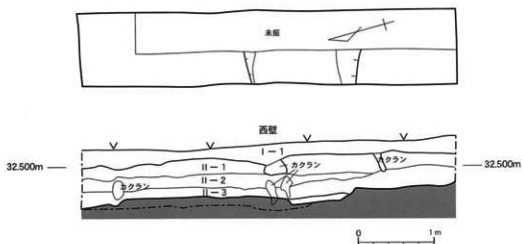
第143図 1～3は甕である。4は鉢である。5、6は広口壺の口縁部である。7も広口壺の上半であるが、口はそれほど外へは開かない。8は高杯の坏部である。9は甕の下半である。10はやや大型の壺である。口縁部を欠く。底部は厚く、丸みを帯びたレンズ状である。底部から胴部下半にかけて大きく広がり、そこから肩部にかけては緩やかに膨らみ、頸部にかけてすぼまる。最大径は肩部にあり、頸部下に列点文が施されている。当遺跡

では珍しい器形であり、外來系の土器の可能性が高い。11、12は甕の脚台である。13は壺の底部である。14は台付鉢の鉢部である。第144図15は砥石の破片である。

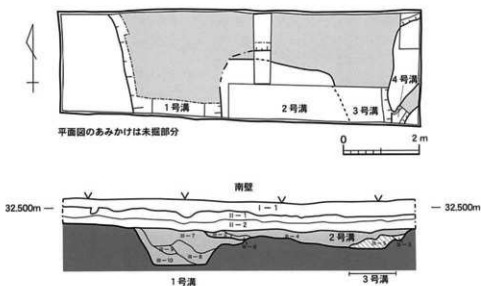
② 2号溝（第145図）

2号溝は、1号溝の東半から調査区東端近くまで広がる。南壁断面で幅5.6m、深さ0.5mを測り、東側がわずかに深くなる。

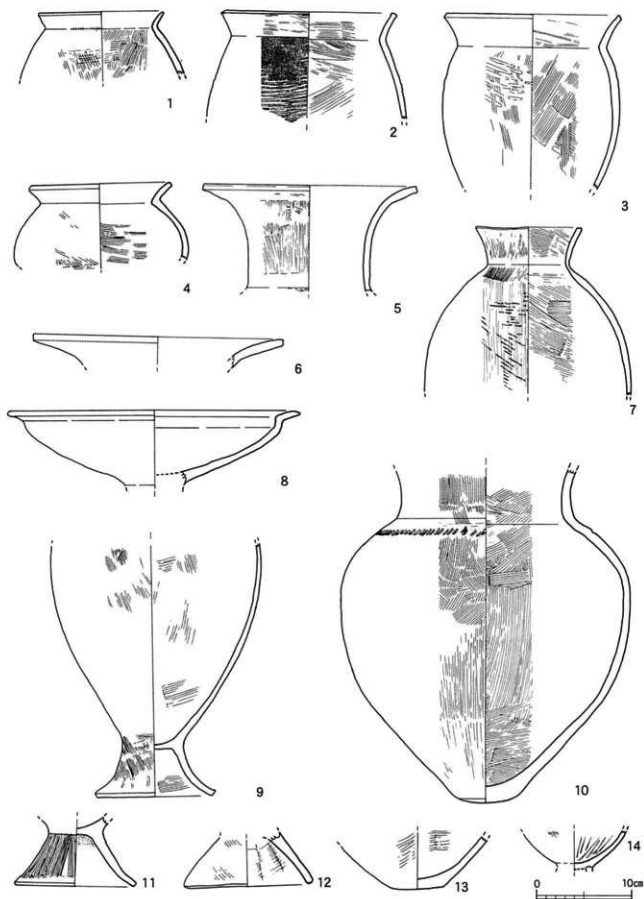
遺物は、底面から浮いた状態で、若干の土器が出土した。



第141図 30・33番地 第3トレンチ 実測図（S = 1/50）



第142図 30・33番地 第4トレンチ 実測図（S = 1/100）



第143図 30・33番地 第4トレンチ 1号溝出土遺物実測図 (S=1/4)

第145図 1は壺の口縁部である。口縁はほぼ直立し、頸部に突帯が巡る。2は小型甕の胴部である。3は壺の底部と思われる。胎土から1と同一個体の可能性がある。

③ 3号溝

3号溝は調査区東端近くに位置し、ほとんど2号溝と重複する。

遺物は、やや固まって土器が出土したため、2号溝に掘り込まれた遺構として取り上げた。

④ 4号溝

4号溝は調査区南東に位置する。幅0.35m、深さ0.15m。2号溝に上部の大半を削られている。

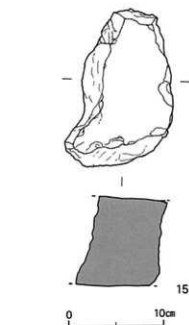
ごく一部の検出であり、遺物は出土していない。

3 小結

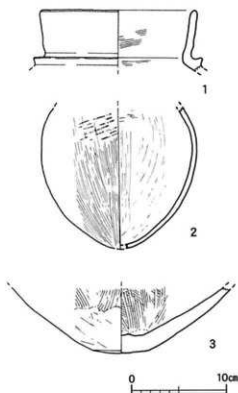
当調査の目的は、第9次調査（32-3番地）および第12次調査（84-4番地）で検出されている同一の溝が、北の縁においてどのように走っているのかを確認することであった。その結果、第4トレンチの2号溝と3号溝がその延長になる可能性が高いことが分かった。切り通し状になるのか、環壕のように台地の縁を巡るのかという問題については、当調査地点で西へ大きく屈曲する可能性が出てきた。残念ながら、他の溝と重複し、調査範囲も狭小のため、確定することができなかったが、台地の一段下の段までは切り通しではなく、溝が掘削されていたことを確認できたことは、一つの成果といえよう。

しかし、目的の溝の延長が確定できなかった点とともに、想定していなかった新たな溝（1号溝）が発見され、この溝が台地上にどのように走っていたのかが不明のままである。いずれも今後の課題として残された。

余談になるが、当調査地の地盤はほぼ礫層で、それを一部含む埋土は、非常に固く締まっていたため掘りづらく、発掘は困難を極めた。溝を掘った弥生時代当時は、十分な道具が揃えられなかったであろうが、よくぞこの固い地盤を見事に掘削したものだ、弥生人のパワーに感心させられた。



第144図 30・33番地 第4トレンチ
1号溝出土土器実測図（S=1/4）



第145図 30・33番地 第4トレンチ
2号溝出土遺物実測図（S=1/4）

第5章 科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 方保田東原遺跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、148番地第1トレンチ2号住居跡（炉内）から採取された炭化種子である。

3. 方法

肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

分析の結果、草本2の計2が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴を記す。

1) イネ *Oryza sativa* L. 果実（炭化） イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がかくぼむ。表面には数本の筋が走る。大きさは、縦4.2mm・横2.8mmである。イネ果実は、炭化した状態（炭化米）でなければ残存しない。

2) ササゲ属 *Vigna* 種子（炭化） マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長く、大きさは、それぞれ縦4.0mm・横2.5mm、縦3.9mm・横2.6mm、縦3.5mm・横2.5mmである。ササゲ属には、リョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状の形態的研究では識別は困難である。ササゲ属は、縄文時代の遺跡から散見され、弥生時代では特に九州で多く見られる。



1 イネ果実（炭化）

—— 1.0mm



2 ササゲ属種子（炭化）

—— 1.0mm



3 ササゲ属種子（炭化）

—— 1.0mm



4 ササゲ属種子（炭化）

—— 1.0mm

文献

- 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類、野生文化の研究
第2巻 生業、雄山閣出版、p. 131-139.
南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀
試料分析法、東京大学出版会、p. 276-283.
吉崎昌一 (1992) 古代雑草の検出、月刊考古学ジャーナルNo. 355、
ニューサイエンス社、p. 2-14.

第2節 方保田東原遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近期の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、148番地第1トレンチ2号住居跡、110-2番地13号住居跡、151番地第1グリッド3号溝から出土した11点の炭化材である。試料の詳細を表1に示した。

3. 方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

(図版1)

横断面: 年輪のはじめに大型の道管が、1~2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*

ブナ科 (図版2)

横断面: 中型から大型の道管が、1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面: 放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科

(図版3・4)

横断面: 中型から小型で厚壁の道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。年輪界にむけて道管の径をごく緩やかに減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では、数細胞幅で帯状に配列する。

放射断面: 道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は異性である。

接線断面: 放射組織は異性放射組織型で、1~4細胞幅である。多列部は平伏細胞からなり、単列部は直立細胞からなる。

以上の形質よりムクノキに同定される。ムクノキは本州(関東以西)、四国、九州、沖縄に分布する落葉高木で、通常高さ15~20m、径50~60cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径1.5mに達する。材はやや堅く密で強靱である。建築、器具、楽器、下駄、船、薪炭などに用いられる。

ヤマグワ? *Morus australis* Poir. クワ科

横断面: 小道管が円形の塊状に複合する。

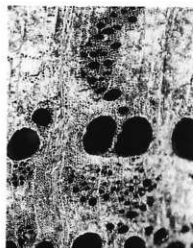
放射断面: 道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1~3細胞ぐらいは直立細胞である。

接線断面: 放射組織は上下の縁辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1~6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに類似するが、本試料は小片で、特に横断面に於いて年輪界部分が存在せず観察が困難なため、ヤマグワ?とした。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ10~15m、径30~40cmである。材は堅硬、韌性に富み、建築などに用いられる。

ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 (図版5)

横断面: 小型で角張った道管が、単独あるいは2~4個不規則に複合して散在する散孔材である。



横断面 : 0.4mm

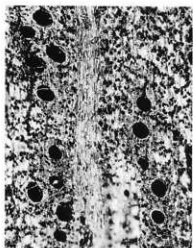


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

1. 148番地 2号住居跡 炭化物⑦ コナラ属コナラ節



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

2. 148番地 2号住居跡 北側炭化物 コナラ属アカガシ亜種



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

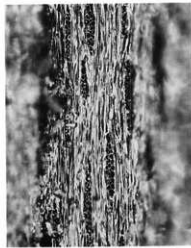
3. 148番地 2号住居跡 炭化物④ ムクノキ



横断面 : 0.2mm

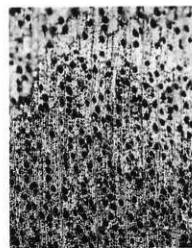


放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

4. 148番地 2号住居跡 南側炭化物 ムクノキ



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接線断面 : 0.2mm

5. 110-2番地 13号住居跡 ハイノキ属

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本くらいである。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりハイノキ属に同定される。ハイノキ属には、ハイノキ、クロバイ、サワフタギ、クロキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑または落葉性の高木または低木である。

5. 所見

分析の結果、ムクノキ6点、ハイノキ属2点、コナラ属コナラ節1点、コナラ属アカガシ亜属1点、ヤマグ

ワ? 1点が同定された。いずれも、温帯下部の暖温帯ないし温帯に分布する広葉樹であり、遺跡周辺の森林に生育していたと推定される。

文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.
- 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣出版
- 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会

第3節 方保田東原遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	151番地、3号溝	炭化物②	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric
No. 2	148番地、2号住居跡	炭化物④	酸-アルカリ-酸洗浄, ベンゼン合成	Radiometric

※Radiometricは液体シンチレーションカウンタによる β （ベータ） β 線計数法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No. 1	1970 $\pm$ 60	-27.0	1930 $\pm$ 60	交点: cal AD70 1 σ : cal AD20~130 2 σ : cal BC50~AD230	179122
No. 2	2020 $\pm$ 60	-25.6	2010 $\pm$ 60	交点: cal BC10 1 σ : cal BC60~AD60 2 σ : cal BC170~AD110	179123

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

2) δ （デルタ） $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （シグマ） σ （68%確率）と2 σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

文献

- Stuiver, M., et al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p. 1-36.

分類群		部 位	点 数
学 名	和 名		
Herb	草本		
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実（炭化）	1
<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子（炭化）	3
Total	合 計		4
備 考		同定不能炭化物＋	

第2表 方保田東原遺跡（148番地 第1トレンチ 2号住居跡出土）樹実同定結果

調査地	遺構	取上げ番号	結果（学名/和名）	
110-2番地	13号住居跡	—	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属
148番地	2号住居跡	炭化物①	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
148番地	2号住居跡	炭化物②	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
148番地	2号住居跡	炭化物③	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
148番地	2号住居跡	炭化物④	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
148番地	2号住居跡	炭化物⑤	<i>Morus australis</i> Poirét?	ヤマグワ?
148番地	2号住居跡	炭化物⑥	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
148番地	2号住居跡	炭化物⑦	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
148番地	2号住居跡	北側炭化物	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
148番地	2号住居跡	南側炭化物	<i>Aphananthe aspera</i> Planch.	ムクノキ
151番地	3号溝	炭化物②	<i>Symplocos</i>	ハイノキ属

第3表 方保田東原遺跡（H14年度調査地出土）樹種同定結果

第6章 まとめ

(1) 集落中央部で検出された大溝について

平成14年度の151番地では、弥生時代後期後半の幅3mを超える大溝が検出された。溝は後期後半から埋没が始まり、一度掘り直されたのち、終末までには完全に埋没した。埋土には大量の土器が廃棄され、それ以外にも炭化材や鉄片なども含まれていた。

151番地は遺跡全体から見ると、ほぼ中央部に位置するため、これまで検出された遺跡間縁部での溝とは、その性格を異にするものと考えられた。そのため、東側へ向かってどのように走るのかを確認するために、148番地を調査してみたが、そこでは溝の延長を検出することはできなかった。中世の溝が切っていたのか、それとも大溝自体がより北側に曲がっていたのか、現時点ではこの二つの可能性が考えられる。

これまでの調査結果も含めて、この大溝を境にして、北側と南側の遺構について見てみたい(第146図参照)。南側については調査数が少なく、151番地だけでしか比較することができない。しかし、それでも目立つのが遺構密度の薄さである。溝から南側で検出されたのは住居跡が2基であり、他の調査地と比べてその希薄さは明瞭であった。また、後期後半の時期では住居跡が1基だけとなり、溝から南側については、ある程度の空白地帯があったと推察される。

一方北側については、いくつもの調査が行われており、調査面積も広い。調査次数を列挙すると、1～5次(中村ほか1982)、10次、47次(110-2番地)がある。このうち、弥生時代後期後半とされる遺構は、1次は住居跡5基、2次が住居跡3基と土器溜まりが1基、3次が溝、4次が土器溜まり1基、5次と10次は見られず、47次は少なくとも4基の住居跡が検出されている。

このうち注目したいのが2次調査で検出されたA-1号住居跡で、鉄鍛冶遺構とされているものである(中村ほか1982)。151番地でも述べたが、大溝とこのA-1号住居跡とはわずか50mしか離れておらず、大溝から出土した非製品の鉄については、この2次調査A-1号住居跡から持ってきたものと考えられる。あわせて、溝内の大量の土器も、同様に北側の住居群からのものと思われ、土器の出土量からみて、大溝の北側には相当数の人々が生活していたと想定される。また、時期の整理が必要ではあるが、巴形銅器や小型仿製鏡などの青銅製品もこの大溝から北側に集中して見られることは注目される。

このように、溝を境にして北と南では明瞭な遺構密度の差が見受けられ、遺物についても北側において青銅製品を中心に、貴重な品が見られる。今後南側の調査確認が必要であるが、現時点では、生活及び生産の中心が、大溝より北側にあり、なおかつ、この地帯は遺跡内でもかなり重要な地であったと考えられる。

今後、この大溝の延長方向が、弥生時代後期後半にお

ける遺跡の機能的な地域分けの判断材料の一つになると期待される。

(2) 赤色顔料の精製関連遺物について

110-2番地では、16個体分という多量の内面朱付着土器片と朱(水銀朱。以下、朱という)の付着した石片が出土した。また、1号住居跡の床面からは13cm×11cmのわずかな範囲ではあるが、ベンガラが検出された(第38図)。

第13次調査で表採された棒状石片の発見以来、赤色顔料に関連する遺物について注目し、その結果、調査のたびに数点の内面朱土器片が確認されている。これまでその出土量については、それほど差が見られなかったが、今回の110-2番地の量は突出したものであった。また、接合可能なものや器形が分かるものも見られた。第68図2、9、12、15については同一個体で、裏に復原されるが、口縁部の形状や頸部の突起などからして、弥生時代後期後半期のものと考えられる。その他の土器片についても、胎土や器壁、調整などから、弥生時代終末期までには収まるものと思われる。この地点では、朱の精製が弥生時代後期後半から終末に行われたと考えられる。

あわせて、精製方法の一部も知ることができた。市毛氏によれば、この時期の辰砂精製法は浮遊選鉱で、辰砂に混じて沈下している不純物は、辰砂鍋で加熱し泡立てさせ、濡粉棒棒状の攪拌棒に付着させて取り除いたとされる(市毛1998)。第68図15ほかの内面を觀察すると、表面がヘラミガキのように光沢を持つ部分が見られる。また、外面には煤が付着しており、使用中に火を付けていたことが分かる。この土器片に見られる光沢部分は、市毛氏が指摘するように、攪拌時についた摩擦痕であると考えられる。当遺跡でも同様な方法で、精製が行われていたであろう。

石片は、完形が1点出土した。時期については、遺構の前後関係だけしか判断材料がないが、少なくとも弥生時代終末期以前と考える。

当遺跡では、これまでの調査で4点の石片が出土している。1点は、表採ながら第13次調査(平成8年度:119番地)で見つかった棒状石片である。形態から古墳時代初頭から前期の所産とされ(本田1991)、調査地からは古墳時代初頭から前期にかけての住居群跡が検出された。これ以外の3点は、集落周縁地からそれぞれ出土している。一つは、第10-2次調査で出土した(未報告)。場所は110-2番地から北西へ約100mの地点で、北側は緩やかな崖となっている。ここでは、110-2番地で出土したものと非常に良く似た形態の石片が出土している。表面全体が赤く、顔料はベンガラと推定される。もう一つは第43次調査(平成12年度:6番地)であり、当時は磨石として文章だけで紹介している(山口2004)。のちに觀察してみたところ、磨面にわずかながら朱が観察された。最後は第44次調査(平成12年度:273番地)で、ベンガラの付着したL字状石片(本田1991)が出土している

(山口2004)。

今回の資料以外は、時間的位置づけができていないが、10次調査の資料については、今回の資料と形態が似ているので、ほぼ同時期のものではなからうか。

今回の成果から、110-2番地において、弥生時代後期後半から終末に赤色顔料精製が行われていた可能性が一層高くなった。また、南西方向には鉄鍛冶関連の遺構があることから、やや広い範囲で見ると、このエリアは集落の重要産業の工房地域であったことが考えられる。

[3] 小型仿製鏡について

110-2番地で、完形の小型仿製鏡が1面出土した。完形のものでは、5例目の出土である。方保田東原遺跡では、これ以外に小型仿製鏡の破鏡が1点(第40次調査平成12年度:209番地)(中村ほか2001)、舶載鏡の破鏡が4点(破砕した方格規矩鏡を含む)も出土しており、一集落遺跡では有数の出土数にのぼる。

さて、今回出土した鏡は、第4章でも述べたが、高倉洋彰氏の分類で重圓文日光鏡系仿製鏡第1型b類、田尻義氏の分類で重圓文系小型仿製鏡第1型え類とされる。時期は後期初頭から前半に比定されており、当遺跡内では最も古い小型仿製鏡に位置づけられる。現段階では、方保田東原遺跡の集落形成の開始時期が明確に把握できていないが、今回の資料は、弥生時代終末まで続く小型

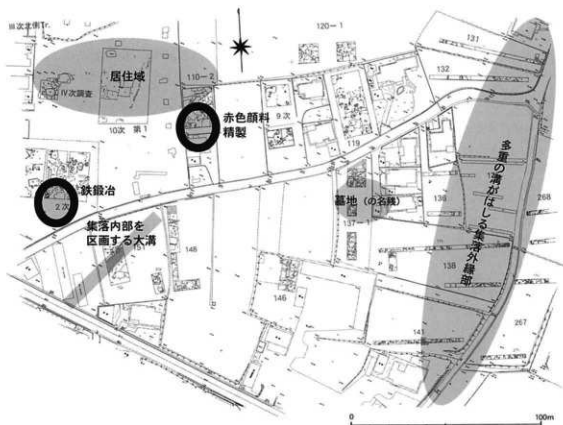
仿製鏡の入手が、かなり早い段階から始まっていたことを示すもので、貴重な発見となった。

重圓文日光鏡系仿製鏡第1型b類は、高倉氏によれば朝鮮半島産とされる。また、鍔孔の形状から見ても南氏の言うA類にあたり、朝鮮半島の影響を色濃く受けたものであることが分かる(南2005)。この鏡がどのようなルートを経て入手されたものなのか、現時点では知りえないが、朝鮮半島から直接もたらされたというよりも、北部九州を経由して持ち込まれたと考えるべきであろう。それは、国内生産が確実に開始された段階以降も弥生時代終末(重圓文日光鏡系仿製鏡第2型)まで継続して小型仿製鏡の入手ができたことが示している。ただ、田尻氏によれば(田尻2004)、小型仿製鏡の生産体制が福岡県須玖遺跡群に再集約化される後期後半以降、方保田東原遺跡の集落は主体制以外のルートから仿製鏡の入手していることになり、その点は当時の他勢力との関係を考えるうえで非常に興味深い。

[4] 居住域と墓域について

①居住域について

平成14年度と15年度に行った6調査区のうち、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての住居跡が数多く検出された。このうち、110-2番地においては、弥生時代後期後半が主体であり、146番地及び137-1番地に



第146図 方保田東原遺跡中央～東部 弥生時代後期後半頃における機能的区域想定図 (S = 1/2000)

おいては古墳時代初頭から前期にかけての住居跡が中心であった。いずれも遺構が重複しており、活発な土地利用が窺えた。一方、対照的に151番地と148番地においては、特に北側で遺構の希薄さが目立った。

以上のことから、弥生時代後期後半から古墳時代前期へ新しくなるにつれて、居住域の中心は西から東へ移動していったことが想定される。詳細は今後の調査により、明らかになっていくであろう。

②墓域について

137-1番地では、北側において弥生時代後期の墓域が確認された。検出でとどめた遺構が多いため断定はできないが、今回の土坑の規模や昭和41年の調査結果を勘案すると、甕棺を中心とした墓地であることが考えられる。なお、時期についてであるが、昭和41年調査では、橋口氏編年（橋口1979）のKⅣb式に比定される甕棺が出土しており、周囲の土坑（甕棺）もそれほど時期差はないと思われる。

また、151番地では北側で土坑墓や木棺墓が検出された。遺構の前後関係や周辺の遺物出土状況などから、その時代は弥生時代終末期から古墳時代初頭頃を当ておきたい。なお、この地点から北北西に約10～50m向かったところには、第2次調査（昭和49年度：工場拡張）で木棺墓を主体とした墓地域が検出されている（中村ほか1982）。今回検出された墓は、この墓地域の南限にあたるものと考えられる。

東西方向の広がりについては、今後の調査で明らかにしていきたい。

参考文献

- 市毛 熊 1998 『新版 東の考古学』 雄山閣
高倉洋彰 1985 「弥生時代小型仿製鏡について」『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学協会
田尻義了 2003 「弥生時代小型仿製鏡の製作地一初開小型仿製鏡の検討」『古丘学術論集』第22集 財団法人韓国文化研究振興財団
田尻義了 2001 「弥生時代小型仿製鏡の生産体制論」『日本考古学』第18号 日本考古学協会
中村幸史郎ほか 1982 『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書第2集 山鹿市教育委員会
中村幸史郎ほか 2001 『方保田東原遺跡Ⅳ』山鹿市文化財調査報告書第14集 山鹿市教育委員会
橋口達也 1979 「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 中巻 福岡県教育委員会
本田光子 1991 「石杵考」『古代』第90号 早稲田大学考古学会
南睦太郎 2005 「弥生時代小型仿製鏡の鏡および鍔孔製作技法」『鏡研究Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所・二上古代冶金研究会
山口健剛 2001 『方保田東原遺跡(5)』山鹿市文化財調査報告書第17集 山鹿市教育委員会

土器觀察表

第4表 151号地出土土器観察表

図4-45 151番出土土器観察表															
図	編	調査名	調査号	器種	口径	底径	身径	胎土	施文	外装図説	内装図説	写真	備考	実測図	
8	1	10x	P-16	鉢	12.8	5.3	10/9.2/3 淡黄褐色	灰石 雲母	良好	なで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	作りかけ、形がいびつ	11
8	2	10x	P-5	鉢	10.7	8.6	2.5/7.7/2 灰黄色	灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	作りかけ、形がいびつ	11	2
8	3	10x	P-3	台形鉢	13.0	7.9	5/9.6/6 褐色	灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	作りかけ、形がいびつ	10	2
8	4	10x	P-12	鉢	12.8	8.0	10/9.2/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	形がいびつ	9	1
8	5	10x	P-26	鉢	12.1	-	7.5/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	形がいびつ	7	4
8	6	10x	P-14	鉢	12.1	-	5/9.7/4 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	5	2
8	7	10x	P-13	鉢	-	-	10/9.7/4 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	5	3
8	8	10x	P-21	鉢	14.2	13.5	10/9.6/2 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	3	1
8	9	20x	P-7	鉢	14.6	-	10/9.7/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	2	1
8	10	20x	P-6	鉢	-	-	10/9.6/2 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	8	2
8	11	20x	P-23	鉢	16.3	-	10/9.7/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	5	1
8	12	20x	P-	鉢	15.6	-	10/9.7/4 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	4	1
8	13	20x	P-9	高坪	19.5	-	10/9.6/4 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	6	1
8	14	20x	P-10	鉢	28.2	-	7.5/9.6/1 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	6	3
8	15	20x	P-8	高坪	23.0	-	10/9.6/2 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	8	1
8	16	20x	P-31	高坪	-	-	7.5/9.6/1 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	8	1
8	17	20x	P-26	高坪	-	-	7.5/9.7/6 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	6	2
8	18	20x	2-2-37 土器	鉢	4.8	5.8	10/9.6/2 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	7	3
8	19	20x	P-19	土器	4.8	5.8	10/9.6/2 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	7	2
8	20	20x	P-4	鉢	9.2	9.2	10/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	12	2
8	21	20x	P-2	鉢	9.8	9.5	10/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	12	1
8	22	20x	P-20	鉢	-	-	10/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	7	1
8	23	20x	P-30	台形鉢	下	-	10/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	9	2
8	24	20x	P-1	台形鉢	14.4	11.6	10/9.6/3 淡黄褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	10	1
9	25	10x	P-27	鉢	27.1	46.8	5/9.6/8 赤褐色	赤褐色 灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	124	1
9	26	20x	鉢 カマド	-	25.0	21.4	7.5/9.7/8 褐色	灰石 雲母	良好	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	口縁部まで 外部一層黒褐色まで	有	内部に黒い点	13	1

図 号	通称名	P 番号	面積	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	用途	
-----	-----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

区 画	通称名	P番号	経緯	方位	口広	延床	色調	施工	部材	外装要項	内装要項	用途	備考	実測面 ㎡
22 1	1Q-2時通 中央1r		東坪	口部部	34.0	-	1007/7/3 にふい黄褐色	灰石 雲母	良好	口部部まで 外壁へつなぐ	口部部まで 外壁へつなぐ	有	壁は内装に付着	80
22 2	1Q-2時通 中央1r		東	窓部	11.7	7.7	1007/6/4 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有		84
22 3	1Q-2時通 中央1r		北主壁	壁部	-	-	1007/6/3 灰褐色	灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁の色味が浮く	90
22 4	1Q-2時通 中央1r	P-100部	付付壁	窓部	16.8	20.1	7/307/6/6 灰褐色	角閃石 灰石	良好	口部部まで 壁部部～窓部部まで 窓部部まで	口部部まで 壁部部～窓部部まで 窓部部まで	有		81
22 5	1Q-2時通 中央1r	P-104部	壁	口部部	-	-	1007/6/2/3 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	壁部部まで 壁部部まで	壁部部～窓部部まで 壁部部まで	有		85
22 6	1Q-2時通 中央1r	P-196部	壁	壁部	26.6	-	1007/6/3 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有		87
22 7	1Q-2時通 中央1r	P-203部	壁	窓部	12.6	24.8	1007/6/2/2 灰褐色	角閃石 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有		67
22 8	1Q-2時通 中央1r	P-178部	壁	上坪	20.4	-	1007/7/2/3 にふい黄褐色	角閃石 灰石	良好	口部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	73
23 1	1Q-2時通 中央1r	P-221部	壁	上坪	18.0	-	1007/6/2/3 にふい黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	80
23 2	1Q-2時通 中央1r	P-220部	壁	窓部	6.8	-	1007/7/2/3 にふい黄褐色	灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	79
23 3	1Q-2時通 中央1r	P-220部	壁	窓部	9.5	12.8	1007/6/2/2 にふい黄褐色	角閃石 灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	79
23 4	1Q-2時通 中央1r	P-223部	壁	壁部	25.0	-	1007/7/2/3 にふい黄褐色	角閃石 灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	77
23 5	1Q-2時通 中央1r	P-223部	壁	上坪	18.4	-	7/307/7/3 にふい黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有		75
23 6	1Q-2時通 中央1r	P-218部	壁	壁部	21.6	-	7/307/6/3 にふい黄褐色	灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有		80
23 7	1Q-2時通 中央1r	P-212部	壁	上坪	20.4	-	7/307/7/3 にふい黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	76
23 8	1Q-2時通 中央1r	P-222部	壁	窓部	14.6	34.1	1007/6/3 灰褐色	角閃石 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	70
23 9	1Q-2時通 中央1r	P-229部	壁	上坪	23.6	-	1007/6/3 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	66
25 1	1Q-2時通 中央1r	P-134部	壁	上坪	21.2	-	1007/6/3 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	95
25 2	1Q-2時通 中央1r	P-65部	壁	口部部 ～窓部	22.8	-	1007/6/3 灰褐色	角閃石 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	105
25 3	1Q-2時通 中央1r	P-26部	壁	上坪	20.0	-	1007/7/3 にふい黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	98
25 4	1Q-2時通 中央1r	P-113部	壁	壁部	26.2	-	1007/13/1 灰褐色	灰石	良好	壁部部まで 壁部部まで	壁部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	96
25 5	1Q-2時通 中央1r	P-36部	壁	上坪	27.0	-	1007/7/3 にふい黄褐色	角閃石 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	94
25 6	1Q-2時通 中央1r	P-128部	壁	壁部 ～窓部	-	-	1007/6/3 にふい黄褐色	角閃石 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	101
25 7	1Q-2時通 中央1r	P-37部	壁	窓部	16.8	34.2	1007/13/1 灰褐色	赤褐色 灰石	良好	口部部～窓部部まで 壁部部まで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	91
25 8	1Q-2時通 中央1r	P-136部	壁	上坪	13.4	-	1007/7/3 にふい黄褐色	赤褐色 灰石	良好	なで	口部部～窓部部まで 壁部部まで	有	壁部部あり	95

図	編	通称名	P番号	図様	部位	口徑	素材	色澤	組立	外観面状態	内観面状態	異状	備考	実測値
25	9	1G・3溝 型7c	P-70	台付鉢	下半	—	—	7.5V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	なで	断面などで 断面上位部等に入 断面などで	有		106 2
25	10	1G・3溝 型7c	P-54	鉢	突起	12.5	17.3	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口縁部～頂部まで 断面上位部～断面下位部ナメ断毛	有		93 1
25	11	1G・3溝 型7c	P-80	器台	突起	10.5	14.3	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有	つくりが粗	106 1
26	1	1G・3溝 型7c	P-143	台付鉢	胴部	13.8	—	10V97/2 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		107 1
26	2	1G・3溝 型7c	P-143	鉢	上半	24.0	—	10V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口縁部～断面下位部ナメ断毛	有		104 1
26	3	1G・3溝 型7c	P-143	鉢	胴部	—	—	10V97/2 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		107 2
26	4	1G・3溝 型7c	P-148	鉢	上半	13.2	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口縁部～断面下位部ナメ断毛	有		99 1
26	5	1G・3溝 型7c	P-148	鉢	口縁部	—	—	10V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口縁部～断面下位部ナメ断毛	有		100 1
26	6	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	下半	—	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		92 1
26	7	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	胴部	—	—	2.5V7/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		108 1
27	1	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	上半	20.4	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		18 1
27	2	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	上半	20.3	—	10V97/2 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		18 3
27	3	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	口縁部	28.4	—	10V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	口縁部～断面下位部ナメ断毛	有		26 1
27	4	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	上半	28.0	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		29 1
27	5	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	胴部	24.0	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		25 2
27	6	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	口縁部	31.0	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		20 3
27	7	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	突起	16.4	11.5	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		21 1
27	8	1G・3溝 型7c	P-141	鉢	断面	15.0	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		21 2
27	9	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	14.2	13.0	5V97/6 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		24 2
27	10	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	18.4	8.4	7.5V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		27 1
27	11	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	10.7	7.1	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		31 2
27	12	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	20.6	10.3	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		27 2
27	13	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	19.6	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		19 1
27	14	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	—	—	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		32 1
27	15	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	11.9	17.1	10V97/3 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		26 2
27	16	1G・3溝 型7c	P-2	鉢	突起	6.9	6.8	7.5V97/4 にない黄褐色	赤褐色 灰石	良好	断面などで 断面上位部等に入	有		31 1

図 番	測候名	戸番時	材料	部位	口徑	縦長	色調	胎土	断面	外観形状	内観形状	底	底電	表出箇	出
27	1区、 2区、 土層4	戸	戸	底面流孔	15.6	5.7	5YR6/6 灰色	赤褐色粒土	角好	ヘラタガキ	ヘラタガキ	有	土層	19	2
28	土層4	A-2区	横	底面次	21.7	-	5YR6/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部まで、口縁部ナナメ動毛で、 口縁部ナナメ動毛	口縁部ナナメ動毛	有	内観部に灰が混入	121	1
28	1区、 土層1	P-8	品并	底面流孔	26.4	20.3	2.5YR4/4 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	口縁部まで、外縁部まで、ヘラタガキ、 口縁部ナナメ動毛、口縁部ナナメ動毛	有	有	56	1
29	1区、 土層1	A-2区	横	底面	7.0	5.2	10YR7/4 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	115	1
29	1区、 土層1	B-2区	横	口縁部 ～ 底面	-	-	7.5YR7/4 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	115	3
29	1区、 土層1	P-7	横	底面	-	-	5YR6/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	ナナメ動毛、横動毛	有	有	122	1
29	1区、 土層1	A-2区	横	底面	-	-	7.5YR6/1 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	タタキ縁部動毛	動毛	有	有	123	1
29	1区、 土層1	B-2区	横	底面	-	-	10YR6/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	横動毛	ナナメ動毛、横動毛	有	有	122	2
29	1区、 土層1	B-1区	横	底面～ 底面	-	-	7.5YR7/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	横動毛	動毛	有	有	123	2
29	1区、 土層1	横	底面	下	-	-	10YR6/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	116	4
31	1区、 土層1	B-3区	横	上	24.0	-	5YR6/6 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面まで	口縁部まで、口縁部ナナメ動毛	有	有	53	1
31	1区、 土層1	A-3区	横	底面	13.2	3.8	7.5YR6/6 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面ヘラタガキ、 口縁部ヘラタガキ	ヘラタガキ	有	有	54	1
31	1区、 土層1	B-4区	横	底面	13.7	3.2	7.5YR6/6 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	54	2
31	1区、 土層1	B-3区	横	底面流孔	12.4	4.3	10YR6/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面ヘラタガキ	ヘラタガキ	有	有	53	3
31	1区、 土層1	A-4区	横	底面	-	-	7.5YR6/1 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	54	3
31	1区、 土層1	B-3区	横	底面流孔	14.6	3.3	5YR7/6 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	53	2
31	1区、 土層1	P-8	横	底面	-	-	10YR7/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	動毛	有	有	109	3
31	1区、 土層1	B-2区	横	底面	-	-	7.5YR7/6 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	ナナメ動毛	なで	有	有	57	3
31	1区、 土層1	横	底面	下	-	-	10YR6/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	上端まで、 口縁部～底面	なで	有	有	113	1
31	1区、 土層1	横	底面	下	-	-	10YR7/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	ヘラタガキ縁部動毛	なで	有	有	109	1
31	1区、 土層1	横	底面	下	-	-	10YR5/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	113	2
31	1区、 土層1	A-2区	横	口縁部	-	-	10YR6/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	なで	なで	有	有	57	1
31	1区、 土層1	A-1区	横	底面	18.8	-	2.5YR6/1 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部まで、口縁部ナナメ動毛	ヘラタガキ、口縁部ナナメ動毛	有	有	56	4
31	1区、 土層1	A-2区	横	底面	18.0	-	10YR6/3 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	ナナメ動毛	口縁部まで、 口縁部ナナメ動毛	有	有	57	2
31	1区、 土層1	土層1	横	下	-	-	10YR7/4 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面まで、 口縁部ナナメ動毛	なで	有	有	114	2
31	1区、 土層1	B-2区	横	底面	6.8	5.2	10YR6/2 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面まで、 口縁部ナナメ動毛	なで	有	有	115	2
31	1区、 土層1	土層1	横	下	-	-	10YR7/4 赤褐色	赤褐色粒、 赤褐色、 赤褐色、 赤褐色	角好	口縁部～底面まで、 口縁部ナナメ動毛	なで	有	有	114	1

図 号	遺跡名	戸数	面積	位置	土質	色澤	口徑	深さ	形状	外観	内観	説明	備考	頁数
31	遺跡外	A-4区	下井	—	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	—	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	55 1
31	遺跡外	A-2区	下井	—	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	—	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	55 3
31	遺跡外	A-2区	下井	—	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	—	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	59 5
31	遺跡外	B-3区	下井	—	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	—	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	60 5
31	遺跡外	B-2区	下井	—	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	—	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	60 4
32	1 2号柱	P-9	遺跡	172	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	172	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	116 1
32	2 2号柱	P-37	遺跡	120	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	120	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	117 2
32	3 2号柱	P-2	遺跡	98	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	98	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	119 1
32	4 2号柱	P-14	遺跡	92	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	92	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	117 3
32	5 2号柱	P-12	遺跡	92	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	92	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	119 2
35	1 2号柱	P-30	遺跡	178	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	178	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	117 1
35	2 2号柱	P-19	遺跡	116	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	116	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	116 3
35	3 2号柱	P-27	遺跡	306	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	306	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	116 2

第5表 110-2番地出土土器調査表

39	1 1号柱	P-7	遺跡	210	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	210	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	2 1
39	2 1号柱	P-7	遺跡	210	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	210	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	4 1
39	3 1号柱	P-8	遺跡	210	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	210	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	3 2
39	4 1号柱	P-3	遺跡	246	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	246	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	3 1
39	5 1号柱	P-12池	遺跡	189	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	189	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	1 1
39	6 1号柱	P-15池	遺跡	189	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	189	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	4 2
39	7 1号柱	P-15池	遺跡	189	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	189	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	2 3
39	8 1号柱	P-1	遺跡	189	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	189	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	2 2
40	1 2号柱	P-1	遺跡	189	赤褐色土 灰褐色土	赤褐色土 灰褐色土	189	—	円形	なで	遺跡跡地にて なで	有	無	5 1

図	番	通称名	位置	形状	口徑	材質	色澤	動上	備記	外観図	内観図	写真	備考	実測値	注
42	1	3号柱	口樋部 ～型部	152	7.5YR6/3 深褐色	鉄石 雲母	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで 口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		6	1
42	2	3号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部まで	口樋部まで	有			7	1
42	3	3号柱	口樋部 ～型部	145	7.5YR6/3 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		6	2
42	4	3号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		7	2
42	5	3号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		6	3
42	6	3号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		7	3
44	1	5号柱	口樋部 ～型部	150	10YR6/4 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		8	1
44	2	5号柱	口樋部 ～型部	220	10YR6/3 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		8	5
44	3	5号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		8	2
44	4	5号柱	口樋部 ～型部	-	7.5YR6/4 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		8	3
44	5	5号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		8	4
45	1	8号柱	口樋部 ～型部	-	7.5YR6/4 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		9	1
45	2	8号柱	口樋部 ～型部	-	5YR6/6 褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		9	2
45	3	8号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/3 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		9	5
45	4	8号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		9	3
47	1	10号柱	口樋部 ～型部	-	5YR6/6 褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	1
47	2	10号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/2 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	3
47	3	10号柱	口樋部 ～型部	-	7.5YR6/4 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	2
48	1	11号柱	口樋部 ～型部	122	4G/1 黒色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		11	1
50	1	13号柱	口樋部 ～型部	278	10YR6/4 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		14	1
50	2	13号柱	口樋部 ～型部	218	10YR6/4 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		17	1
50	3	13号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/4 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		17	2
50	4	13号柱	口樋部 ～型部	264	10YR6/4 灰褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		12	2
50	5	13号柱	口樋部 ～型部	256	2.5Y/4/2 暗褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		12	1
50	6	13号柱	口樋部 ～型部	150	7.5YR6/4 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	1
50	7	13号柱	口樋部 ～型部	9.8	10YR6/3 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	1
50	8	13号柱	口樋部 ～型部	-	10YR6/3 深褐色	赤褐色 鉄石	良好	口樋部まで	口樋部タタキを取ナナメ動毛	口樋部まで	口樋部まで	有		10	1

図	地	通称名	P番号	地種	形状	口径	色調	土質	構成	外観的特徴	内観的特徴	写真	備考	測点	地
56	10	10号坑	P-20	溝	ほぼ正方形	13.0	25%/2	角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂混在後で、上部～一部砂ナメ砂も	有		27	1
56	11	10号坑	P-29	溝	口縁部	32.0	-	10%/0/3 炭石 炭石	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も	有		30	1
56	12	10号坑	P-24	溝	方形	23.2	10%/0/3	角礫石 炭石 石英	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も混在、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有	口縁部に3つの砂孔、口縁部がややひづ	29	1
56	13	10号坑	P-21	溝	上平	19.0	-	非角礫石 角礫石 石英	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有	結晶の色調がやや赤み	26	1
56	14	10号坑	P-35	溝	下平	-	10%/7/3 赤褐色 角礫石 炭石	良好	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		28	1
57	1	1号土坑	57	口縁部	26.0	-	73%/0/3 赤褐色 角礫石 炭石	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		32	4
57	2	8号土坑	57	口縁部	30.4	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		33	1
57	3	1号土坑	57	口縁部	20.0	-	10%/7/4 角礫石 炭石	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		32	1
57	4	4号土坑	57	口縁部	-	-	10%/0/2 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		34	2
57	5	10号土坑	57	口縁部	-	-	10%/7/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		34	3
57	6	8号土坑	57	口縁部	-	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		33	2
57	7	1号土坑	57	口縁部	-	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		32	2
57	8	10号土坑	57	口縁部	-	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		34	1
57	9	2号土坑	57	口縁部	-	-	5%/6/2 赤褐色 角礫石 炭石	良好	ナメ砂も	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		32	3
57	10	8号土坑	57	口縁部	～一部	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		33	3
57	11	14号土坑	57	口縁部	-	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		32	5
57	12	8号土坑	57	口縁部	-	-	10%/7/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		33	4
58	1	溝	58	上平	12.4	-	73%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		31	1
58	2	溝	58	口縁部	12.0	-	73%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	口縁部上～一部砂ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		31	2
61	1	1号力マド	P-28地	溝	上平	24.0	-	10%/0/2 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		36	1
61	2	1号力マド	P-29地	溝	方形	15.3	13.3	10%/7/4 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		36	2
61	3	1号力マド	P-1地	溝	上平	20.4	-	10%/0/3 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有	形はコップ形で、ややひづ、底面に亀裂目あり	36	3
61	4	1号力マド	P-24	土留め溝	方形	7.0	5	角礫石 炭石 石英 雲母	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	有		62	特
62	1	2号力マド	P-6	溝	口縁部	15.0	25	赤褐色 角礫石 炭石	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有		37	2
62	2	2号力マド	P-1地	溝	上平	24.4	-	赤褐色 角礫石 炭石 雲母	良	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有	寄れる砂層、砂層が厚い	38	1
63	1	通称外	A-2区	溝	上平	11.2	-	10%/7/4 角礫石 炭石 石英 雲母	良好	なで	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	有		53	2
63	2	通称外	B-4区	溝	口縁部	13.0	8.0	角礫石 炭石 石英	良好	口縁部で、口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も混在	口縁部ナメ砂も、口縁部下～一部砂ナメ砂も	有	類似している、通称外側部はヘラタズリが横	62	1

図 号	遺構名	P 番号	材料	部位	口径	経路	色調	土質	構成	外観説明	内観説明	面積	位置	備考	実測図 No
63	3 遺構外	C-1区	土	底面	13.3	0.3	25Y6/3 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	口縁部まで 断面がタタキ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	無	断面がタタキが強い	65 2
63	4 遺構外	C-1区	土	側面	-	-	10Y6/3 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	断面部まで 断面がタタキ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	56 1
63	5 遺構外	C-2区	土	底面	11.1	122	10Y6/4 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	54 1
63	6 遺構外	A-1区	土	底面	15.4	105	25Y6/3 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	57 1
63	7 遺構外	C-2区	土	底面	14.6	93	10Y6/4 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	55 1
63	8 遺構外	C-2区	土	底面	14.0	112	25Y6/6 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	54 2
63	9 遺構外	C-2区	土	底面	18.4	87	10Y6/4 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	59 1
63	10 遺構外	C-1区	土	底面	24.8	-	25Y6/4 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	51 1
63	11 遺構外	C-1区	土	底面	24.8	-	25Y6/4 にぶい黄褐色	角石 灰石 石質 雲母	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	47 1
63	12 遺構外	B-1区	土	底面	14.6	21.4	25Y6/4 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	41 1
63	13 遺構外	P-1区	土	底面	17.4	132	25Y6/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	30 1
64	14 遺構外	A-2区	土	底面	-	-	10Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 3 3
64	15 遺構外	A-1区	土	底面	7.0	-	25Y6/2 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 3 1
64	16 遺構外	A-4区	土	底面	-	-	10Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 3 2
64	17 遺構外	A-3区	土	底面	-	-	10Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 3 5
64	18 遺構外	土	土	底面	-	-	10Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 3 1
64	19 遺構外	A-1区	土	底面	9.8	41	10Y6/7/1 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	61 1
64	20 遺構外	B-1区	土	底面	15.6	48	10Y6/6/2 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	63 3
64	21 遺構外	A-2区	土	底面	10.0	-	25Y6/7/1 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	63 4
64	22 遺構外	B-1区	土	底面	-	-	10Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 2
64	23 遺構外	A-4区	土	底面	13.2	-	25Y6/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 2
64	24 遺構外	B-1区	土	底面	13.9	51	10Y6/7/6 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 2
64	25 遺構外	B-1区	土	底面	15.9	29	10Y6/6/6 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 1 1
64	26 遺構外	B-1区	土	底面	15.8	53	10Y6/6/2 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	60 1 1
64	27 遺構外	B-1区	土	底面	26.6	56	25Y6/4 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	62 2
64	28 遺構外	C-1区	土	底面	15.5	151	10Y6/6/3 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	40 1
64	29 遺構外	B-1区	土	底面	-	-	25Y6/2 にぶい黄褐色	赤褐色 角石 灰石 石質	良好	口縁部まで 断面がタタキ後アスリ 断面～断面がタタキ後アスリ	断面部まで	有	有	断面がタタキが強い	45 2

図	No.	遺構名	P番号	材料	部位	口径	断面	色調	地土	構成	外観形状	内観形状	取	備考	実測図
66	1	遺構外	B-3区	埴	口縁部	18.0	7.5YR6/2 灰褐色	灰石 石灰	良好	口縁部まで 内部ナマメ砂も一部へうまき	口縁部まで 内部ナマメ砂も一部へうまき	四方角のへうまき (地蔵有り)	有	内蔵赤土層(灰)	66-1
66	2	遺構外	C-4区	埴	上平	26.6	10YR7/3 にふい黄褐色	角礫石 灰石 石灰	良好	なで	ナマメ砂も? 使用による厚減で、へうまきのように変形をもつ	ナマメ砂も? 使用による厚減で、へうまきのように変形をもつ	有	内蔵赤土層(灰)	66-2
66	3	遺構外	B-4区	埴	口縁部	-	10YR8/3 濃黄褐色	灰石	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-3
66	4	遺構外	B-4区	埴	口縁部	-	10YR7/1 黒色	赤褐色砂 角礫石 灰石 石灰 雲母	良好	なで	ナマメ砂も	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-4
66	5	遺構外	B-4区	埴	口縁部	-	7.5YR6/2 灰褐色	石灰	良好	なで	ナマメ砂も	なで	有	内蔵赤土層(灰)	66-5
66	6	遺構外	A-4区	埴?	側部	-	10YR7/2 にふい黄褐色	灰石	良好	なで	ナマメ砂も	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	66-6
66	7	遺構外	A-4区	埴?	側部	-	7.5YR8/3 灰褐色	角礫石 灰石 石灰	良好	なで	一部砂も	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	66-7
66	8	遺構外	B-2区	埴?	側部	-	10YR6/2 灰褐色	灰石 石灰	良好	口縁部・内部短砂も 内部ナマメ砂も	口縁部・内部短砂も 内部ナマメ砂も	口縁部まで 短砂→一部短砂かい砂も目	有	内蔵赤土層(灰)	66-8
66	9	遺構外	A-1区	埴?	側部	-	10YR7/4 にふい黄褐色	角礫石 灰石	良好	ナマメ砂も	ナマメ砂も	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-9
66	10	遺構外	B-3区	埴	側部	-	7.5YR6/3 にふい黄褐色	角礫石 灰石	良好	へうまき	へうまき	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	66-10
66	11	遺構外	B-2区	埴	側部	-	7.5YR7/4 にふい黄褐色	灰石 雲母	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-11
66	12	遺構外	A-3区	埴	側部	-	10YR6/3 にふい黄褐色	灰石 石灰	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-12
66	13	遺構外	B-1区	埴	側部	-	10YR6/3 にふい黄褐色	角礫石 灰石 石灰 雲母	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も? 使用による厚減で、へうまきのように変形をもつ	有	内蔵赤土層(灰)	66-13
66	14	遺構外	B-3区	埴	側部	-	10YR6/3 にふい黄褐色	角礫石 灰石 石灰 雲母	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-14
66	15	遺構外	B-3区 C-3区	埴	側部	-	10YR6/3 にふい黄褐色	角礫石 灰石	良好	短砂	短砂	ナマメ砂も	有	内蔵赤土層(灰)	66-15

図6-6 140番地出土土器観察表

76	1	1 Tr.	水鉢	口縁部	22	2.5Y7/3 濃黄褐色	確定な粘土	良好	口縁部短砂文	口縁部短砂文	なで	なで	有	内蔵赤土層(灰)	76-1
76	2	1 Tr.	土/埴 瓦質土器	口縁部	40.2	5Y7/1 灰白色	確定な粘土 灰石 石灰	良好	なで	なで	なで	なで	有	内蔵赤土層(灰)	76-2
76	3	1 Tr.	埴	側部	-	10YR7/3 にふい黄褐色	確定な粘土	良好	短砂	短砂	短砂	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	76-3
76	4	1 Tr.	土/埴 瓦質土器	側部	-	2.5Y7/1 灰白色	確定な粘土	良好	短砂	短砂	短砂	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	76-4
76	5	1 Tr.	埴	底部部	14.2	7.5YR6/1 濃黄褐色	確定な粘土	良好	なで	なで	なで	なで	有	内蔵赤土層(灰)	76-5
76	6	1 Tr.	消泡器	側部・口縁部	-	2.5Y6/2 灰褐色	確定な粘土	良好	短砂	短砂	短砂	短砂	有	内蔵赤土層(灰)	76-6
80	1	1 Tr.	埴	口縁部	11.4	7.5YR7/3 にふい黄褐色	灰石 石灰	良好	口縁部短砂文	口縁部短砂文	なで	なで	有	内蔵赤土層(灰)	80-1
80	2	2号性	土/埴 瓦質土器	上平	22	7.5YR8/4 濃黄褐色	赤褐色砂 灰石 石灰 雲母	良好	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	有	内蔵赤土層(灰)	80-2
80	3	2号性	埴	上平	14.2	10YR7/3 にふい黄褐色	赤褐色砂 灰石 石灰	良好	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	有	内蔵赤土層(灰)	80-3
80	4	2号性	埴	上平	23.6	10YR6/4 濃黄褐色	赤褐色砂 灰石 石灰 雲母	良好	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	口縁部短砂文	有	内蔵赤土層(灰)	80-4
80	5	2号性	埴	口縁部	24	10YR6/4 濃黄褐色	赤褐色砂 灰石 石灰 雲母	良好	なで	なで	なで	なで	有	内蔵赤土層(灰)	80-5

国	編	添削者	戸番号	制簿	期日	口取	色紙	製上	記載	外観状態	内装状態	写真	実測値
80	6	17c 2号柱	P-35	書	上中	18	-	赤褐色 灰石	10/98/4 灰石	口取面にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛 口取面断毛後にて 断部ナマ駒毛	有	2
80	7	17c 1号柱	P-12	高坪	坪部	21	-	赤褐色 灰石 灰石 石炭	10/98/4 ごじい1巻色	口取面にて 断部ナマ駒毛	口取面断毛後にて 断部ナマ駒毛	有	7
80	8	17c 2号柱	P-7	高坪	口取部	16.8	-	赤褐色 灰石 灰石 石炭	10/98/4 透黄褐色	口取面にて 坪部断毛後にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 坪部断毛後にて 断部ナマ駒毛	有	9
80	9	17c 2号柱	P-16	台付柱	断部次	20.6	-	灰石 石炭	10/98/3 雲母	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	有	7
80	10	17c 2号柱	P-64c	台付柱	断部次	23.5	13	赤褐色 灰石 灰石 石炭 雲母	10/97/3 透黄褐色	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	有	8
80	11	17c 2号柱	P-7	坪	上中	17	-	灰石 石炭	10/98/4 石炭 雲母	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	有	9
80	12	17c 2号柱	P-29c	坪	表部	19.2	9.9	灰石 灰石 灰石 石炭 雲母	10/97/4 ごじい1巻色	口取面にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛後にて 断部ナマ駒毛	有	10
80	13	17c 2号柱	P-33c	坪	断部次	18.8	-	灰石 石炭	10/98/2 灰褐色	断毛後にて 断部ナマ駒毛	断毛後にて 断部ナマ駒毛	有	10
80	14	17c 2号柱	P-15	壁	上中	18.2	-	赤褐色 灰石 灰石 石炭 雲母	10/98/3 透黄褐色	口取面にて 断部ナマ駒毛 口取面断毛のため断部 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛 口取面断毛のため断部 断部ナマ駒毛	有	2
80	15	2号柱	P-20	壁	上中	15.4	-	赤褐色 灰石	10/98/3 透黄褐色	口取面にて 断部ナマ駒毛 口取面断毛のため断部 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛 口取面断毛のため断部 断部ナマ駒毛	有	2
80	16	2号柱	17c	不明	不明	-	-	灰石 石炭	7.5/95/2 断部	断部ナマ駒毛 断部ナマ駒毛	断部ナマ駒毛 断部ナマ駒毛	有	4
80	17	2号柱	P-13	台付柱	断部次	7.4	5.8	灰石 石炭	10/97/4 ごじい1巻色	口取面にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛	有	11
80	18	17c 2号柱	P-31	壁	下中	-	-	灰石 石炭	2.5/95/6 断部	口取面にて 断部ナマ駒毛	口取面にて 断部ナマ駒毛	有	3
80	19	17c 2号柱	P-4	壁	下中	-	-	赤褐色 灰石 灰石 石炭 雲母	10/98/1 灰褐色	断部にて 断部ナマ駒毛	断部にて 断部ナマ駒毛	有	3
80	20	17c 2号柱	P-27	壁	下中	-	-	灰石 灰石	10/98/3 透黄褐色	断部にて 断部ナマ駒毛	断部にて 断部ナマ駒毛	有	3
80	21	2号柱	17c	壁	下中	-	-	灰石 灰石	10/98/3 ごじい1巻色	断部にて 断部ナマ駒毛	断部にて 断部ナマ駒毛	有	11
80	22	2号柱	17c	高坪	断部	-	-	赤褐色 灰石	7.5/98/5 断部	断部にて 断部ナマ駒毛	断部にて 断部ナマ駒毛	有	9
80	23	1号柱	P-99	書	口取部	12	-	灰石 灰石	10/97/6 明黄褐色	口取部断毛 断部ナマ駒毛	口取部断毛 断部ナマ駒毛	有	14
80	24	6号柱	P-90	書	口取部	-	-	灰石 石炭	10/98/4 雲母	口取部断毛 断部ナマ駒毛	口取部断毛 断部ナマ駒毛	有	14
80	25	17c 6号柱	P-76	書	上中	18.2	-	灰石 灰石	2.5/97/4 透黄褐色	口取部断毛 断部ナマ駒毛	口取部断毛 断部ナマ駒毛	有	14
80	26	17c 4号柱	P-80	壁	下中	-	-	赤褐色 灰石 灰石 石炭	10/97/3 ごじい1巻色	断部断毛 断部ナマ駒毛	断部断毛 断部ナマ駒毛	有	13
80	27	6号柱	P-96	書	断部次	16.6	-	灰石 灰石 灰石 石炭 雲母	10/98/2 透黄褐色	口取部断毛 断部ナマ駒毛	口取部断毛 断部ナマ駒毛	有	12
84	1	17c 通部外	書	書	表部	12.6	9.8	灰石 石炭	5/96/8 透黄褐色	断部断毛 断部ナマ駒毛	断部断毛 断部ナマ駒毛	有	20
84	2	17c 通部外	P-17	壁	断部	13.5	12.9	灰石 灰石 灰石 石炭 雲母	10/97/4 ごじい1巻色	断部断毛 断部ナマ駒毛	断部断毛 断部ナマ駒毛	有	20
84	3	通部外	書	壁	上中	17	-	灰石 石炭	2.5/4/2 断部次	断部断毛 断部ナマ駒毛	断部断毛 断部ナマ駒毛	有	19
84	4	17c 通部外	台付柱	断部	断部	12	6.5	灰石 灰石 灰石 石炭 雲母	10/97/2 ごじい1巻色	断部断毛 断部ナマ駒毛	断部断毛 断部ナマ駒毛	有	20

図	地	透視地	P番号	面積	方位	色調	地質	地質	外観形状	内観形状	注	備考	図	
84	5	17c	P-100	138.45	東面	5976/6 黄色	良好 石灰	良好	口縁部まで 体部と色タタキを境	なで	有	無	22	1
84	6	17c	P-81	18.6	上	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部まで 体部と色タタキを境 体部下段まで	なで	有	無	21	1
84	7	17c		-	下	5976/6 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	体部下段部から体部まで 体部ナナメ斜めまで	角閃石下段まで 体部ナナメ斜めまで	有	有	18	1
84	8	17c		112.34	東面	5977/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	なで	なで	有	有	23	2
84	9	17c	P-10	-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	ナナメ斜め	体部も、ナナメ斜め	有	有	24	2
84	10	17c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	工具によるなで	体部も	有	有	24	3
84	11	17c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	なで	体部も	有	有	22	3
84	12	17c		-	東面	2507/4 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	なで	なで	有	有	17	1
84	13	17c	P-12	174.28	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部まで 体部と色タタキ 体部下段部まで	口縁部まで 体部と色タタキ 体部下段部まで	有	有	19	2
84	14	17c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	なで	なで	有	有	33	2
84	15	17c		6.29	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	ヘラミガキ	なで	有	有	33	1
84	16	17c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	体部	体部	有	有	24	4
84	17	17c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	ナナメ斜め	ナナメ斜め	有	有	25	1
84	18	17c		5	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	なで	なで	有	有	25	3
84	19	17c		2.31	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	体部	体部	有	有	24	5
85	20	17c		13	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	ナナメ斜め	ナナメ斜め	有	有	24	5
89	1	27c	P-7	13	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	26	2
89	2	27c	P-10	14.4	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	26	3
89	3	27c	P-12	14.2	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	27	2
89	4	27c	P-1	14.2	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	26	1
89	5	27c	P-4	-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	26	2
89	6	27c	P-6	12.6	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	26	1
89	7	27c	P-2	20.2	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	27	1
90	1	27c		11.7	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	32	1
90	2	27c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	32	3
90	3	27c		25	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	32	2
90	4	27c		-	東面	1097/7 角閃石 灰石 におい黄褐色	良好 灰石 良好 灰石 良好 灰石	良好	口縁部	口縁部	有	有	30	1

図 号	測線名	P 番号	柱種	方位	口徑	距離	色調	地 質	形成	外観部位置	備考	実測図
90 5	27c 5 測線外	P-1	1 号柱	変形	10.6	6.5	7.5YR7/4 にふいじ色色	角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	30 2
90 6	27c 6 測線外		2 号柱	変形	22.8	7	5YR6/8 暗赤褐色	角閃石 緑石 石英	良好	で		31 1

第 7 表 146番地出土土器観察表

96 1	1 号柱	P-50	変形	上 半	28.6	7.5YR6/4 にぶい褐色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	12 1
96 2	1 号柱	P-16	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	8 4
96 3	1 号柱	一様	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	2 1
96 4	1 号柱	P-14	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	4 2
96 5	1 号柱	P-14	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	4 1
96 6	1 号柱	P-13	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	6 1
96 7	1 号柱	P-3	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	7 1
97 8	1 号柱	P-43	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	10 1
97 9	1 号柱	小型丸蓋	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	9 1
97 10	1 号柱	P-4	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	5 3
97 11	1 号柱	P-6	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	8 2
97 12	1 号柱	P-32	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	5 2
97 13	1 号柱	P-8	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	9 2
97 14	1 号柱	P-1	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	8 1
97 15	1 号柱	P-20	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	10 2
97 16	1 号柱	P-22	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	8 3
97 17	1 号柱	P-17	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	9 4
97 18	1 号柱	P-19	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	3 1
97 19	1 号柱	P-2	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	3 2
97 20	1 号柱	P-5	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	2 2
97 21	1 号柱	P-34	変形	口徑部	16.6	10YR6/2 灰白色	赤褐色 角閃石 緑石 石英	良好	口徑部まで 黒部ナマクホルム 黒部ヘラクスリ	黒部ナマクホルム	5 1

図	番	選別名	P番号	経緯	方位	口径	製品	色調	鉱土	構成	外縁形状	内縁形状	形状	備考	集約部	地
97	22	1号柱	P 47	高坪	柱部	-	7.5YR5/4 透黄褐色	-	赤褐色 灰石	良好	片部まで埋へうミナギ 柱部へうミナギ	片部ナメ砂も 柱部まで	圓	断面に2つの透孔	10	3
97	23	1号柱	P 45	台付鉢	下半	-	10YR5/4 灰褐色	-	赤褐色 灰石 石膏 雲母	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も 断面透黄褐色	圓	断面に透黄褐色が埋まっている	11	2
97	24	1号柱	P 38	高坪	断面	-	10YR5/4 透黄褐色	-	赤褐色 灰石	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3つの透孔	9	3
97	25	1号柱	P 25	台付鉢	下半	-	5YR5/4 暗褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3つの透孔	11	1
97	26	1号柱	P 44	盤	突起	15.6 15.6	7.5YR5/1 灰白色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	口部埋んで 断面まで被埋する人型部 断面ナメ砂も埋んで	口部埋んで 断面まで被埋する人型部 断面ナメ砂も埋んで	円	断面に3本の透孔	1	1
98	27	1号柱	P 21	盤	口部	-	10YR5/4 透黄褐色	-	灰石 雲母	良好	なし	なし	圓	断面に3本の透孔	1	2
98	28	1号柱	一括	横成柱土塊	-	-	5YR5/2 灰褐色	-	-	良好	-	-	-	-	1	3
98	29	1号柱	一括	横成柱土塊	-	-	5YR5/4 にふいふ褐色	-	-	良好	-	-	-	-	1	4
99	1	2号柱	P 6	盤	上半	16	10YR5/4 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	口部埋んで 断面ナメ砂も埋んで	口部埋んで 断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	13	1
99	2	2号柱	一括	高坪	断面	28 28	10YR5/3 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	15	2
99	3	2号柱	一括	盤	上半	15.6 15.6	10YR5/3 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	14	1
99	4	2号柱	一括	鉢	口部	16 16	10YR5/2 にふいふ褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	14	2
99	5	2号柱	一括	高坪	柱部	-	7.5YR7/6 暗褐色	-	赤褐色 灰石 雲母	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	15	3
99	6	2号柱	一括	盤	断面	-	10YR5/3 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	15	1
99	7	2号柱	P 1	盤	断面	-	10YR5/2 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	13	2
101	1	3号柱	P 4	土器五	突起	-	10YR7/3 にふいふ褐色	-	灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	16	3
101	2	3号柱	P 1	盤	断面	-	10YR5/3 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	16	2
101	3	3号柱	P 3	台付鉢	断面	-	10YR7/4 にふいふ褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	16	1
102	1	7号柱	P 1	ミニチュア 土器(鉢)	突起	5.6 5.6	10YR5/2 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	16	4
103	1	12号柱	P 1	盤	断面	-	2.5YR5/6 暗赤褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	44	1
104	1	11号柱	P 12	ミニチュア 土器(鉢)	下半	-	10YR7/3 にふいふ褐色	-	灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	18	4
104	2	11号柱	P 4	鉢	下半	-	10YR7/4 にふいふ褐色	-	灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	18	2
104	3	11号柱	P 9	高坪	柱部	-	10YR5/3 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	18	3
104	4	11号柱	P 14	盤	上半	18 18	10YR5/2 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	18	1
104	5	11号柱	P 5	盤	上半	18.8 18.8	10YR5/2 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	17	1
104	6	11号柱	P 8	盤	突起	18.8 18.8	10YR5/2 透黄褐色	-	赤褐色 灰石 石膏	良好	断面ナメ砂も埋んで	断面ナメ砂も埋んで	圓	断面に3本の透孔	43	1

図 号	測線名	P 番号	経度	緯度	位置	地質	外観	内観	断面	備考	集積	
105	13号線 A-1区	P-2	109°56'	19°56'	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有		45	2
105	13号線 A-1区	P-6はか	109°56'	19°56'	上	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	47	2
105	13号線 A-1区	P-1	109°56'30"	19°56'30"	上	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	22	1
105	13号線 A-1区	P-9はか	109°57'30"	19°57'30"	上	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	47	1
106	1号土坑	P-1	109°57'30"	19°57'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	21	1
106	1号土坑	P-3	109°57'30"	19°57'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	19	1
106	2号土坑	P-3	109°57'30"	19°57'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	20	3
106	3号土坑	P-7	109°57'30"	19°57'30"	上	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	20	2
106	4号土坑	P-8	109°57'30"	19°57'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	20	1
110	平塚駅上り	P-36	109°57'30"	19°57'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	24	1
110	2号平塚駅上り	P-33	109°58'30"	19°58'30"	上	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	26	1
110	3号平塚駅上り	P-30	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	25	1
110	4号平塚駅上り	P-5	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	25	3
110	5号平塚駅上り	P-27	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	26	2
110	6号平塚駅上り	P-8	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	25	2
110	7号平塚駅上り	P-15	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	27	1
110	8号平塚駅上り	P-15	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	32	1
110	9号平塚駅上り	P-24	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	31	2
110	10号平塚駅上り	P-21	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	23	1
110	11号平塚駅上り	P-21	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	32	3
110	12号平塚駅上り	P-21	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	27	2
110	13号平塚駅上り	P-11	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	31	4
110	14号平塚駅上り	P-11	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	45	1
110	15号平塚駅上り	P-11	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	38	1
110	16号平塚駅上り	P-15	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	31	3
110	17号平塚駅上り	P-15	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	46	1
110	18号平塚駅上り	P-15	109°58'30"	19°58'30"	口部部	赤褐色砂 粘土 石灰	口部部砂 口部部砂	口部部砂	有	足がはいつ	31	1

品 名	通称名	ナマモノ	状態	口徑	長さ	色澤	地土	構成	外装部仕様	内装部仕様	品目	備考	実測値	備
110 19	通称外 B-1区	P-20	横	横断	-	10YR5/2 灰白色	灰石 石灰	良好	断面に砂状物 断面でなく	断面に砂状物 断面でなく	有	無	46	2
111 20	通称外 B-1区		横	横断	-	10YR5/4 淡灰色	灰石多量	良好	断面毛	断面毛	有	内装部全体に赤色顔料付着	33	1
111 21	通称外 B-1区		不明		-	10YR7/2 にない黄褐色	灰石 石灰	良好	なで	ヘラエガキ	有	内装部付着土層	42	2
111 22	通称外 B-1区		横	横断	-	10YR7/2 にない黄褐色	赤褐色砂 灰石	良好	タタキ後ナマノ断毛	ナマノ断毛	有	内装部付着土層 外装部、断面にも付着	33	3
111 23	通称外 B-1区		横	横断	-	10YR5/2 灰白色	灰石	良好	ナマノ断毛	ヘラエガキ	有	外装部に砂状物あり	32	2
111 24	平断面上げ B-2区	P-23	縦断	縦断	4 3.5	10YR5/2 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	無	26	3
111 25	通称外 A-2区		縦断	縦断	7.4 4.0	10YR7/2 にない黄褐色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	断面毛断面でなく	有	無	30	3
111 26	通称外 B-2区		縦断	縦断	-	10YR7/2 にない黄褐色	灰石 石灰	良好	なで	なで	有	内装部に砂状物が残る	30	5
111 27	通称外 A-1区		上平		4.0	10YR7/2 にない黄褐色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	無	30	1
111 28	通称外 B-1区		下平		-	10YR4/1 灰白色	灰石 石灰	良好	なで	なで	有	無	30	4
111 29	通称外 B-1区		縦断	縦断	-	10YR5/2 灰白色	灰石 石灰	良好	なで	なで	有	無	30	5
111 30	通称外 B-2区		縦断	縦断	-	10YR7/2 にない黄褐色	灰石 石灰	良好	なで	なで	有	無	42	1
111 31	通称外 A-2区		縦断	縦断	-	10YR5/2 灰白色	灰石 石灰	良好	-	-	有	断面毛欠く	34	1
112 32	通称外 A-2区		縦断	縦断	4.0	5Y7/2 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好			有	断面毛 毛ミ断あり	39	4
112 33	通称外 A-2区		縦断	縦断	-	7.5Y7/1 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好	口縁部に注断1條	断面毛上に注断1條	有	無	39	3
112 34	通称外 A-2区		縦断	縦断	-	5Y7/6/1 オリブア灰色	赤褐色砂 灰石	良好		断面毛あり	有	無	39	2
112 35	通称外 A-2区		縦断	縦断	-	2.5Y5/1 オリブア灰色	赤褐色砂 灰石	良好			有	無	39	1
112 36	平断面上げ B-1区	P-8	縦断	上平	-	10YR7/4 にない黄褐色	赤褐色砂 灰石	良好	上辺まで 断面毛ヘラエガキ	断面毛ヘラエガキ	有	無	26	2
112 37	通称外 B-1区		縦断	縦断	-	10YR5/2 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	断面毛	40	3
112 38	平断面上げ A-3区	P-9	縦断	縦断	23.2	2.5YR/2 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	断面毛	26	1
112 39	通称外 A-3区		縦断	縦断	-	10Y7/2 灰白色	灰石	良好	なで	なで	有	断面毛	36	1
112 40	通称外 B-1区		縦断	上平	-	5YR5/6 赤褐色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	口縁部一断面毛断面でなく 断面毛断面毛のため不明	有	無	41	2
112 41	平断面上げ A-3区	P-1	縦断	下平	-	7.5YR5/6 赤褐色	赤褐色砂 灰石	良好	断面毛ナマノ断毛 断面毛断面毛	ヘラエガキ	有	無	29	1
112 42	通称外 A-3区		縦断	縦断	-	10YR5/6 赤褐色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	無	36	2
112 43	通称外 B-1区		縦断	断面毛	13.7 4.2	7.5YR4/1 灰白色	赤褐色砂 灰石	良好	なで	なで	有	断面毛	41	1
112 44	通称外 B-1区		縦断	下平	-	5YR3/1 赤褐色	灰石	良好	なで	なで	有	無	37	1
112 45	通称外 B-1区		縦断	下平	-	2.5YR/1 灰白色	灰石	良好	なで	なで	有	無	37	3

[illegible]

図	No	道路名	P番号	路線	部位	口位	舗装	色調	地土	完成	外観的状態	異状	備考	築設年
108	18	1号	一様	交差路	口道路	-	-	5/7/2 灰白色	暗褐色地土	良好			口道路は土路	24
109	19	2号	3区画弘	普通道	道路	-	-	7.5/6/2 灰カラー・ブ 色	暗褐色地土	良好			内路側中央に道路あり	21
120	20	3号	一様	坪	下平	-	-	7.5/6/2 灰色	暗褐色地土	良好	なで			25
129	1	2号	P-55	横断路土路	-	-	-	7.5/6/7/6 暗色	角閃石 長石	良好			ナナメ断毛	34
129	2	2号	一様	不明	側部	-	-	10/9/6/3 透気暗色	角閃石 長石	良好	昭和45年まで			34
129	3	2号	P-56	土路	-	-	-	7.5/6/5/2 灰褐色	赤褐色砂 角閃石 雲母	良好	なで			34
129	4	2号	P-60	道	口道路	174	-	10/9/7/3 にぶい黄褐色	角閃石 長石 石英	良好	口道路・側部ナナメ断毛など			34
129	5	2号	P-37	歩	上平	178	-	14/6 灰色	赤褐色砂 長石 石英	良好	なで			30
129	6	2号	P-49	道	変形	19	274	2.5/9/6/6 灰暗褐色	赤褐色砂 長石 石英	良好	口道路・側部ナナメ断毛など			33
129	7	2号	P-47地	道	上平	178	-	10/9/6/3 透気暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	口道路・側部ナナメ断毛など			31
129	8	2号	P-48	小歩道	変形路	124	93	5/9/6/8 暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	口道路・側部ナナメ断毛など			32
129	9	2号	P-42	道	上平	186	-	10/9/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	なで			33
129	10	2号	一様	道	側部	-	-	7.5/6/7/4 にぶい黄褐色	角閃石 長石 雲母	良好	側部へう断毛など			30
130	1	3号	P-4	歩	上平	124	-	12/9/6/3 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			35
130	2	2号	P-3	歩	側部	-	-	10/9/6/3 透気暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 雲母	良好	側部へう断毛など			26
130	3	2号	P-7	歩	側部	-	-	10/9/6/3 透気暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 雲母	良好	なで			26
130	4	2号	P-53	歩	側部	216	-	10/9/6/3 透気暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 雲母	良好	側部へう断毛など			26
130	5	2号	P-54	歩	側部	-	-	10/9/7/4 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 雲母	良好	側部へう断毛など			27
130	6	2号	一様	道	上平	183	-	10/9/6/3 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 雲母	良好	口道路・側部ナナメ断毛など			28
130	7	2号	P-29	歩	側部	108	-	7.5/6/6/6 暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			36
130	8	2号	P-32	道	側部	-	-	2.5/9/6/3 黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			29
130	9	2号	P-20	道	下平	-	-	10/9/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 雲母	良好	側部へう断毛など			30
131	1	1号土路	P-14	小歩道	変形	132	115	2.5/9/6/6 暗色	赤褐色砂 角閃石 長石	良好	側部へう断毛など			29
131	2	1号土路	P-16	道	変形	168	21	14/6 灰色	赤褐色砂 角閃石 長石	良好	側部へう断毛など			29
131	3	1号土路	P-15	道	上平	124	-	10/9/7/3 にぶい黄褐色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			30
131	4	2号	P-18	歩	側部	-	-	5/9/6/6 暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			36
131	5	2号土路	P-52	歩	側部	-	-	5/9/6/6 暗色	赤褐色砂 角閃石 長石 石英	良好	側部へう断毛など			39

目 録	項目名	ページ	図 説	口 注	色 票	地 主	備 考	外 部 図 説	内 部 図 説	注 記	備 考	項 目 名	項 目 名
131	2号土坑	P-51	図 説	—	57/7/1 灰白色	砂質な粘土	良好	なで	なで	内縁面に沈みあり	39	2	2
131	3号土坑	P-54	図 説	—	70/7/2 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	1	1
131	4号土坑	P-55	図 説	—	10/7/3/1 黒褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	2	2
131	5号土坑	P-60	図 説	—	5/7/6/6 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	3	3
132	1号土坑	P-61	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	4	4
132	2号土坑	P-62	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	5	5
132	3号土坑	P-63	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	6	6
132	4号土坑	P-64	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	7	7
132	5号土坑	P-65	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	8	8
132	6号土坑	P-66	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	9	9
132	7号土坑	P-67	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	10	10
132	8号土坑	P-68	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	11	11
132	9号土坑	P-69	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	12	12
132	10号土坑	P-70	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	13	13
132	11号土坑	P-71	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	14	14
132	12号土坑	P-72	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	15	15
132	13号土坑	P-73	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	16	16
132	14号土坑	P-74	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	17	17
132	15号土坑	P-75	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	18	18
132	16号土坑	P-76	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	19	19
132	17号土坑	P-77	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	20	20
132	18号土坑	P-78	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	21	21
132	19号土坑	P-79	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	22	22
132	20号土坑	P-80	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	23	23
132	21号土坑	P-81	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	24	24
132	22号土坑	P-82	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	25	25
132	23号土坑	P-83	図 説	—	23/7/8 暗褐色	赤褐色 灰褐色 粘土 石灰 礫	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	40	26	26
134	1号土坑	P-2	図 説	—	10/7/3/3 灰白色	砂質な粘土	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	53	1	1
134	2号土坑	P-3	図 説	—	10/7/3/3 灰白色	砂質な粘土	良好	なで	なで	断面で後へうミガキ	53	2	2

層 編	層名	P 番号	材料	部位	口徑	試料	色調	胎土	組成	外装図面	内装図面	高 度	備考	実測図 編
135	3C 近郊外	一括	瓦葺	口縁部	—	—	7.5V6/1 灰白色	焼成土	良好			高	口縁部は土縁	55
135	3C 近郊外	一括	瓦	底面	11.8	3.4	10V7/4 灰白色	焼成土	良好	口縁部まで 口縁部→ナメ	なで後へうとナメ	高	土縁	54
135	3C 近郊外	一括	瓦	底面	14.4	—	7.5V7/2 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→ナメ	なで	高	土縁	55
135	3C 近郊外	一括	瓦	口縁部	13	—	4V2/ 黒色	赤褐色	良好	口縁部→底面まで	なで	高	赤褐色土に土縁が 多く付着	56
135	3C 近郊外	一括	瓦	上・中	—	—	10V7/3 にぶい黄褐色	灰土	良好	不明	なで	高	瓦	56
135	3C 近郊外	一括	瓦	底面	—	—	14V/4 黄褐色	灰土	良好	底面タキまで	ナメ→胎土	高	瓦	54
135	3C 近郊外	一括	瓦	下・中	—	—	10V6/2 灰白色	灰土	良好	中位胎土まで 下位胎土まで	中位胎土より後まで	高	瓦	54
135	3C 近郊外	一括	瓦	胎土	—	—	7.5V6/2/1 灰色	赤褐色土 灰土	良好	なで	なで	高	瓦	56

第9表 30・35号出土土器図表

143	4T 1号	P-7	瓦	上・中	13.6	—	10V6/2 淡褐色	赤褐色土	良好	口縁部まで	口縁部まで	高	瓦	5
143	4T 1号	P-4他	瓦	上・中	17.8	—	10V7/3 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	3
143	4T 1号	P-5	瓦	上・中	18.4	—	7.5V6/4 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	3
143	4T 1号	P-12	瓦	上・中	15.6	—	10V6/2 灰白色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	5
143	4T 1号	P-9	瓦	口縁部	23.0	—	10V6/2 灰白色	赤褐色土	良好	口縁部まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	2
143	4T 1号	P-8他	瓦	口縁部	26.8	—	7.5V7/4 にぶい褐色	赤褐色土	良好	なで	なで	高	瓦	2
143	4T 1号	一括	瓦	上・中	11.4	—	10V6/4 淡褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	8
143	4T 1号	一括	瓦	胎土	31.6	—	10V6/2 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	10
143	4T 1号	P-6他	瓦	下・中	—	—	10V6/2 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	4
143	4T 1号	P-16	瓦	口縁部	—	—	10V7/2 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	1
143	4T 1号	一括	瓦	胎土	—	—	5V7/3 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	9
143	4T 1号	一括	瓦	胎土	—	—	5V7/3 にぶい褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	9
143	4T 1号	P-13	付付	下・中	—	—	7.5V6/6 淡褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	6
145	2号	一括	瓦	口縁部	16.2	—	5V7/6 褐色	赤褐色土	良好	口縁部まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	11
145	2号	P-3	瓦	口縁部	—	—	7.5V6/2 淡褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	12
145	2号	P-2	瓦	底面	—	—	5V7/6 褐色	赤褐色土	良好	口縁部→胎土まで	口縁部→胎土まで	高	瓦	11

鉄 観 察 表

第10表 鉄観察表

151番地									
図	No.	器 種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	実測図 No.
30	1	薄片状鉄	3号溝	2.1	0.8	0.3	0.9		32 7
30	2	棒状鉄	1号土坑	2.2	0.3	0.3	0.5	銕造鉄片側面部	33 1
30	3	薄片状鉄	3号溝	2.6	0.8	0.3	1.2	上辺は鋭利	32 6
30	4	薄片状鉄	2号土坑	2.7	1.7	0.3	3.9	厚さは均一	33 5
30	5	鏃	A-1	3.7	1.6	0.4	5.8	基部欠損	31 4
30	6	鏃	3号溝	3.3	2.4	0.3	5.8	厚さは均一	31 8
30	7	棒状鉄	3号溝	4.4	1.2	0.7	7.4	針状	32 11
30	8	棒状鉄	1号土坑	4.3	1.6	0.8	11.1		33 2
30	9	棒状鉄	2号土坑	4.8	1.7	0.8	14.9	下辺が弧をなす	33 6
30	10	棒状鉄	3号溝	5.1	1.2	0.7	9.3	幅、厚さ均一	32 10
30	11	塊状鉄	3号溝	4.4	2.9	1.2	26.1		32 12
30	12	棒状鉄	3号溝	5.0	1.5	0.6	12.1	厚さは均一	32 5
30	13	板状鉄	B-3	3.7	3.3	0.6	21.5	銕造鉄片再加工品の可能性あり	31 6
30	14	鏃	3号溝	3.0	2.6	0.3	7.8	無茎	32 9
30	15	不明鉄	B-4	5.4	2.7	0.4	12.8	溶接部あり	31 7
30	16	鏃	B-2	8.7	2.6	0.2	13.3	壳形	31 5
30	17	鏃	A-2	4.7	3.1	0.3	13.3	刀先のみ	31 3
30	18	鏃	B-2	4.5	1.2	0.6	3.5	壳形	31 2
30	19	銕造鉄片	3号溝	8.4	3.0	0.5	37.8	銕部の一方を欠く	32 8
30	20	銕造鉄片	B-2	7.2	3.5	8.7	56.4	銕部から刃部	31 1
30	21	銕造鉄片	B-2	7.2	3.5	8.7	56.4	銕部から刃部	31 1
33	1	鏃	2 Gr. 住居跡	25.0	1.2	0.5	69.5	壳形	33 4
110-2 番地									
図	No.	器 種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	実測図 No.
71	1	薄片状鉄	B-1	0.7	2.1	0.2	0.8		5 7
71	2	板状鉄	B-2	1.6	1.0	0.4	1.1		6 5
71	3	塊状鉄	C-1	2.2	1.5	0.6	3.8		5 8
71	4	鏃	B-2	3.1	1.5	0.4	2.9	基部を欠く	5 6
71	5	鏃	B-2	2.7	1.7	0.3	3.0	先端を欠く	6 4
71	6	鏃	B-3	3.8	1.1	0.5	4.3	基部端を欠く	6 3
71	7	鏃	C-1	3.9	1.5	0.4	2.5	壳形	6 1
71	8	鏃	B-2	4.8	1.5	0.4	5.6	基部端を欠く	5 9
71	9	鏃	A-3	5.7	1.5	0.3	5.1	基部端を欠く	5 3
71	10	鏃	B-4	5.6	2.0	0.5	9.5	切先を欠く	5 5
71	11	板状鉄	C-4	3.2	2.4	0.8	12.2	厚さが均一	61 5
71	12	板状鉄	A-3	3.4	2.3	0.6	10.4		61 6
71	13	板状鉄	A-1	2.8	5.0	1.2	36.9		5 1
71	14	鏃	B-2	9.8	1.1	0.4	8.8	壳形	6 6
71	15	鏃	A-2	8.4	1.3	0.9	28.4	壳形	61 2
71	16	釘	B-1	9.0	0.7	0.4	7.9		5 10
71	17	鏃	B-1	5.8	1.3	0.5	9.2	中位から切先を欠く	5 11
71	18	手鐲	A-2	4.5	2.0	0.3	8.2	半欠	61 1
71	19	手鐲	A-2	2.6	3.2	0.3	7.6	半欠	5 2
71	20	鏃	C-3	6.4	3.6	0.3	26.0	先端を欠く	6 2
71	21	刀子	C-4	4.1	1.0	3.0	4.2	切先部	61 3
71	22	不明鉄	B-2	4.8	1.0	0.5	4.2	端部が平たくなる	61 4
71	23	刀子	C-1	8.2	1.2	0.3	7.6	切先を欠く	5 12
71	24	手鐲	A-4	1.9	8.4	0.5	20.6	先端を欠く	5 4
71	25	刀子	A-2	11.5	1.3	0.4	8.5	先端を欠く。軸部曲がる。	6 7
148番地									
図	No.	器 種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	実測図 No.
86	1	棒状鉄	4区	5.8	0.7	0.3	5.8	厚さは均一。断面が長方形。	32 1
86	2	刀子片	4区	5.3	1.3	0.2	4.8	切先部、基部をともに欠く。	32 2
86	3	鏃	4区	3.7	1.3	0.3	5.5	基部のみ。断面は弧を描く。	32 3
86	4	板状鉄	5区 2号住	6.1	3.3	0.7	30.7	厚さ均一。重みがある。	32 4

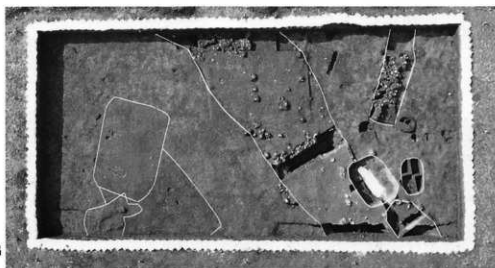
146番地										
図	No.	器 種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	実測図	No.
114	1	鏃	B-1	3.3	2.0	0.4	4.1	無茎	2	9
114	2	鏃	A-1	5.3	1.8	0.3	5.5		2	1
114	3	鏃	B-2	5.4	1.4	0.4	6.0		2	5
114	4	鏃	A-3	5.0	1.4	0.4	6.0		1	4
114	5	鏃	B-2	5.8	1.3	0.6	7.9		1	1
114	6	鏃	A-1	6.0	1.5	0.3	9.2	基部を欠く。	1	3
114	7	鏃	A-1	3.4	1.1	0.4	2.9	基部を欠く。	2	2
114	8	棒状鉄	A-1	3.9	0.6	0.7	4.3	両端を欠く。断面は正方形。	3	2
114	9	棒状鉄	A-1 試掘時	5.3	0.5	0.5	7.4	上部を欠く。	2	12
114	10	薄片状鉄	B-3	1.4	1.3	0.3	1.5	厚さ均一。	1	8
114	11	薄片状鉄	B-1	1.2	1.2	0.1	0.3	厚さ均一。薄い。	2	6
114	12	棒状鉄	B-2	2.0	0.4	0.4	0.8	両端を欠く。断面は円形。	2	11
114	13	棒状鉄	A-2	3.5	0.6	1.0	6.2	刀子の未製品か？	2	3
114	14	棒状鉄	A-1	4.5	0.5	0.5	1.7	先端は尖っている。断面は円形。	2	4
114	15	棒状鉄	B-2	3.1	1.1	0.6	3.2	断面は楕円形。	3	1
114	16	不明鉄	A-3 試掘時	3.3	1.3	0.3	3.5	刀子の未製品か？	2	13
114	17	刀子	B-1	4.7	1.0	0.4	4.9	基部を欠く。	2	7
114	18	板状鉄	A-1	3.5	2.5	0.5	7.6	厚さ均一。	2	8
114	19	鏃	B-1	3.1	2.2	0.3	4.9	半欠で磨折部も欠く。	2	10
114	20	板状鉄	A-2	3.5	1.9	0.4	4.5	平面形はひし形を呈する。	1	7
114	21	刀子？	B-2	4.6	1.7	0.3	6.5	基部と切先部を欠く。	1	2
137-1番地										
図	No.	器 種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	実測図	No.
136	1	鏃？	1 Gr4区	1.9	0.4	0.5	1.1	鏃の基部か。	3	7
136	2	鉄滓	2 Gr3区	1.8	1.3	0.6	3.6	重みがある。磁石反応なし。	4	2
136	3	薄片状鉄	1 Gr4区	2.5	1.2	0.2	1.5	三角状鉄片。厚さ均一。	3	6
136	4	薄片状鉄	1 Gr4区	2.6	0.3	1.4	2.8	厚さは均一。	3	8
136	5	小型鏃？	1 Gr4区	2.2	0.9	0.2	1.5	右端は折れ曲がる。	3	3
136	6	棒状鉄	2 Gr3区	2.7	0.7	0.3	1.2		4	1
136	7	鏃？	1 Gr3区	1.8	1.3	0.2	0.7	無形の鏃か？基部に木片が付着。	3	14
136	8	鏃	2 Gr1区	2.7	1.5	0.3	3.0	無形の鏃。完形。	3	10
136	9	鏃	2 Gr1区	3.2	1.9	0.2	2.7	無形の鏃。完形。	3	11
136	10	鏃？	2 Gr1区	2.9	1.7	0.3	3.4	鏃部か。	3	12
136	11	鏃	1 Gr1区	2.5	1.8	0.2	4.5	鏃部で先端と基部を欠く。	3	5
136	12	鏃	2 Gr3区	5.7	1.4	0.4	6.2	完形。	3	9
136	13	釘	3 Gr.	5.7	0.4	0.4	3.5	新しいものか？	4	5
136	14	棒状鉄	2 Gr2区	3.0	0.8	0.2	1.2	ねじれは古い。厚さ均一。	4	4
136	15	棒状鉄	1 Gr4区	3.1	0.4	0.4	0.5	断面は円形。	3	4
136	16	手鐲	2 Gr3区	3.2	2.9	0.3	8.2	半欠。	3	13
136	17	鏃	3 Gr.	4.4	2.0	0.3	5.2	完形。上辺に木片がわずかに残る。	4	6
136	18	板状鉄	3 Gr.	4.6	4.2	0.5	31.5	錆通か？厚さは均一。重みがある。	4	7
136	19	板状鉄	2 Gr2区	3.2	2.5	0.4	9.9	厚さは均一。平面は綺麗な長方形。	4	3

測定値単位cm 重さ単位g

写 真 图 版



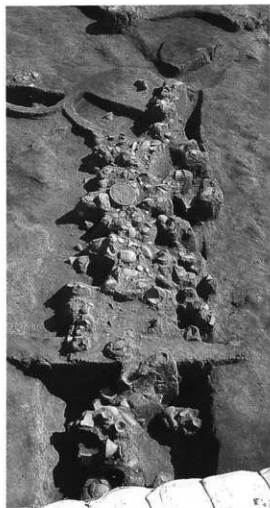
151番地調査区
(右が北)



第1グリッド検出
(上空から)



第1グリッド検出
(北側から)



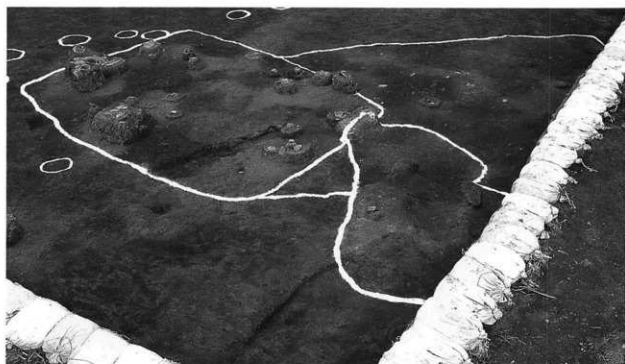
第1グリッド 1号溝



第1グリッド 土器群



第1グリッド 1号溝 土層



第1グリッド 2号、3号住居跡



3号溝 中央サブトレンチ

上段：上層遺物出土状況

中段左：北側

中段右：上層遺物出土状況

下段：溝一部完掘





第1グリッド
3号溝東側サブトレンチ(上)
と遺物出土状況(右)



第1グリッド調査区北側
(東側から)





第1グリッド 1号土坑



第2グリッド
上空から



第2グリッド住居跡



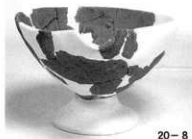
8-1



20-10



22-4



20-8



20-7



21-14



21-17



22-7



26-5



21-13



第1グリッド 3号溝出土遺物



第1グリッド 2号住居跡出土遺物



8-23



8-20



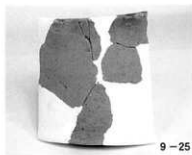
8-12



ヘラ描き



8-8



9-25



9-24



8-3



不明鉄・銅製品



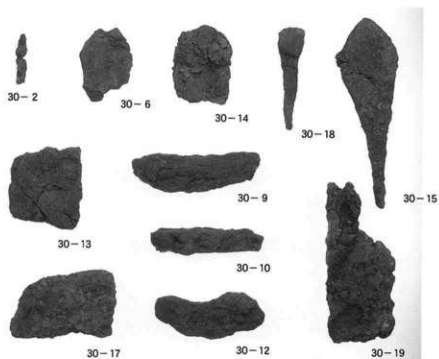
31-8



31-9



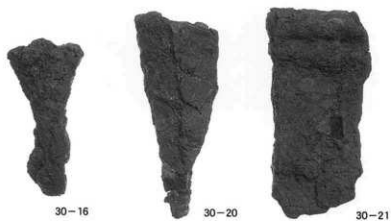
31-7



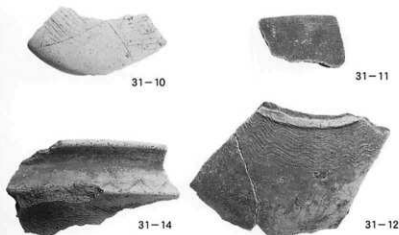
第1グリッド 鉄



第2グリッド 鉄



第1グリッド 鑄造鉄



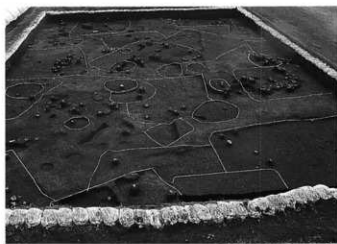
鋸歯文のある土器片ほか



110-2 番地 調査区遠景 西側上空から



遺構検出状況



遺構検出状況 北から

B-1区、C-1区 北から



2号住居跡 北から



C-1区 1号住居跡、18号住居跡ほか



A-1、B-1区 東から



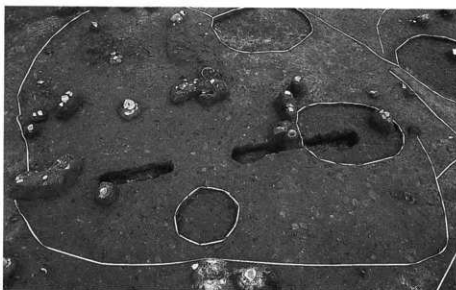
6号住居跡



13号住居跡



15号住居跡



11号住居跡



18号住居跡 遺物出土状況



鏡出土状況



滑石製紡錘車出土状況



勾玉出土状況



61-1



61-3



39-5



50-11



50-6



50-6 内器面



18号住居跡出土遺物



55-4



56-7



56-10



55-1



56-13



56-12



64-26



64-19



63-9



64-23



63-7



63-8



64-28



63-5



63-12



63-13



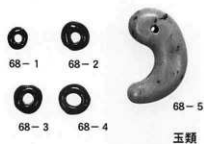
天面



64-17



64-25



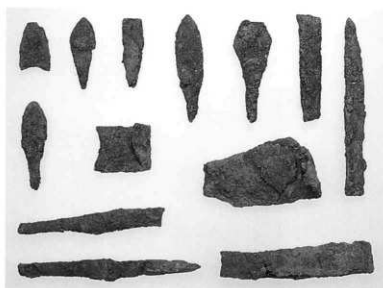
玉類



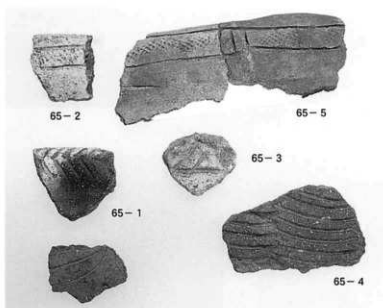
小型仿製鏡



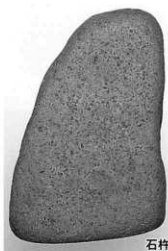
紡錘車



鉄



縄文土器



左側面



背面



右側面



前面



148番地 調査区全景



第1トレンチ 1～5区



第1トレンチ 1号溝 東から



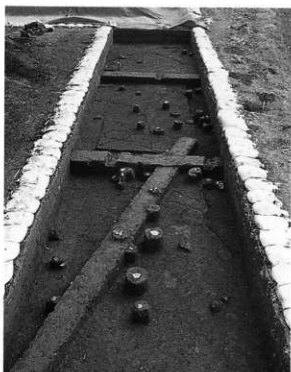
第1トレンチ 2号住居跡 東から



第1トレンチ 2号住居跡 遺物出土状況



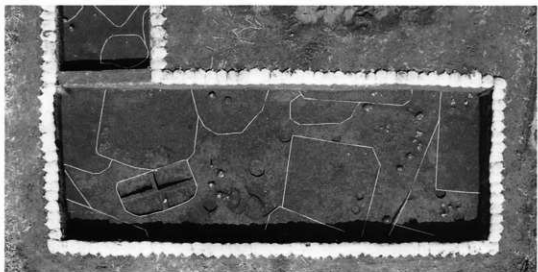
第1トレンチ 6～8区



第1トレンチ 6～8区 北から



第1トレンチ 6～8区 東から



第2トレンチ



80-12



80-10



83-5



81-23



85-20



76-2



76-1



76-6



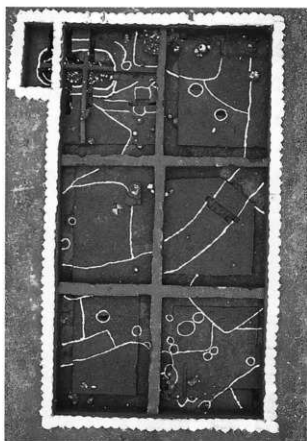
76-4



76-5



146番地 調査区（北東から）



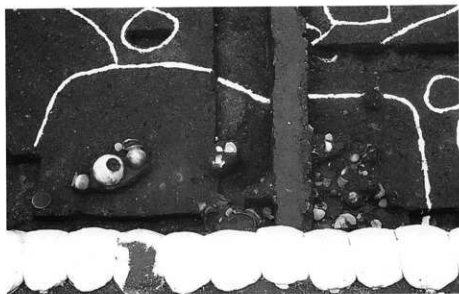
遺構検出状況



遺構検出状況



A-3区南から



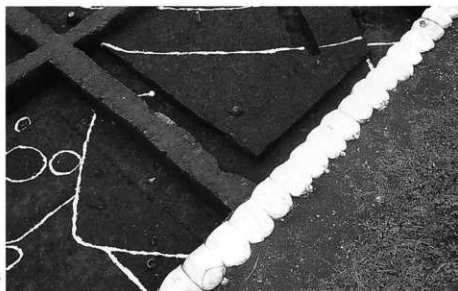
1号住居跡 北から



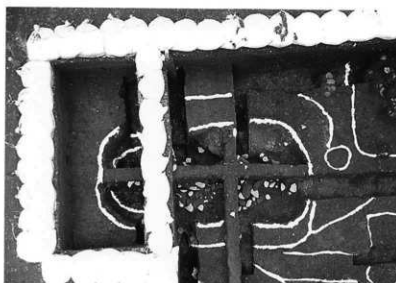
1号住居跡 遺物出土状況



1号住居跡 遺物出土状況



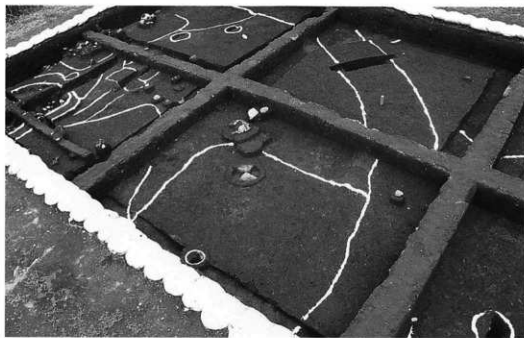
B-1区~B-2区 西から



1号土坑

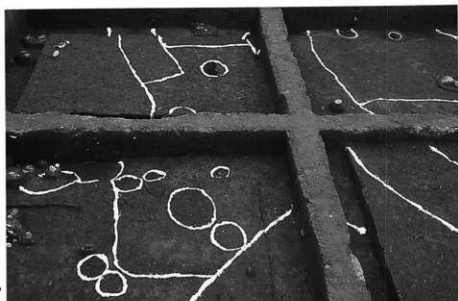


1号土坑 北から

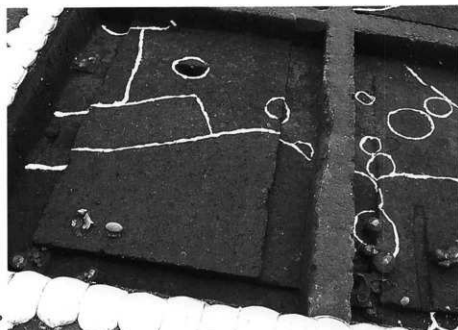


周溝 南西から

A-3区~B-3区 東から



B-3区 南から



B-3区
11号住居跡 遺物出土状況





1号住居跡出土遺物



97-8



97-14



97-10



97-26



97-20



97-18



97-19



97-7



98-6



96-1



96-1

内器面



110-10



104-6



110-6



110-13



112-37



111-28



111-24



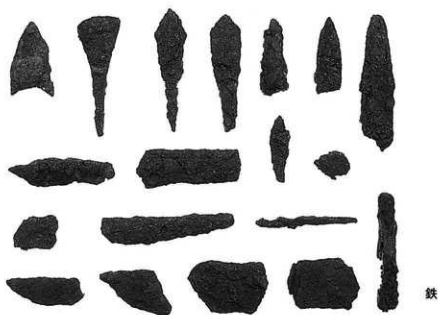
111-26



111-25



111-27



105-3



竹管文の数：5



竹管文の数：6



竹管文の数：7



竹管文の数：8 ?



竹管文の数：9



竹管文の数：10



137-1番地 第1グリッド 遺構検出状況 東から



第1グリッド 溝



第1グリッド拡張部 溝

第1グリッド
5号土坑（甕棺）

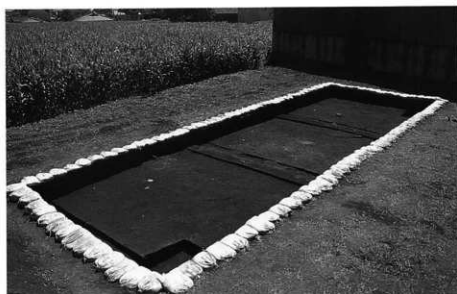


第1グリッド 土器群



第1グリッド 8号土坑





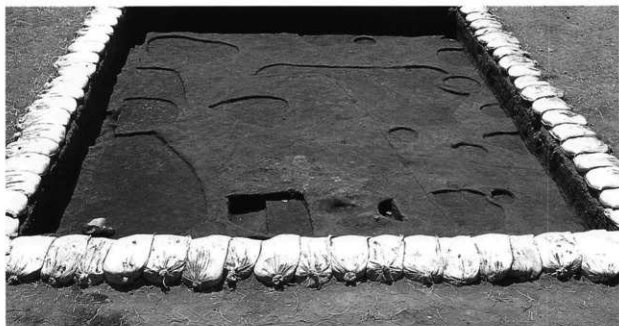
第2グリッド 全景 北西から



第2グリッド カマド



第2グリッド 6号住居跡出土遺物



第3グリッド 全景



132-3

銅鍬



133-1



129-6



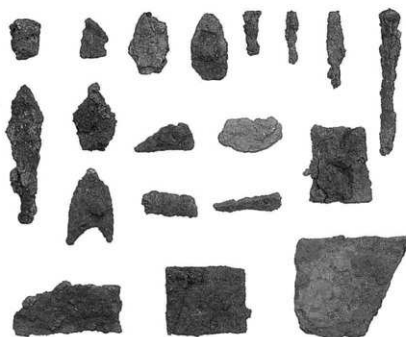
129-7



132-15



127-22



鉄



30・33番地 調査区遠景



第1トレンチ



第2トレンチ



第3トレンチ



第4トレンチ



第4トレンチ 1号溝遺物出土状況



第4トレンチ 1号溝断面

報告書抄録

フリガナ	カトウダヒガシバルイセキ
書名	方保田東原遺跡(8)
副書名	山鹿市文化財調査報告書
巻数	第4集
シリーズ名	
編著者名	山口 健剛
編集機関	山鹿市教育委員会
所在地	〒861-0382 熊本県山鹿市方保田128 (山鹿市出土文化財管理センター) Tn0968-46-5512
発行年月日	西暦2007年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	面 積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かとう だ ひがしばる い せき 方保田 東 原遺跡	熊本県山鹿市 方保田字東原	43208	179	32° 59′ 53″	130° 43′ 04″	20021025 ∨ 20030310	820㎡	史跡内容確認 (国・県補助)
						20030602 ∨ 20031227	352㎡	
	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	集落、墓地	弥生時代～平安、 中世		住居跡、土坑、 溝		小型仿製鏡、銅鏃、 石杵、弥生土器、 古式土師器、須恵 器、土師器、内面 朱土器片多数		弥生時代後期から古墳時 代前期にかけての住居跡、 土坑などを検出。遺跡内 5点目となる完形の小型 仿製鏡が出土。朱精製用 の石杵が住居内から出土

山鹿市文化財調査報告書第4集

方保田東原遺跡 8

平成19年3月31日

編集 山鹿市教育委員会文化課

〒861-0382 山鹿市方保田128

山鹿市出土文化財管理センター内

発行 山鹿市教育委員会

〒861-0501 山鹿市山鹿1026-2

印刷 髙城野印刷所

熊本県上益城郡益城町広崎1630-1

正誤表

『方保田東原遺跡(8)』 山鹿市文化財調査報告書 第4集 熊本県山鹿市教育委員会2007年

本文中

頁	行	原書	原	正
11	左6	PL2, 7, 8	PL2, 6, 7, 8	
13	1	PL5	PL2	
19	右2	5〜8は	5〜7は	
19	右4	9は墓断性の…	8, 9は墓である。9は墓断性の…	
29	右18	PL 9	PL 8, 9	
29	右5	20は墓道口から…	21は墓道口から…	
29	右7	21は側面部であり…	20は側面部であり…	
32	左8	23, 24はいずれも黒曜石製の	23は安山岩製, 24は黒曜石製の	
33		住居名記載漏れ	2号住居跡	
38	第38図	(図タイトル)110-2番地 C-4区	110-2番地 C-1区	
41	左5	3号, 4号住居跡に切られている。	2号, 3号住居跡に切られている。	
42	左16	南西部を8号, 9号土坑に切られ。	南東部を8号, 9号土坑に切られ。	
43	右2	B-3区で検出された。	C-3区で検出された。	
43	右9	西側の12号住居跡	東側の12号住居跡	
43	右10	東側の9号住居跡	西側の9号住居跡	
45	左7	北側の13号住居跡や	北側の13号土坑や	
50	左3	土器の小片が出土した(第57図5, 8)	土器の小片が出土した(第57図4, 5, 8)	
50	右5	A-3区西壁付近で検出された。西半分が	A-3区東壁付近で検出された。東半分が	
50	右8	小片の土器が出土した(第57図4)。	小片の土器が出土したが、小片のため掲載していない	
54	左1	ii 古代, 中世(第65図)	ii 古代, 中世(第64図)	
56	左1	③紡錘車(第67図 巻頭図版2)	③紡錘車(第67図 巻頭図版1)	
56	左4	上面の直径は2.0cm, 下面の直径は2.4cm	上面の直径は4.0cm, 下面の直径は4.8cm	
56	右1	推定直径は28mmで、	推定直径は56mmで、	
56	右2	厚さは最大5.5mmで、	厚さは最大5.5mmで、	
56	右7	④玉類(第68図 巻頭図版2)	④玉類(第68図 巻頭図版1)	
57	右8	1〜4はガラス玉である。	1〜4はガラス玉である。2は1号住居跡から出土した。	
57	左3	巻頭図版2	巻頭図版1	
57	右31	B-2区が9点, C-1区が9点で比較的多く	B-2区が9点, A-2区が4点, C-1区が9点で比較的多く	
62	左10	(2)層序について(第74図)	(2)層序について(第74, 87図)	
62	左25	住居跡が11基, 土坑が10基, 溝が2条	住居跡が6基, 溝が2条	
62	左28	第1トレンチ	第1トレンチ(第73図 PL18, 19)	
62	右32	西壁近くにほぼ円形の炉を	東壁近くにほぼ円形の炉を	
67	左2	10は高坏である。	10は台付鉢である。	
67	左14	幅は2.0cmと推定される。	幅は2.8cmと推定される。	
67	右12	3は壺の上半部と思われる。	3は壺の上半部と思われる。	
71	左1	西部では硬化面が	東部では硬化面が	
71	左3	調査区北東側で検出された	調査区北西側で検出された	
71	右4	4号住居跡は調査区東端で	4号住居跡は調査区西端で	
72	左17	10号土坑は南西部で	10号土坑は南東部で	
74	左3	(1)調査区について(第92図 PL21)	(1)調査区について(第92, 93図 PL21)	
74	左3	(1)調査区について(第92図 PL21)	(1)調査区について(第92, 93図 PL21)	
76	右8	A-1区からA-2区にわたって	A-1区からB-1区にわたって	
76	右9	西の2号住居跡を切っている。	東の2号住居跡を切っている。	
79	左4	土器の集中した出土地は南東隅と	土器の集中した出土地は北東隅と	
79	左7	また、南西隅では	また、北東隅では	
79	右24	西の溝	東の溝	
80	右1	3, 3号住居跡(第101図)	3, 3号住居跡(第100, 101図)	
80	第100図	3号住居の南に「12号住居」の表示がない	9号住居跡に切られる。	
81	27	9号住居跡に切られ、東で14号住居跡を切	北の14号	
81	34	北の4号	北の14号	
81	38	北の4号	北の14号	
83	左7	12号住居跡(第103図)	12号住居跡(第100, 103図)	
83	左33	14号住居跡 記述無し		
83	右26	遺構に付かない遺物	遺構に付かない遺物(第115図)	
87	右4	6鉄	6鉄(第114図)	
91	左3	(1)調査区について(第116図)	(1)調査区について(第116, 117図)	
93	第118図	4号土坑の表示が記載漏れ	3号土坑と昭和41年調査坑の間に記入	
94	左30	土坑が18基であった	土坑が19基であった	
94	左44	調査区西壁中央付近で	調査区東壁中央付近で	
94	右4	南西部にあり、西の4号土坑	南東部にあり、東の4号土坑	
94	右10	5号土坑(PL30)	5号土坑(PL29)	
94	右29	8号土坑(第119, 120図 PL30)	8号土坑(第119, 120図 PL29)	
97	左1	②土器群	②土器群(第119, 121, 122図 PL29)	
99	左4	4は鉢の肩部か。	4は壺の肩部か。	
100	左5	(2)第2グリッド(第128図 PL29)	(2)第2グリッド(第128図 PL30)	
100	左6	第2グリッドでは、住居跡が9基、	第2グリッドでは、住居跡が10基、	
100	右3	2号住居跡に切られている。	2号土坑に切られている。	
100	第128図	図中に「10号住居」の表示が記載漏れ	3区南東隅の住居跡に「10号住居」を記入	
101	左1	6号住居跡(第129図 PL29)	6号住居跡(第129図 PL30, 31)	
101	左4	西の8号	東の8号	
101	左10	出土した(PL29)	出土した(PL30)	
103	左21	南東部は方形(1号, 2号, 4号, 7号)	南東部は方形(1号, 4号, 7号)	
103	左22	不整形(6号)が置かれた。	不整形(2, 6号)が35分より	
103	左29	131図は小型の甕である。	131図は小型丸底甕である。	
103	左34	2区東側で検出された。	2区西側で検出された。	
103	左40	主軸は西北西-東南東	主軸は東北東-西南西	

本文中

頁	行	図番	図	正
103	右41		ii 銅版 (第132図)	ii 銅版 (第132図 PL31)
105	左1		iii 鉄 (第136図)	iii 鉄 (第136図 PL31)
105	左12		(2) 第3グリッド (第133図 PL29)	(2) 第3グリッド (第133図 PL30)
105	左31		南東の2号土坑を切っており	南西の2号土坑を切っており
105		第133図	3号、4号土坑の表示が記載漏れ	1号土坑の南が3号土坑 調査区南東にあるのが4号土坑
107	左6		合計計18基の土坑が検出された。	合計計19基の土坑の土坑が検出された。
109	右3		1/1号溝	1/1号溝 (第143、144図)

土器観察表

頁	行	図番	図	正
125	8図12	P番号	記載漏れ	P-25
125	8図12	黒斑	有	黒斑 有
125	9図25	P番号	記載漏れ	P-17
126	12図3	P番号	記載漏れ	P-43
126	16図1	部位	完形	部位 上半
127	16図8	黒斑	有 煤 有	黒斑 無 煤 無
128	22図2	P番号	記載漏れ	P-206
128	23図6	備考	記載漏れ	備考 煤の境界線が明確
128	23図7	備考	煤の境界線が明確	備考 ナメ刷毛は2種類の刷毛 器面に橙色が浮かぶ
128	23図8	備考	ナメ刷毛は2種類の刷毛 器面に橙色が浮かぶ	備考 無し
128	23図9	備考	記載漏れ	備考 胎土は緻密 肩部に貼付円文 帯 描平行文
128	25図1	備考	胎土は緻密 肩部に貼付円文 帯 波状文 帯描平行文	備考 無し
128	25図2	備考	記載漏れ	備考 口縁部外器面に縦方向の刻突文列あり
128	25図3	備考	口縁部外器面に縦方向の刻突文列あり	備考 無し
128	25図7	備考	記載漏れ	備考 外器面全面煤付着
128	25図8	備考	外器面全面煤付着	備考 無し
129	26図5	備考	口縁部、肩部にベンガラ付着	備考 外器面の頸部、胴部にベンガラ付着
129	27図3	P番号	記載漏れ	P-3
129	27図11	部位	完全復元	部位 脚台欠
129	27図15	P番号	記載漏れ	P-1
129	27図16	P番号	記載漏れ	P-5
129	27図16	部位	完全復元	部位 脚台欠
130	29図1	備考	記載漏れ	備考 両器面にベンガラ付着
130	29図7	P番号	一括	A-3区
130	31図5	備考	記載漏れ	備考 須恵器
130	31図9	P番号	記載漏れ	B-2区
130	31図14	P番号	A-2区	B-2区
130	31図15	P番号	記載漏れ	A-2区
130	31図17	P番号	記載漏れ	A-2区
131	35図1	遺構名	2Gr 2号住	遺構名 2Gr カラン
131	35図1	P番号	記載漏れ	P-34
131	35図2	遺構名	2Gr 2号住	遺構名 2Gr カラン
131	35図3	遺構名	2Gr カラン	遺構名 2Gr 1区 カラン
131	35図4	遺構名	2Gr 2号住	遺構名 2Gr 2区 カラン
131	35図5	遺構名	2Gr 2号住	遺構名 2Gr 2区 カラン
131	39図3	器種	高坏 部位 裾部	器種 台付鉢 部位 台部
132	50図2	P-1		P-2
132	50図6	P番号	記載漏れ	P-16
132	50図6	実測図	sp	実測図 sp56
132	50図8	P番号	記載漏れ	P-1
133	55図2	P番号	記載漏れ	P-36
133	56図6	器種	鉢	器種 甕
134	57図4	記載内容	が異なる	下表と差し替え
134	61図1	61図1		61図2
134	61図2	61図2		61図1
134	61図4	実測図 62 № 特		実測図 sp62 № 1
135	63図3	P番号	C-2区	P番号 表土
135	63図4	器種	高坏	器種 台付鉢
135	63図7	P番号	C-2区	P番号 C-4区
135	63図13	器高	13.2	器高 37.2
135	64図21	備考	黒色土器	備考 須恵器
135	64図25	P番号	記載漏れ	P番号 B-3区
136	66図13	実測図	sp57 № 3	実測図 sp57 № 2
136	76図4	器種	すり鉢 瓦質土器	器種 坏
136	76図5	器種	鉢	器種 坏
137	80図10	器種	台付鉢	器種 高坏
139	96図2	P番号	P-16	P番号 P-4
139	97図10	器種	ミニチュア土器(甕)	器種 ミニチュア土器(甕)
140	97図26	器高	15.6	器高 23.0
140	99図1	器高	16	器高 一
140	99図2	器高	28	器高 一
140	99図3	器高	15.6	器高 一
140	99図4	器高	16	器高 一
140	102図1	器高	5.6	器高 3.1
140	104図2	部位	下半 口縁 一 器高 一	部位 完形復元 口縁 11.2 器高 3.9
140	104図4	部位	上半 器高 18	部位 口縁部 器高 一

土器観察表

頁	行	図番	図	正
140		104図5	部位 上半 器高 18.8	部位 底部欠 器高 一
140		104図6	部位 完形 器高 18.6	部位 完形復元 器高 25.1
141		106図1	遺構名 1号土坑	遺構名 6号土坑
141		109図1	部位 脚部	部位 脚部
141		109図4	部位 底部	部位 脚部
141		110図14	遺構名 遺構外	遺構名 遺構外 A-3区
141		110図15	器種 不明 部位 不明	器種 壺 部位 胴部
141		110図16	器種 高坏	器種 台付鉢
141		110図17	遺構名 遺構外	遺構名 遺構外 A-3区
142		110図19	遺構名 遺構外	遺構名 遺構外 A-3区
142		112図33	遺構名 遺構外A-2区	遺構名 遺構外
142		112図34	遺構名 遺構外 P番号 表土	遺構名 遺構外 A-2区 P番号 表土を削除
142		112図41	器種 鉢	器種 壺
142		112図45	器種 碗	器種 坏
144		124図1	部位 胴部	部位 口唇部
144		125図2	部位 上半	部位 口縁部
144		125図10	器種 壺 部位 上半	器種 不明 部位 口縁部
144		125図13	部位 頭部	部位 鉢部
144		125図13	備考 内面朱付着土器	外器面に赤色顔料付着
144		125図14	器種 壺	器種 不明
145		129図9	内容に誤り	下表と差し替え
145		129図9	黒斑 無 煤 有	黒斑 有 煤 無
145		130図6	P番号 一括	P番号 P~36
145		130図8	器種 壺	器種 壺
145		130図7	器種 鉢	器種 壺
146		131図6	器種 青磁皿	器種 白磁皿
146		132図1	P番号 一括 部位 完形	P番号 2区 P-1 部位 破片
146		132図2	器種 ミニチュア土器(注口)	器種 スプーン形土製品か
146		132図2	備考 注口の先端が欠けている	備考 先端が欠けている
146		132図17	器種 壺	器種 壺か
146		132図18	器種 壺	器種 壺
146		132図19	備考 空欄	備考 須恵器
146		132図23	器種 台坏鉢	器種 高坏か
147		135図5	内容に誤り	下表に修正
147		143図14	部位 下半	部位 鉢部
147		145図2	部位 口縁部欠	部位 胴部

差し替え表

図	No.	遺構名	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考	実測図	No.
57	4	10号土坑	壺	口縁部～ 肩部	(18.0)	—	7.5YR8/4浅 黄褐色	赤褐色粒 角 閃石 長石	やや 良好	口縁部などで 肩 部 ナメ刷毛	口縁部などで 肩部は不明瞭	無	無		34	2
129	9	2Gr. 5号住	壺	頭部～ 肩部	—	—	2.5YR8/3 淡黄色	長石 石英	良好	頭部で 肩部縦刷毛後な で	口縁部～頭部で 肩部へラケズ	有	無	内器面頭部下 位に粘土接合 部が明確に残 る	30	1
130	8	2Gr. 6号住	壺	上半	18.6	—	10YR7/3 にぶい黄緑 色	赤褐色粒 角 閃石 長石 石英	良好	なで	頭部で 肩部へ ラケズ	無	有	肩部外器面に1 本の波状文が わずかに見られ る	30	2
135	5	3Gr. 遺構外	壺	上半	16.0	—	N4/ 灰	長石 雲母	良好	口唇部で 口縁 部～頭部ナメ 刷毛後などで 胴 部 上位タテハ ケ	口縁部で 頭部 ～胴部 ナメ刷 毛後などで	有	無	内器面に筋痕	56	3

鉄観察表

頁	行	図番	図	正
151		30図1	厚さ 0.3 重さ 0.9 実測図No. 32-7	厚さ 0.4 重さ 1.1 実測図No. 11-5
151		30図2	備考 鋳造鉄斧側面部	備考 削除
151		30図5	出土地・遺構 A-1	出土地・遺構 A-2
151		30図6	出土地・遺構 3号溝	出土地・遺構 B-4
151		30図13	出土地・遺構 B-3	出土地・遺構 B-2
151		30図14	長さ3.0 厚さ0.3 重さ7.8 実測図No.32-9	長さ3.5 厚さ0.5 重さ7.9 実測図No.11-7
151		30図15	図番号 30図15 出土地・遺構 B-4	図番号 30図16 出土地・遺構 B-3
151		30図16	図番号 30図16 出土地・遺構 B-2	図番号 30図15 出土地・遺構 A-1
151		30図19	長さ8.4 幅3.0 厚さ0.5 実測図No. 32-8	長さ7.5 幅3.1 厚さ0.7 実測図No. 11-6
151		30図20	記載事項に誤記多数	下表と差し替え
151		30図21	厚さ 8.7	厚さ 0.7
151		33図1	出土地・遺構 2Gr.住居跡	出土地・遺構 2Gr.2号住居跡
151		71図21	厚さ 3.0	厚さ 0.3
151		71図24	器種 手鍬 長さ1.9 幅8.4	器種 鍬 長さ8.4 幅1.9
151		86図3	86図3	86図4
151		86図4	86図4	86図3

差し替え表

図	No.	器種	出土地・遺構	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	実測図	No.
30	20	鋳造鉄斧	1号土坑	7.2	2.9	0.6	37.0	側面部	33	3

※方保田146番地出土の石片を方保田東京遺跡12JP.56第48図141に、方保田30-33番地出土の鉄片を同報告書P.56第48図15~19に掲載

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第4集 方保田東原遺跡8』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第4集 方保田東原遺跡8

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日